918.6
N659s
s
00257874

漱石全集
第十一卷

# 文學論

（關玄館本高一於）影撮月二年十四治明

国立国会
27.2.-5
図書館

257874

"In the beginning God created the heaven and the earth, and the earth was waste and void;
and darkness was upon the face of the deep: and the spirit of God moved upon the face
of the waters. And God said, Let there be light: and there was light. And God saw
the light, that it was good: and God divided the light from the darkness. And God called
the light day, and the darkness he called night. And there was evening and there was
morning, one day."

部一の稿原「論學文」
（赤インキにて認めたるが著者の筆なり）

# 目次


文學論解　二九

五八七

文學

論

# 序

余は此書を公けにするにあたつて、此書が如何なる動機のもとに萌芽し、如何なる機緣のもとに講義となり、今又如何なる事故の爲めに出版せらるゝかを述ぶるの必要あるを信ず。

余が英國に留學を命ぜられたるは明治三十三年にて余が第五高等學校教授たるの時なり。當時余は特に洋行の希望を抱かず、且つ他に余よりも適當なる人あるべきを信じたれば、一應其旨を時の校長及び教頭に申し出でたり。校長及び教頭は云ふ、他に適當の人あるや否やは足下の議論すべき所にあらず、本校は只足下を文部省に推薦して、文部省は其推薦を容れて、足下を留學生に指定したるに過ぎず、足下にして異議あらば格別、左もなくば命の如くせらるゝを穩當とすと。余は特に洋行の希望を抱かずと云ふ迄にて、固より他に固辭すべき理由あるなきを以て、承諾の旨を答へて退けり。

余の命令せられたる研究の題目は英語にして英文學にあらず。余は此點に就て其範圍及び細目を知るの必要ありしを以て時の專門學務局長上田萬年氏を文部省に訪ふて委細を質したり。上田氏の答へには、別段窮屈なる束縛を置くの必要を認めず、只歸朝後高等學校もしくは大學にて教

授すべき課目を專修せられたき希望なりとありたり。是に於て命令せられたる題目に英語とあるは、多少自家の意見にて變更し得るの餘地ある事を認め得たり。かくして余は同年九月西征の途に上り、十一月目的地に着せり。

着後第一に定むべきは留學地なり。オクスフォード、ケムブリツヂは學問の府として遠く吾邦にも聞えたれば、其いづれにか赴かんと心を煩はすうち、幸ひケムブリツヂに在る知人の許に招かるゝの機會を得たれば、觀光かたゞ〳〵彼地へ下る。

こゝにて尋ねたる男の外、二三の日本人に逢へり。彼等は皆紳商の子弟にして所謂ゼントルマンたるの資格を作る爲め、年々數千金を費やす事を確め得たり。余が政府より受る學費は年に千八百圓に過ぎざれば、此金額にては、凡てが金力に支配せらるゝ地に在つて、彼等と同等に振舞はん事は思ひも寄らず。振舞はねば彼土の青年に接觸して、所謂紳士の氣風を窺ふ事さへ叶はず、假令交際を謝して、唯適宜の講義を聞く丈にても給與の金額にては支へ難きを知る。よしや、萬事に意を用ゐて、此難關を切り抜けたりとて、余が目的の一たる書籍は歸朝迄に一卷も購ひ得ざるべし。且思ふ。余が留學は紳商子弟の呑氣なる留學と異なり。英國の紳士は學ばざる可からざる程、結構な性格を具へたる模範人物の集合體なるやも知るべからず。去れど余の如き東洋流に青年の時期を經過せるものが、余よりも年少なる英國紳士に就て其一擧一動を學ぶ事は骨格の出





來上りたる大人が急に角兵衞獅子の巧妙なる技術を學ばんとあせるが如く、如何に感服し、如何に崇拜し、如何に欣慕して、三度の食事を二度に減ずるの苦痛を敢てするの覺悟を定むるも遂に不可能の事に屬す。之を聞く彼等は午前に一二時間の講義に出席し、晝食後は戶外の運動に二三時を消し、茶の刻限には相互を訪問し、夕食にはコレヂに行きて大衆と會食すと。余は費用の點に於て、時間の點に於て、又性格の點に於て到底此等紳士の擧動を學ぶ能はざるを知つて彼地に留まるの念を永久に斷てり。

オクスフォードはケムブリツヂと異なる所なきを信じたれば行かず。北の方蘇國に行かんか、又は海を渡りて愛蘭土に赴かんかと迄考へたれど、雙方とも英語を練習する地としては甚だ不適當なるを以て思ひ留まる。同時に語學を稽古する場所としては倫敦の尤も優れるを認めたり。是に於て此地に笈を卸す。

倫敦は語學練習の地としては尤も便宜なりと云へり。其理由は語るの要なし。只余はしかく信じたるのみならず、今に於てもしかく信じて疑はず。去れど、余は單に語學に上達するの目的を以て英國に來れるにあらず。官命は官命なり、余の意志は余の意志なり。上田局長の言に背かざる範圍内に於て、余は余の意志を滿足せしむるの自由を有す。語學を熟達せしむるの傍余が文學の研究に從事したるは、單に余の好奇心に出でたりと云はんよりは、半ばは上田局長の言を服膺

せるの結果なるを信ず。

誤解を防ぐが爲めに一言す。余が二年の日月を擧げて語學のみに用ゐざりしは、語學を輕蔑して、學ぶに足らずと思惟せるが爲めにあらず。却つて之を重く視過ごしたるの結果のみ。發音にせよ、會話にせよ、文章にせよ、たゞ語學の一部門のみを練習するも二年の歳月は決して長しとは云はず。況んや其全般に渉つて、自ら許す底の手腕を養ひ來るをや。余は指を折つて、余が留學期の長短を考へ又余の菲才を以て、期限内に如何程か上達し得べきかを考へたり。篤と考へたる後、余は到底、余の豫想通りの善果を豫定の日限内に收め難きを悟れり。余の研究の方法が、半ば文部省の命じたる條項を脱出せるは當時の狀態として蓋し已を得ざるに出づ。

文學を研究せば如何なる方法を以て、如何なる部門を修得すべきかは次に起る問題なり。回顧すれば、余の淺薄なる、自ら此問題を提起して、遂に何等の斷案に逢着せざりしを悲しむ。余が取れる方針は遂に機械的ならざるを得ず。余は先づ走つて大學に赴き、現代文學史の講義を聞きたり。又個人として、私に教師を探り得て隨意に不審を質すの便を開けり。

大學の聽講は三四ケ月にして已めたり。豫期の興味も智識をも得る能はざりしが爲めなり。私宅教師の方へは約一年程通ひたりと記憶す。此間余は英文學に關する書籍を手に任せて讀破せり。無論論文の材料とする考もなく、歸朝の後教授上の便に供するが爲めにもあらず、只漫然と出來





得る限り多くの頁を飜へし去りたるに過ぎず。事實を云へば余は英文學卒業の學士たるの故を以て選拔の上留學を命ぜらるゝ程、斯道に精通せるものにあらず。卒業の後東西に徂徠して、日に中央の文壇に遠ざかれるのみならず、一身一家の事情の爲め、擅まに讀書に耽けるの機會なかりしが故、有名にして人口に膾炙せる典籍も大方は名のみ聞きて、眼を通さゞるもの十中六七を占めたるを平常遺憾に思ひたれば、此機を利用して一册も餘計に讀み終らんとの目的以外には何等の方針も立つる能はざりしなり。かくして一年餘を經過したる後、余が讀了せる書册の數を點檢するに、吾が未だ讀了せざる書册の數に比例して、其甚だ僅少なるに驚ろき、殘る一年を擧げて、同じき意味に費やすの頗る迂濶なるを悟れり。余が講學の態度はこゝに於て一變せざるを得ず。

（青年の學生につぐ。春秋に富めるうちは自己が專門の學業に於て何者をか貢獻せんとする前、先づ全般に通ずるの必要ありとし、古今上下數千年の書籍を讀破せんと企つる事あり。かくの如くせば白頭に至るも遂に全般に通ずるの期はあるべからず。余の如きものは未だに英文學の全體に通ぜず。今より二三十年の後に至るも依然として通ぜざる可しと思ふ。）

時日の逼れると、檢束なき讀書法が、當時の余をして、茫然と自失せしめたる外に、余を促がして、在來の軌道外に逸せしめたる他の原因あり。余は少時好んで漢籍を學びたり。之を學ぶ事短かきにも關らず、文學は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左國史漢より得たり。ひ

そかに思ふに英文學も亦かくの如きものなるべし、斯の如きものならば生涯を擧げて之を學ぶも、あながちに悔ゆることなかるべしと。余が單身流行せざる英文學科に入りたるは、全く此幼稚にして單純なる理由に支配せられたるなり。在學三年の間は物にならざる羅甸語に苦しめられ、物にならざる獨逸語に窮し、同じく物にならざる佛語さへ、うろ覺えに覺えて、肝心の專門の書は殆んど讀む遑もなきうちに、既に文學士と成り上りたる時は、此光榮ある肩書を頂戴しながら、心中は甚だ寂寞の感を催ふしたり。

春秋は十を連ねて吾前にあり。學ぶに餘暇なしとは云はず。學んで徹せざるを恨みとするのみ。卒業せる余の腦裏には何となく英文學に欺かれたるが如き不安の念あり。余は此の不安の念を抱いて西の方松山に赴むき、一年にして、又西の方熊本にゆけり。熊本に住する事數年未だ此不安の念の消えぬうち倫敦に來れり。倫敦に來てさへ此不安の念を解く事が出來ぬなら、官命を帶びて遠く海を渡れる主意の立つべき所以なし。去れど過去十年に於てすら、解き難き疑團を、來る一年のうちに晴らし去るは全く絶望ならざるにもせよ、殆んど覺束なき限りなり。

是に於て讀書を廢して又前途を考ふるに、資性愚鈍にして外國文學を專攻するも學力の不充分なる爲め會心の域に達せざるは、遺憾の極なり。去れど余の學力は之を過去に徵して、是より以後左程上達すべくもあらず。學力の上達せぬ以上は學力以外に之を味ふ力を養はざる可からず。





而してかゝる方法は遂に余の發見し得ざる所なり。飜つて思ふに余は漢籍に於て左程根底ある學力あるにあらず、然も余は充分之を味ひ得るものと自信す。余が英語に於ける知識は無論深しと云ふ可からざるも、漢籍に於けるそれに劣れりとは思はず。學力は同程度として好惡のかく迄に岐かるゝは兩者の性質のそれ程に異なるが爲めならずんばあらず、換言すれば漢學に所謂文學と英語に所謂文學とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず。

大學を卒業して數年の後、遠き倫敦の孤燈の下に、余が思想は始めて此局所に出會せり。人は余を目して幼稚なりと云ふやも計りがたし。余自身も幼稚なりと思ふ。斯程見易き事を遙々倫敦の果に行きて考へ得たりと云ふは留學生の恥辱なるやも知れず。去れど事實は事實なり。余が此時始めて、こゝに氣が付きたるは恥辱ながら事實なり。余はこゝに於て根本的に文學とは如何なるものぞと云へる問題を解釋せんと決心したり。同時に餘る一年を擧て此問題の研究の第一期に利用せんとの念を生じたり。

余は下宿に立て籠りたり。一切の文學書を行李の底に收めたり。文學書を讀んで文學の如何なるものなるかを知らんとするは血を以て血を洗ふが如き手段たるを信じたればなり。余は心理的に文學は如何なる必要あつて、此世に生れ、發達し、頽廢するかを極めんと誓へり。余は社會的に文學は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと誓へり。

余は余の提起せる問題が頗る大にして且つ新しきが故に、何人も一二年の間に解釋し得べき性質のものにあらざるを信じたるを以て、余が使用する一切の時を擧げて、あらゆる方面の材料を蒐集するに力め、余が消費し得る凡ての費用を割いて參考書を購へり。此一念を起してより六七ケ月の間は余が生涯のうちに於て尤も鋭意に尤も誠實に研究を持續せる時期なり。而も報告書の不充分なる爲め文部省より譴責を受けたるの時期なり。

余は余の有する限りの精力を擧げて、購へる書を片端より讀み、讀みたる箇所に傍註を施こし、必要に逢ふ毎にノートを取れり。始めは茫乎として際涯のなかりしものゝうちに何となくある正體のある様に感ぜられる程になりたるは五六ケ月の後なり。余は固より大學の教授にあらず、從つて之を講義の材料に用ゐるの必要を認めず。又急に之を書物に纏むるの要なき身なり。當時余の豫算にては歸朝後十年を期して、充分なる研鑽の結果を大成し、然る後世に問ふ心得なりし。

留學中に余が蒐めたるノートは蠅頭の細字にて五六寸の高さに達したり。余は此のノートを唯一の財産として歸朝したり。歸朝するや否や余は突然講師として東京大學にて英文學を講ずべき依囑を受けたり。余は固よりかゝる目的を以て洋行せるにあらず、又かゝる目的を以て歸朝せるにあらず。大學にて英文學を擔任教授する程の學力あるにあらざる上、余の目的はかねての文學論を大成するに在りしを以て、教授の爲めに自己の宿志を害せらるゝを好まず。依つて一應は之





を辭せんと思ひしが、留學中書信にて東京奉職の希望を洩らしたる友人（大塚保治氏）の取計にて、殆んど余の歸朝前に定まりたるが如き有様なるを以て、遂に淺學を顧みず、依托を引き受くる事となれり。

講義を開く前には如何なる問題を擇ばんかと苦心せるが、余は今日文學を研究する學生に取つては、余が文學論を紹介するの、尤も興味多く、且つ時機に適せるを感じたり、余は田舍に教師となり、田舍から洋行し、洋行から突然東京に舞ひ戻つたる人間なり。當時わが中央文壇の潮流が如何なる方面に動きつゝあるかは、殆んど知るべくもあらず。去れど摯實なる勞力に因つて得たる結果を尤も高等なる學問を修めて、未來の文運を支配する青年の前に披瀝するは余の最も光榮とする所なるを以て先づ此の問題を選んで學生諸子の批判を仰がんと決意せり。

不幸にして余の文學論は十年計畫にて企てられたる大事業の上、重に心理學社會學の方面より根本的に文學の活動力を論ずるが主意なれば、學生諸子に向て講ずべき程體を具せず。のみならず文學の講義としては餘りに理路に傾き過ぎて、純文學の區域を離れたるの感あり。余の勞力はこゝに於て二途に出でたり。一は纏まらぬものを、既に蒐集せる材料にて、ある程度迄具體的に組織する事なり。二は略系統的に出來上がりたる議論を可成純文學の方面に引き付けて講說する事なり。

身心の健康及び使用時間の許さぬうちに在つて、此兩者を能くし得たりとは決して思はず。去れども其企てが如何なる事實となつてあらはれたるかは、此書の內容の證明する所なり。講義は毎週三時間にて、明治三十六年九月に始まつて三十八年六月に渡り、前後二學年にして終る。講義の當時は余が豫期せる程の刺激を學生諸子に與へざりしに似たり。

第三學年にも此講義の稿を續くべかりしを種々の事情に遮ぎられて果さず、已に講述せる部分の意に滿たぬ所、足らざる所を書き直さんとして又果さず、約二年の間其儘にて筐底に橫はりしを、書肆の乞に應じて公けにする事となれり。

公けにする事を諾したる後も、身邊の事情に束縛せられて、わが舊稿を自身に淨寫する暇さへ見出し得ず。已を得ず、友人中川芳太郎氏に章節の區分目錄の編纂其他一切の整理を委托す。中川氏は此講義のある部分に出席したる上、博洽の學と篤實の質をかねたれば、余の知人中にて、かゝる事を處理するに於て尤も適當の人なり。余は深く氏の好意を德とす。苟しくも此書の存せん限り、氏の名を忘れざるを期す。氏の親切によらずんば、現在の余は遂に此書を出版するの運びに至らざりしならん。況んや中川氏他日若し文界に名を成さば、此書或は氏の名によつて、世に記憶せらるゝに至るも計るべからざるをや。

以上述べたる通り、此書は余の熱心なる勞力によつて組織せられたるものなり。但十年の計畫





を二年につゞめたる爲め(名は二年なるも出版の際修正に費やしたる時間を除いて實際に使用せるは二夏なり)又純文學學生の所期に應ぜんとして、本來の組織を變じたる爲め、今に至つて未成品にして、又未完品なるを免がれず。去れども學界は多忙なり。多忙なる學界に於て、余は他より一倍多忙なり。足らざるを補ひ、正すべきを正し、繼ぐべきを繼いで、然る後、世に問はんとすれば、余が身邊の狀況にして一變せざるよりは、生涯の日月を費やすとも遂に世に問ふの期はあるべからず。是余が此未定稿を版行する所以なり。

既に未定稿なるが故に現代の學徒を敎へて、文學の何物たるかを知らしむるの意にあらず。世の此書を讀む者、讀み終りたる後に、何等かの問題に逢着し、何等かの疑義を提供し、或は書中云へるものよりも一步を進め二步を拓きて向上に路を示すを得ば余の目的は達したりと云ふべし。學問の堂を作るは一朝の事にあらず、又一人の事にあらず、われは只自己が其建立に幾分の勞力を寄附したるを、義務を果たしたる如くに思ふのみ。

倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英國紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を營みたり。倫敦の人口は五百萬と聞く。五百萬粒の油のなかに、一滴の水となつて辛うじて露命を繫げるは余が當時の狀態なりといふ事を斷言して憚からず。清らかに洗ひ濯げる白シヤツに一點の墨汁を落したる時、持主は定めて心よからざらん。

墨汁に比すべき余が乞食の如き有様にてエストミンスターあたりを徘徊して、人工的に煤烟の雲を漲らしつゝある此大都會の空氣の何千立方尺かを二年間に吐呑したるは、英國紳士の爲めに大に氣の毒なる心地なり。謹んで紳士の模範を以て目せらるゝ英國人に告ぐ。余は物數奇なる醉興にて倫敦迄踏み出したるにあらず。個人の意志よりもより大なる意志に支配せられて、氣の毒ながら此歳月を君等の麺麭の恩澤に浴して累々と送りたるのみ。二年の後期滿ちて去るは、春來つて雁北に歸るが如し。滯在の當時君等を手本として萬事君等の意の如くする能はざりしのみならず、今日に至る迄君等が東洋の豎子に豫期したる程の模範的人物となる能はざるを悲しむ。去れど官命なるが故に行きたる者は、自己の意思を以て行きたるにあらず。自己の意志を以てすれば、余は生涯英國の地に一歩も吾足を踏み入るゝ事なかるべし。從つて、かくの如く君等の御世話になりたる余は遂に再び君等の御世話を蒙るの期なかるべし。余は君等の親切心に對して、其親切を感銘する機を再びする能はざるを恨みとす。

歸朝後の三年有半も亦不愉快の三年有半なり。去れども余は日本の臣民なり。不愉快なるが故に日本を去るの理由を認め得ず。日本の臣民たる余は、五千萬人中に生息して、少くとも五千萬分一の光榮と權利を支持せんと欲す。此光榮と權利を五千萬分一以下に切り詰められたる時、余は余が存在を否定し、若くは余が本國を去るの擧に出づる能はず、寧ろ力の





繼く限り、之を五千萬分一に回復せん事を努むべし。是れ余が微少なる意志にあらず。余が意志以上の意志なり。余が意志以上の意志は、余の意志を以て如何ともする能はざるなり。余の意志以上の意志は余に命じて、日本臣民たるの光榮と權利を支持する爲めに、如何なる不愉快をも避くるなかれと云ふ。

著者の心情を容赦なく學術上の作物に冠して其序中に詳敘するは妥當を缺くに似たり。去れど此學術上の作物が、如何に不愉快のうちに胚胎し、如何に不愉快のうちに組織せられ、如何に不愉快のうちに講述せられて、最後に如何に不愉快のうちに出版せられたるかを思へば、他の學者の著作として毫も重きをなすに足らざるにも關せず、余に取つては是程の仕事を成就したる丈にて多大の滿足なり。讀者にはそこばくの同情あらん。

英國人は余を目して神經衰弱と云へり。ある日本人は書を本國に致して余を狂氣なりと云へる由。賢明なる人々の言ふ所には僞りなかるべし。たゞ不敏にして、是等の人々に對して感謝の意を表する能はざるを遺憾とするのみ。

歸朝後の余も依然として神經衰弱にして兼狂人のよしなり。親戚のものすら、之を是認するに似たり。親戚のものすら、之を是認する以上は本人たる余の辯解を費やす餘地なきを知る。たゞ神經衰弱にして狂人なるが爲め、「猫」を草し「漾虚集」を出し、又「鶉籠」を公けにするを得た

りと思へば、余は此神經衰弱と狂氣とに對して深く感謝の意を表するの至當なるを信ず。

余が身邊の狀況にして變化せざる限りは、余の神經衰弱と狂氣とは命のあらん程永續すべし。永續する以上は幾多の「猫」と、幾多の「漾虛集」と、幾多の「鶉籠」を出版するの希望を有するが爲めに、余は長しへに此神經衰弱と狂氣の余を見棄てざるを祈念す。

たゞ此神經衰弱と狂氣とは否應なく余を驅つて創作の方面に向はしむるが故に、向後此「文學論」の如き學理的閑文字を弄するの餘裕を與へざるに至るやも計りがたし。果して然らば此一篇は余が此種の著作に指を染めたる唯一の紀念として、價値の乏しきにも關せず、著作者たる余に取つては活版屋を煩はすに足る仕事なるべし。併せて其由を附記す。

明治三十九年十一月

夏目金之助





始め此著は昨年内を限りとして出版の豫定なりしも幾多の事情のため其期を過ぐること三月にして今漸くこれを公にするを得たり。遲延の主因としては左のことあり。

原稿整理の囑をうけし余に日々の業務ありて時間の全部を以て、これに當る能はざりしこと、

原稿は整理の成るに隨つて先生の校閲を乞ひしも、改訂を要する節頗る夥く殊に最後の一編の如き新に全部先生の起稿を煩すに至り、而して此間先生は創作に忙はしくして、これに用ふべき日子の極めて得難かりしこと、

これを印刷に附するに方りても原稿の全部を擧げて託すること能はざりしを以て勢ひ其進捗遲々として督促其效を致さざりしこと。

此著に收むる諸編は元來大規模の研究の一部を爲すものにして全然未定稿なりしなり。先生會〻書肆の懇望にあひ其出版を許容したりと雖も、固より先生に完全を期する意なく、隨つて其校正の如きも最初一二編は單に字句の修正にのみ限られしも、中頃、整理の際省略に過ぎ論旨の貫徹を缺く節多かりしを以て、先生の筆を添ふること漸く密に、遂に第四編の終り二章及び第五編の全部に至りては悉く先生により稿を新にせざるべからざりしなり。故に前後兩半を比すれば議論の繁簡の程度一樣ならず、又先生が原稿に加へし改訂增補も其身邊の事情の推移に伴ひ、章節により著しく精粗の差あり、而して其精ならざる章にありては議論の發展に滑かならざる跡な

きを保せず。全部の訂正を終り、先生更に遡つて、初めに簡なりし部分を改むるの意ありしと雖も、參考すべき前半は既に印刷を了へたるものなりしを以て、また如何ともなす能はざりしなり。諸編に散見する文體の不一致の如き亦如此事情に基くこと多し。

菲才淺學にして先生を勞すること甚しく遂に其嘱を全くすること能はず、更に其刊行の遲延を招きしは余の至憾なり。

明治四十年三月

中川芳太郎





# 目次


## 第一編　文學的内容の分類……二九

第一章　文學的内容の形式……二九

(F+f)——心理的説明

第二章　文學的内容の基本成分……三七

簡單なる感覺的要素——觸覺——溫度——味覺——嗅覺——聽覺——視覺——暉——色——形——運動——人類の内部心理作用——恐怖——怒——爭鬪——同感——Godiva——父子間の同感——Rhodopè——意氣——*Coriolanus*——忍耐——Viola——Griselda——兩性的本能——Coleridge の *Love*——Browning の *Love among the Ruins*——複雜情緒——嫉妬——忠義——*Richard II*——抽象的觀念——超自然的事物——概括的眞理——格言

第三章　文學的内容の分類及び其價値的等級……一一四

感覺F——人事F——超自然F——知識F——審美F——Ruskinの美の本源說——
耶蘇教の神——極樂——幽靈——妖婆——變化——人間の感應——超自然Fの文學的
效果——人生と文學

第二編　文學的內容の數量的變化……

第一章　Fの變化……一四八
識別力の發達——事物の增加
第二章　fの變化……一四九
感情轉置法——*Pot of Basil*——感情擴大法——感情固執法
第三章　fに伴なふ幻惑……一五一
[作家の材料に對する場合]——聯想の作用にて醜を化して美となす表出法——描き方
の妙——Fの奇警——部分的描寫——人事Fの兩面解釋——Shelley——格言の矛盾
[讀者の作品に對する場合]——感情の記憶——Mrs. Siddons——自己關係の抽出——
Gloster——善惡の抽出——Art for Art 派——非人情——崇高——詩人 Coleridge の
火事見物——不德——道化趣味——Falstaff——純美感——知的分子の除去





第四章　悲劇に對する場合……二一三
苦痛に對する嗜好——人間の冒險性——自殺組——贅澤家の悲哀

第三編　文學的內容の特質……二四〇
集合意識——言語の能力——Fの差異——文學者のF
第一章　文學的Fと科學的Fとの比較一汎……二四四
How と Why——態度の差——描寫法の差——Ariosto——文學者の解剖——時空の
關係——數字
第二章　文藝上の眞と科學上の眞……二八一
Millet——誇大法——省略選擇法——組み合せ——文藝上の眞の推移

第四編　文學的內容の相互關係……二八六
眞を傳ふる手段——聯想法
第一章　投出語法……二八七
意義——抽象事物の擬人法——其價值——十八世紀文學

第二章　投入語法……二九九
意義——投出語法との關係
第三章　自己と隔離せる聯想……三〇八
範圍の廣大——寫生——條件——古典の引用——Homeric simile——Arnold
第四章　滑稽的聯想……三一四
特質——文學的價値
第一節　口合……三二六
條件——Hood——無意識的洒落
第二節　頓才……三三六
第五章　調和法……三四一
效果——日本人の自然に對する愛——自然界の景物——俳文學——人工的調和
第六章　對置法……三六四
調和法の一變體
第一節　緩勢法……三六五
第二節　强勢法……三六八





［附］　假對法……三七九
*Macbeth* の門衛——正反兩解
第三節　不對法……三八八
Fielding の *Tom Jones*——Sterne の *Tristram Shandy*
第七章　寫實法……三九六
他の諸法との關係——寫實法の效果——Wordsworth の主張——材料の寫眞——Crabbe——Austen——Brontë——浪漫、理想兩派——其特質
第八章　間隔論……四二八
形式の幻惑——歷史的現在——批評的作品——同情的作品——編中人物の位地變更——Burns と Goldsmith——*Ivanhoe*——*Samson Agonistes*

## 第五編　集合的F……四五七

第一章　一代に於る三種の集合的F……四五九
模擬的F——能才的F——天才的F——天才の核——天才獨特の意識波動——總括的批評

第二章　意識推移の原則……四七八
暗示法——有力なるFなき場合——Fが自己の傾向による場合——Fに一定の傾向ある場合——推移の法則
第三章　原則の應用(一)……四八九
推移の自然と必要——俚俗——推移は必ずしも進歩にあらず
第四章　原則の應用(二)……五〇二
豫期——其弊と效果
第五章　原則の應用(三)……五〇九
推移の次第——典型派——浪漫派——沙翁崇拜——Spenser 復活——反動——例外——Ruskin——Grant Allen
第六章　原則の應用(四)……五三八
焦點意識の競爭——英文學史上の例證——Pre-Raphaelites——Impressionists——成功の意義——成功は才に比例するものにあらず
第七章　補遺……五六八
(一)文界に及ぼす暗示の種類……五六八





(い)物質的狀況と文學——Elizabethan Age
(ろ)政治と文學——佛國革命
(は)道德と文學
(二)新舊精粗に關して暗示の種類……五七五
(三)暗示の方向と其生命……五七九

# 第一編　文學的內容の分類

## 第一章　文學的內容の形式

凡そ文學的內容の形式は(F+f)なることを要す。Fは焦點的印象又は觀念を意味し、fはこれに附着する情緒を意味す。されば上述の公式は印象又は觀念の二方面卽ち認識的要素(F)と情緒的要素(f)との結合を示したるものと云ひ得べし。吾人が日常經驗する印象及び觀念はこれを大別して三種となすべし。

(一) Fありてfなき場合卽ち知的要素を存し情的要素を缺くもの、例へば吾人が有する三角形の觀念の如く、それに伴なふ情緒さらにあることなきもの。

(二) Fに伴なうてfを生ずる場合、例へば花、星等の觀念に於けるが如きもの。

(三) fのみ存在して、それに相應すべきFを認め得ざる場合、所謂 "fear of everything and

fear of nothing." の如きもの。卽ち何等の理由なくして感ずる恐怖など、みなこれに屬すべきものなり。Ribot は其著『情緒の心理』に此種の經驗を四大別して更に附記して曰く「かくの如く人體諸機能の合成的結果卽ち普通感覺の變化に基づき毫も知的活動の支配を受けざる一種純正、しかも自治的方面を感情に於て見出だすことを得。」

以上三種のうち、文學的內容たり得べきは(二)にして、卽ち(F+b)の形式を具ふるものとす。

(一)につき詳述せんに其適例なる幾何學の公理或は Newton の運動法則「物體は外より力の作用するにあらざれば靜止せるものは終始其位置に靜止し、運動しつゝあるものは等速度を以て一直線に進行す」の如き文字は單に吾人の知力にのみ作用するものにして其際毫も何等の情緒を喚起せず。或は云ふ彼の科學者が發見若しくは問題解決に際し最高度の情緒を感じ得るの理如何。然り此情的要素は發見等の觀念に關聯するものなること明らかなれども、是れ決して必然の附屬物にあらず、かの概括的事實より法則を求め、實驗より原理を得たる時の快感はこれ成功に對する喜びにして決して其法則、原理に性質上附着するものにはあらず、科學的知識其ものに情緒を誘出し得る元素あるにあらずして、吾人が知的活動を適度に使用したる意識に對する喜びに外ならず、故に此種のものは文學の內容と目すべきものにあらず。

(三)に至りては、元來Fを缺くを以て從つてfを通ずる媒介觀念を有せず。若し之を自ら認識し





得たりとするも果してこれを他のfと確然區別し得るや甚だ覺束なし。但し注目すべきは抒情詩中往々漫然たる情を此種の形式により發表せるもの古來少なからぬことなり。一例を擧ぐれば、

"Out of the day and night
A joy has taken flight;
Fresh spring, and summer, and winter hoar,
Move my faint heart with grief, but with delight
No more—Oh, never more!"—Shelley, *A Lament.*

此歌は悲しみの原因につき毫も云ふところなし、何故の悲しみか、そは審らかならず。たゞ哀れなりと歌ひしにて戀のためか、病のためか、吾人は知るに由なし。詩人はこれによりたゞ悲哀と云ふ情を傳ふるのみ。凡そ此種の詩を味はふには自然三種の方法あり。(一)讀むもの先づFを想像にて補充して(F+b)なる形式に改むるか、或は(二)悲哀なる觀念を想起し其內容を充分に味はひ、しかして後、それに對し吾人の同感を傾くるか、或は(三)前述(一)(二)を結合せざるべからず。かくの如く(一)(二)は共に(F+b)の形式に歸着し得るものにして其差は(一)悲哀の原因+悲感、(二)悲哀の觀念+悲感なるに過ぎず。但し如此手續は吾人日常詩文賞玩の際殆ど無意識に履行するところのものにして若し果して意識的にこれを行ふの必要あらんには詩は常に一種の苦痛を伴ふものなるべし。

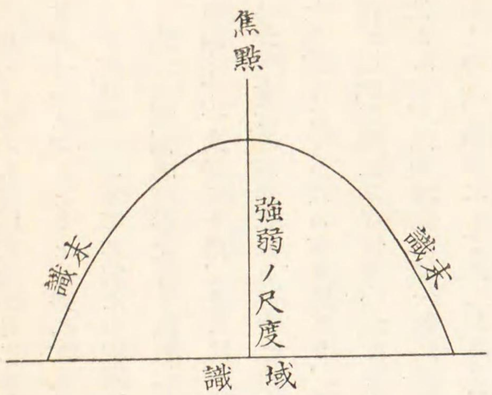
さきに余はFを焦點的印象若しくは觀念なりと說きしが、こゝに焦點的なる語につき更に數言を重ぬるの必要あるを認む。而して此說明は溯りて意識なる語より出立せざるべからず。意識とは何ぞやとは心理學上容易ならざる問題にして、或專門家の如きは、これを以て到底一定義に收め難きものと斷言せし程なれば、心理學の研究にあらざる此講義に於て徒らに此難語に完全なる定義を與へんと試みるの不必要なるを思ふ、たゞ意識なるものの概念の幾分を傳ふれば足れり。意識の說明は「意識の波」を以て始むるを至便なりとす。此點に關しては Lloyd Morgan が其著『比較心理學』に說くところ最も明快なるを以て、此處には重に同氏の說を採れり。

先づ意識の一小部分卽ち意識の一瞬時をとり之を檢するに必ず其うちに幾多の次序、變化あることを知る。Morgan 氏の話を以てせば「意識の任意の瞬間には種々の心的狀態絕えず現はれ、やがては消え、かくの如くして寸刻と雖も其內容一所に滯ることなし。」吾人はこれを事實に徵して證すること容易なり。

例へば人あり、St. Paul's の如き大伽藍の前に立ち其宏壯なる建築を仰ぎ見て、先づ下部の柱より漸次上部の欄間に目を移し、遂に其最高の半球塔の尖端に至ると假定せんに、始め柱のみ見つむる間は判然知覺し得るもの只其柱部にかぎられ、他は單に漠然と視界に入るに過ぎず、而して目を柱より欄間に移す瞬間には柱の知覺薄らぎ初めて、同時に欄間の知覺これより次第に明瞭








に進むを見るべし。欄間より半球塔に至る間の現象も亦同じ。讀みなれたる詩句を誦し、聞きなれたる音樂を耳にする時亦斯の如きものあり。卽ち或意識狀態の連續內容をとり其一刻をぷつりと切斷して之を觀察する時は、其前端に近き心理狀態次第に薄らぎ初め、後端に接する部は、これと反對に漸次其明瞭の度を加ふるものなるを知る。こは只吾人日常經驗上しか感ずるに止まらず既に正確なる科學的實驗の保證を經たるものとす。（尙詳しくは Scripture 氏著『新心理學』第四章參照）

意識の時々刻々は一個の波形にして之を圖にあらはせば上圖の如し。斯の如く波形の頂點卽ち焦點は意識の最も明確なる部分にして、其部分は前後に所謂識末なる部分を具有するものなり。而して吾人の意識的經驗と稱するものは常に此心的波形の連續ならざるべからず。Morgan 氏式を以て此連續の樣を示せば、

A B C D E F etc.
a′ b′ c′ d′ e′ etc.
a″ b″ c″ d″ etc.

卽ちAなる焦點的意識がBに移るときは、Aはaなる邊端的意識と變じて存在し、Bが更にCに轉ずるときaとbとは共に意識の波の兩邊（原）となるなり。かくして余が所謂Fと稱するところのもの意識中にありて如何なる位置を占むるやは、稍讀者の理會したるところなるべし。

上述の解剖的波形說より推論して此法則の應用範圍を擴大するときには凡そ意識の一刻にFある如く、十刻、二十刻、さては一時間の意識の流にも同じくFと稱し得べきものあるにはあらざるか。今吾人が趣味ある詩歌を誦すること一時間なりと假定せんに、其間吾人の意識が絕えずaなる言葉よりbなる言葉に移り、更にcに及ぶこと以上の理により明らかなれども、かく順次に消え順次に現はるゝ幾多小波形を一時間の後に於て追想するときは其集合せる小F個々のものをはなれて、此一時間內に一種焦點的意義（前後各一時間の意識に對し）現然として存在するにはあらざるか。半日にも亦如此Fあり、一日にも亦然り、更にこれを以て推せば一年十年に渡るFもあり得べく、時に終生一個のFを中心とすることも少なからざるべし。一個人を堅に通じてFある如く一世一代にも同樣一個のFあること亦自明の事實にして、かゝる廣義に於てFを分類すれば、

(一)一刻の意識に於けるF、
(二)個人的一世（原）の一時期に於けるF、



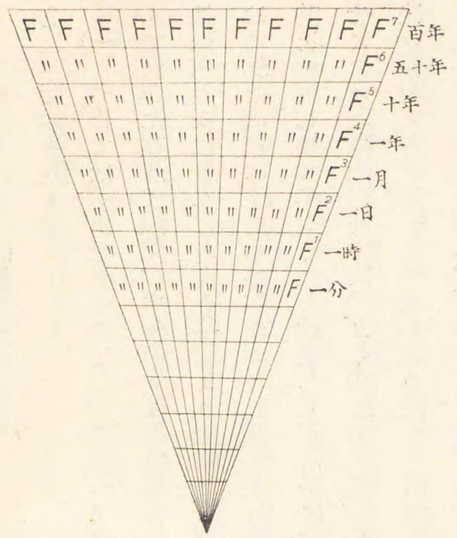


(三)社會進化の一時期に於けるF、

となり得べきなり。

(一)につきては更に說明の要なし。(二)例へば幼き頃のFは玩具人形等、少年には格鬪、冒險、進んで青年に至れば戀愛、中年のFは金錢權勢其重要のものなるべく、老年に至りては衆生濟度其他未來の世に關しての沈思等固より際限なし。かくの如き時期的Fの推移につきても上述波形說はこれを同樣に適用し得べきことを證せんが爲、一例を擧ぐれば、人あり或時期の間、頻りに漢詩を愛讀し後數年全く之を放棄して更に手にすることなかりしが、偶然再び之を繙きたりと假定せよ。如此瞬間に於ては、よく其意義を解し得るにも關せず、其印象詩境共に漠然として明瞭を缺き從つて湧き出づる興味も頗る淡し。然れども暫く習讀を重ぬれば詩中の情景自ら腦裡に整ひ其感興遂に極度に達し、更に之を連續するときは漸次再び無趣味の域に傾くに至るべし。これ其漢詩に對する意識次第に識末より焦點に登り更に再び識末に下るに基づくものと云ひ得べし。(三)一世一代のF（原）は通語の所謂時代思潮（Zeitgeist）と稱するものにして更に東洋風の語を以てせば勢これなり。古來勢は何ぞやと問へば曰く天なりと答へ命なりと呼ぶ。蓋しXを以てYを解くと類を同じくするものなりと雖も此一語は余が述ぶるところの廣義のFをよく表言して遺憾なし。凡そ古今の歷史とはかゝる時代的Fの不斷の變遷をたどるものに過ぎず。

近く例を我邦にとりて言へば撰夷、佐幕、勤王の三觀念は四十餘年前維新のFにして卽ち當代意識の焦點なりしなり。されば假に沙翁を凌ぐ名人其世にありとするも時代のFは到底之を容る餘裕あらざりしなるべく、若しくは第二のM. Arnold ありて *Sweetness and Light*（文藝教育を鼓吹せる有名なる論文）の理をとくも恐らくは、かくの如き世に何人の視聽をも動かし得ざりしならん。時の意識これを許さざればなり。かの賢人、偉人も勢には抗すべからずとは此理を示したるものに過ぎず。




如此意識波形の說竝びにFの觀念は微妙なる意識單位より出立して廣く一代を貫く集合意識に適用すべきものなること明らかにして、圖を以て其大略を示せば上の如し。

卽ち竪なる小室は個人意識の一刻より百年に至るFの次序變化を示すものなれども、Fより$F^1$に、$F^1$より$F^2$に變化するの意味にはあらず、一刻の焦點的意識をF、一時間のそれを$F^1$にて表はしたるに過ぎず。尙橫列なるは時代を同じ





くする民衆の集合意識にして、例へば五十年の部を列ぬれば一代の五十年間に於るFを集合したるものと認め得。而して此橫列のFは大槪或點に於て一致すべく、吾人は其點を稱して其五十年の輿論とし、Zeitgeist と名づけ或は時にこれを勢と呼ぶ。

## 第二章　文學的內容の基本成分

余は前章に於て文學的內容の(F+f)なるべきを說きしが、更に此處には卿か其內容の分類を試み、往々文學をもつて單に高尙なる知的娛樂の具と目し、或は文學に道德の分子なし抔唱ふる一派の人々に文學の範圍はしかく偏狹ならざるを示さんとす。

研究の第一着として先づ其基礎たるべき簡單なる感覺的要素より說き起すべし。これを說き起すに當つてはかのGroos氏が『人の戲』中に排列したる小兒娛樂の類目の順を追うて例證せんとす。さすれば如何なる程度迄本能的傾向が種々の形式の下に純然たる文學中に潛みつゝあるかを窺ひ得る理にして、從つて世に云ふ「大人とは年寄の小供なり」との諺も自ら確め得べし。但し複雜なる內容に至りては、勿論Groos氏に於て照應すべきものなきを以て此限りにあらずと知るべし。

(一)觸覺。Groos 氏は先づ觸覺を擧げて小兒の好む遊戲中此感覺に基づくものを記載せり。余は同氏の分類の順を追うて文學の方面に於ける例證を引用すべし。

"Yet I'll not shed her blood;
Nor scar that whiter skin of hers than snow,
And *smooth as monumental alabaster.*"—*Othello*, Act V. sc. ii. ll. 3–5.

"But *O for the touch of a vanish'd hand,*
And the sound of a voice that is still!"—Tennyson, *Break, break, break.*

かくの如く簡單にして一見文學的内容として不相應なるもの却て豫想外の勢力を有することを發見するものなり。

(二)溫度。

"St. Agnes' Eve—Ah, bitter chill it was!
The owl, for all his feathers, was a-cold;
The hare limp'd trembling through the frozen grass,
And silent was the flock in woolly fold:"—Keats, *The Eve of St. Agnes.*





これ固より複雜なる景物を捕へて寒さを形容したるものなれば單に寒冷の感覺が直ちに(F+f)となつて入り込むにはあらざれども、其感覺を喚起せんが爲に特に此等諸種の句を陳列せるは疑ひもなく溫度が文學的内容として存在し得るの一例と認むべきなり。

(三)味覺。食氣の如き下等感覺が所謂高尚なる文學に混入し得ざるべしとの想像は左の例にて打破せらるべし。

"The board was spread with fruits and wine;
With grapes of gold, like those that shine
On Casbin's hills;—pomegranates full
Of melting sweetness, and the pears,
And sunniest apples that Caubul
In all its thousand gardens bears;—
Plantains, the golden and the green,
Malaya's nectar'd mangusteen;
Prunes of Bokara, and sweet nuts
From the far groves of Samarcand.

And Basra dates, and apricots,

Seed of the Sun, from Iran's land ; —

With rich conserve of Visna cherries,

Of orange flowers, and of those berries

That, wild and fresh, the young gazelles

Feed on in Erac's rocky dells." —Moore, *Lalla Rookh, The Light of the Haram.*

其他 Keats の *The Eve of St. Agnes* (xxx.) の如き「一流の詩として過ぐべきには餘りに劣等感覺に基づく快樂の分子優勢なり」と Winchester 氏をして云はしめし程なり。

(四)嗅覺。香の文學上に散見するは元より枚擧に遑あらず。本邦に於ては「花の香」なる一定の語法あるを以ても其一般を推知し得べし。

"It was a chosen plott of fertile land,

Emongst wide waves sett, like a litle nest,

As if it had by Natures cunning hand

Bene choycely picked out from all the rest,

And laid forth for ensample of the best :

No daintie flowre or herbe that growes on grownd,

No arborett with painted blossomes drest

And smelling sweete, but there it might be fownd

To bud out faire, and throwe her sweete smels al arownd."

—Spenser, *The Faerie Queene*, Bk. II. can. vi. st. 12.

尙嗅覺につきては沙翁の *Macbeth* (夜行病) に適例あり。詳しくは *New Variorum Shakespeare* 中の *Macbeth* (p. 257) にある Verplanck の說を參照せよ。

日靜重簾透　風清一縷長

由來支那の詩に香の烟の屢〻材料として用ゐらるゝは何人も心附くところなるべし。

"The morn is up again, the dewy morn

*With breath all incense*, and with cheek all bloom,

Laughing the clouds away with playful scorn,

And living as if earth contain'd no tomb —

And glowing into day :" —Byron, *Childe Harold*, Can. iii. ll. 914-8.

これは擬人法なれども香炷の匂心地よければこそ かく "with breath all incense" と云くる

なり。

(五)聽覺。此感覺が美的快感の重要なる地位にあることは、音樂なる特殊の技術が獨立して存在するによりても知り得べし。又詩に音を重じ、韻を尙ぶも全く此感覺を利用せんとするに外ならず。さら〳〵となる衣の音、がさ〳〵と吹き寄る庭の落葉、さては風の音、雨の音、雷の音、濤の音、鳥の音、天下の音はもとより限りなし。時には單に聽覺のみを以て立派なる文學を構成し得べしと信ずることあり。

"*Duke.* If music be the food of love, play on;
Give me excess of it, that, surfeiting,
The appetite may sicken, and so die.
That strain again! it had a dying fall:
*O, it came o'er my ear like the sweet sound*
*That breathes upon a bank of violets,*
*Stealing and giving odour!*"—*Twelfth Night*, Act I. sc. i. ll. 1–7.

"I chatter over stony ways,
In little sharps and trebles,
I bubble into eddying bays,
I babble on the pebbles."—Tennyson, *The Brook.*

"I heard the water lapping on the crag,
And the long ripple washing in the reeds."—Tennyson, *The Passing of Arthur.*

"Or sweetest Shakespeare, Fancy's child,
*Warble his native wood-notes wild.*"—Milton, *l'Allegro*, ll. 133–4.

沙翁を鳥に比し其詩を鳥の好音に比するは、これ則ち世の人、鳥の聲を珍重する一證なりと云ひ得べし。

"By this the storm grew loud apace,
The water-wraith was shrieking;
And in the scowl of heaven each face
Grew dark as they were speaking."—Campbell, *Lord Ullin's Daughter.*

(六)視覺。繪畫彫刻の如き古今東西に亙りて完全の歴史を有する藝術も全く此視覺に其立脚地を置きし者にて、下は單純なる單調的色彩より上は複雑極まる例へば人體骨格の組立に至るまで、其間fを附帶するFの數多きこと到底算し盡くすこと能はず。

(a)暉。

"Sparkling and bright in liquid light
Does the wine our goblets gleam in;
With hue as red as the rosy bed
Which a bee would choose to dream in."
—Charles Hoffman (1806–'84), *Sparkling and Bright.*

"There shot a golden splendour far and wide,
Spangling those million poutings of the brine
With quivering ore." —Keats, *Endymion*, Bk. I. ll. 350–2.

"A violet by a mossy stone
Half-hidden from the eye!
—*Fair as a star, when only one*
*Is shining in the sky.*" —Wordsworth, *She dwelt among the untrodden ways.*

(b)色。

"I remember, I remember
The roses, red and white,
The violets, and the lily-cups —
Those flowers made of light!
The lilacs where the robin built,
And where my brother set
The laburnum on his birthday, —
The tree is living yet!" —Hood, *Past and Present.*

この一節の印象如何に色に富むかは一讀の後明白なるべし。(紅、白、綠等の文字を其儘に使用せざるにも關せず。)

"The leaves dead

Are driven, like ghosts from an enchanter fleeing,
Yellow, and black, and pale, and hectic red,
Pestilence-stricken multitudes:"—Shelley, *Ode to the West Wind*, ll. 2–5.

"Within the shadow of the ship
I watched their rich attire:
Blue, glossy green, and velvet black,
They coiled and swam; and every track
Was a flash of golden fire."—Coleridge, *Ancient Mariner*, ll. 277–81.

假に色の觀念を詩より除き去らば、詩の過半は自滅を免れず、其詩は空にして味なかるべし。彼の支那詩の如きは特に此方面に於て異彩を放つものと云ひ得べし。

紅燈綠酒、白蘋紅蓼、麥綠菜黃、白雲青山

等の語は常に詩中に織り込まれて云ふべからざる妙味を添ふるものなり。Wundt 氏の說に從へば「白色は華美を、綠色は靜けき樂しみを想起し、赤色は勢力を表するものなり。」尙通俗に所謂補色と稱するところのものも色學上重要の着目點なるべし。





「白紙に赤色インキ一二滴を滴下し、これを熟視すること約半分時にして眼を白き平面に轉ずれば、赤色の代りに綠色の斑點を認むべし。其理は下の如し。尋常の狀態にて網膜に完全なる日光を受くる時は吾人白色の印象を受く。然るに日光は多くの場合に於て不完全にして、卽ち吾人の網膜に觸るゝはたゞ其一部なることあり。此場合には日光が帶色物體より反射し來るものにして、通俗の語を以てせば、光線が色彩を帶ぶるものなり。凡そ色彩とはかくの如くにして生ず。今述べたる實驗に於て、赤色の斑點より來る日光を受けし網膜の一部は時間の經過と共に、漸く疲勞を來し、最早赤色により ては何等の感應をも受け得ざるに至る。此時にあたり白色物體より來る完全光線網膜に映ずるや、其疲勞したる部分は赤色に對し無能の狀態にあるを以て、完全光線より赤色を除きたるものを感ずるに止まる理なり。然るに此場合、綠色は赤色と合して完全光線卽ち白色を構成するものなれば、卽ち綠色は赤色の補色たるべき理なり。」以下省略 (Baldwin Brown, *The Fine Arts.*)

かゝる面倒なる理窟はさておき、凡そ色の力にて如何に萬物が美化され得るものなるかは左の一節に巧みに言ひ現はされをるが如し。

「凡そ吾人の感覺界に於て、變化ある多大の快樂を與ふること色彩の知覺にまさるものあらざるべし。上には蒼空、下には紫海、綠の牧野は到るところにあり。小さきをとれば、輝ける

花、秋の紅葉、華美に塗り立てし蝶々、磨ける黄金を着けし甲蟲、虹を纏ひし紅雀、瑠璃寶石をちりばめし蜂雀、或は色表に束の間現はれし色の趣、石鹸玉、蛋白石の虹様の面、或は鏡をのべし湖水にうつす夕映の色等、其趣は誠に取りどくなれど混り氣なき、利己の心なき喜びを喚起し得る點には異りなし。單に感覺の刺激より、かくの如き快感は到底他に求むべからざるなり。色彩の快味は專有的滿足の上に超然として、高尚なる美的平面に到達するものと云ひ得べし。」(G. Allen, *The Colour Sense.* 一頁)

(c)形。天地間一切の物體、抽象的にあらざる以上は必ず形を具すること猶色に於けるが如し。されば此形なる觀念が文學的內容に密接の關係を有するは誠に當然のことと云ふべし。ことに人體の形狀は泰西文藝にありて特殊の注意をひくものなれば、彼の小說家詩人の作中常に此方面に極めて精力を用ゐたる跡あるは無理ならぬことなるべし。從つて曲線の美を主とする裸體畫の專門家も顯はれしなり。元來美の形式を統ぶる法則につきては既に Plato, Pythagoras の昔時より異說紛々學者の常に意をそゝぐところにして或人は「量を以て表現し得べき數理原則に基づくもの」とも云ひ又或人は所謂「黃金切斷法」(Golden Cut)を以て美の比例なりと主張せり。Golden Cut とは一個のものを二分したる時、其短かき部分が長き部分に於ける比、其長き部分が全部に於ける比に同じきを名づけたるにて論者は「人體、高等動物の形狀、植物の構造、結晶體の形、





星界の配列、建築、彫刻、繪畫の傑作にあらはれたる比例、音樂上最巧の調和、更に大にしては宇宙を總括する自然界の比較科學の組織の如きも凡て此切斷法に適合するものなり」と主張す。(Fechner の云ふところに據れば、此比例は其價値重きを置くにたらず、其比、時により適中するが如き觀あれども、これを以て充分の證據となすこと難しと。)

"Not hiding up an Apollonian curve
Of neck and shoulder, nor the tenting swerve
Of knee from knee, nor ankles pointing light;
But rather, giving them to the filléd sight
Officiously. Sideway his face repos'd
On one white arm, and tenderly unclos'd,
By tenderest pressure, a faint damask mouth
To slumbery pout; just as the morning south
Disparts a dew-lipp'd rose."—Keats, *Endymion*, Bk. II. ll. 399–407.

こは所謂 *Sleeping Youth* の畫なり。

"Of all God's works which doe this worlde adorn,

There is no one more faire, and excellent,
Than is man's body both for power and forme
Whiles it is kept in sober government.
But none than it more foul and indecent
Distempered through misrule and passions face."

—Spenser (quoted by Ruskin: *Modern Painters*, Vol. II. pt. III. sec. I. chap. xiv.)

其他作例に至りては到底列擧の遑あらざれば、左に人體以上の壯大なる一例をかゝげて次節に移るべし。

"……when they come to model Heaven,
And calculate the stars; how they will wield
The mighty frame; how build, unbuild, contrive
To save appearances; how gird the Sphere
*With Centric and Eccentric scribbled o'er,*
*Cycle and Epicycle, Orb in Orb.*"—Milton, *Paradise Lost*, Bk. VIII. ll. 79–84.





Adam 天使 Raphael につき天の構造を問ふ。天使答へて曰く、そは神の祕事にして窺ひ知るべきにあらず、吾人はたゞ、そを仰ぎ見て嘆ずれば足れり、妄りに井蛙の智もて揣摩臆測するの要なしと。かくて、天界の宏壯を說く其終り二行は誠に形の美感を遺憾なく發揮し得たるものなり。余は天文學上より Cycle, Epicycle, Orb, Centric 或は Eccentric の概念を得ること難し。然れども其趣味は一種壯大なる形を腦裡に想像することに於て充分なり。情緒は奔逸なる想像に伴なひ來るものにして、其賞翫の度合に於ては一字一句の理會に勝るべし。

(d)運動。其特長は舞踏に現はれ、又演劇にあらはる。其他波のうねり、白雲の遽勃たる、落葉、或は霏々たる雪、すべてこれ運動の美を生命とするものにして、文學に此種の分子夥しきは今更云ふの要なし。

"Upon the margin of that moorish flood
Motionless as a cloud the old Man stood,
That heareth not the loud winds when they call;
And moveth all together, if it move at all."

—Wordsworth, *The Leech-Gatherer*, ll. 74–7.

此條につき一寸注意すべきは肉食鳥類 (Birds of Prey) の飛行に伴なふ美感の屢彼の國人によ

りて特筆せらるゝことなり。(我國の詩歌に此こと少なし。) Darwin 曾て其著 *The Voyage of the Beagle round the World* に云へることあり。

「禿鷹が群をなし、或點に圓を畫きて飛ぶ時は其様まことに美しきものなり。地上より翔け上る時を除きては一羽たりとも其翼を動かすことなし。余は Lima の邊にて約半時間數羽の群を目もはなたで見まもりしことあり。飛ぶ時は大なる曲線を描き、圓形に翔け昇り翔け降り其間羽敲きすることなし。」

讀者これを左の一節と比較せよ。

"Around, around, in ceaseless circles wheeling
With clang of wings and scream, the Eagle sailed
Incessantly — sometimes on high concealing
Its lessening orbs, sometimes as if it failed,
Drooped thro' the air; and still it shrieked and wailed
And, casting back its eager head, with beak
And talon unremittingly assailed
The wreathèd Serpent, who did ever seek





Upon his enemy's heart a mortal wound to wreak."

—Shelley, *Laon and Cythna* [*Revolt of Islam*], Can. I. st. x.

是にて一應感覺的經驗に基づく作例を示し終れり。作例中或は其 f の因、全く感覺上の經驗に基づくと云ひ難きもあるべけれど、兎に角、感覺上の經驗が文學的内容の重要項目を構成することは、すでに疑ひもなき事實なり。

こゝには觸、溫、味、嗅、聽、視の六種に分類して其個々に渉りて作例を擧げたるが、これら簡單材料を總合したるものも亦大體に於て美感を生じうること勿論なり。左の例の如き、誠に五彩の陸離たる人目を眩し、吾人の心神を恍惚たらしむ。窈として Drury Lane 座に Pantomime を觀るが如し。但し其弊を云へば粉飾餘りに華麗にして強烈なる香水を嗅ぐに似て多少失神の氣味なきにあらず。

"PANTHEA.

And from the other opening in the wood
Rushes, with loud and whirlwind harmony, (運動,音)
A sphere, which is as many thousand spheres, (形)
Solid as crystal, yet through all its mass

Flow, as through empty space, music and light: (暉,音)
Ten thousand orbs involving and involved, (形)
Purple and azure, white, and green, and golden, (色)
Sphere within sphere; and every space between (形)
Peopled with unimaginable shapes, (形)
Such as ghosts dream dwell in the lampless deep,
Yet each inter-transpicuous, and they whirl (運動,暉)
Over each other with a thousand motions, (運動)
Upon a thousand sightless axles spinning,
And with the force of self-destroying swiftness, (運動)
Intensely, slowly, solemnly roll on,
Kindling with mingled sounds, and many tones, (音)
Intelligible words and music wild.
With mighty whirl the multitudinous orb (運動,色,暉)
Grinds the bright brook into an azure mist

Of elemental subtlety, like light;
And the wild odour of the forest flowers, (嗅)
The music of the living grass and air, (音)
The emerald light of leaf-entangled beams (暉,色)
Round its intense yet self-conflicting speed, (運動)
Seem kneaded into one aërial mass (運動)
Which drowns the sense. Within the orb itself,
Pillowed upon its alabaster arms, (觸覺)
Like to a child o'erwearied with sweet toil,
On its own folded wings, and wavy hair,
The Spirit of the Earth is laid asleep,
And you can see its little lips are moving,
Amid the changing light of their own smiles,
Like one who talks of what he loves in dream."

—Shelley, *Prometheus Unbound,* Act IV. ll. 236–68.

これ迄列擧したるFは全て純粋にして、しかも簡單なる情緒を喚起するもののみにして、其fは「或線、體竝に色、音の複合により受くる者、卽ち視、聽覺又は他の感覺的經驗より得るf」を意味するものなりしが、これらと云へども、實際吾人が經驗する際にありては聯想其他の作用により混入し來る第二fの多量を含むこと勿論なり。たゞ要は如此第一f卽ち本元fが他の副加fの混入の間に立ち依然として常に美感の一部分、否其重要部分をなすものなることを主張せんとせしのみ。今此第一、第二fの混入の様を例をもて示さんに、

「或夏の日、Pyrenees 山中を旅行して甚しく疲勞を覺えたれば、偶〻出合ひたる牧童に一杯の牛乳を與へくれよと求めしに、諾したれば、共に其家なる小屋に行けば、其住居の下を小川流れ、其中に乳の瓶を浸したり。一椀の乳の冷かなること如何に文學的内容として存在し得るかを示したしみ渡るを覺えぬ。例へば耳ならぬ口にて味はひし牧野の合奏の如き感ありき。」(M. Guyau.)

これたゞ乳の甘かりしを說く意にあらず、其乳には普通望み得べからざる美妙の感附着し居たるを云ふものなり。然れども余は其際必ず乳其物の固有の味も亦必ず Guyau の快感の一部を否、恐らくは其半以上を占めたりしことを主張するものなり。

以上は吾人の感覺機能に單純に觸るゝ經驗が、如何に文學的内容として存在し得るかを示したるものなるが、次に吾人は人類の内部心理作用の文學的内容としての實例の一端を示さんとす。凡そ此種の材料が文學に入り込むには二種の方法に由る。卽ち間接及び直接の兩途なり。或はこれを客觀、主觀的と名づけ得べし。前者は重に劇、敍史詩に行はれ、後者は重に抒情詩に用ゐらる。然れども、これを以て全く純粹の區別なりと目し難きは勿論にして、小說の如きにありては其性質上此兩方法を兩刀的に使ひこなすこと屢なり。

こゝに間接又は客觀的と云ふ意は情緒の狀態を喚起するに先だち、其原因を記するか、或は其肉體的徵候を擧げて情緒其物の記載は之を省略して、たゞ讀者の想像に委ぬるの義なり。然るに直接又は主觀的方法に至りては先づ何はともあれ情緒其物を述べ、而してそれに伴なふ結果現象は自ら傳播するに任ず。故に此二方法は普通の場合、多くは錯雜混合して用ゐらるゝは不得已こと云ふべし。如此誇學的分類は一見何の用をも爲さざるものの如きも、これ全く余が冒頭に立てたる法式卽ち文學的内容は常に(f+b)ならざるべからずと云ふ命題に解釋上の誤謬なきを期するが爲のみ。今間接法の内容をみるにFありてfなく、直接法にはfありてF缺くるの感あり。故に余は誤解を避くるため更に(f+b)なる形式に一言の附箋を試みんとす。卽ち此法式には合はせて三つの場合あり。(一) f+b となつて現はるゝ場合、(二)作者はfを云ひ現はし、Fは讀者により補足せらるゝ場合、(三)作者Fを擔任し、fは讀者に於て引き受くる場合。

出自北門、憂心殷々、終窶且貧、莫知我艱、已焉哉、天實爲之、謂之何哉、

此内、憂心殷々、已焉哉、謂之何哉の三句は詩人の感情にして、出自北門、終窶且貧、莫知我艱、天實爲之の四句はFなり。而して前者のみならば(三)、後者のみならば(二)、兩者を合すれば卽ち(一)なり。

扨て、こゝに情緒的精神狀態が文學の内容となりて入り込む場合を檢せんに、矢張り感覺材料に於けるが如く一汎情緒を分類して順次其作例を擧ぐるを以て適當なりと信ず。Ribot は吾人の情緒を分類して單複の二種とし、恐怖、怒、同情、自己觀念、男女的本能等を單とし善惡、宗教感情を複となせり。今暫く假に此分類を用ゐれば、

(一)恐怖。*Hamlet* 中の Horatio が亡靈を目擊したる折の感慨は如斯。

"A mote it is to trouble the mind's eye.
In the most high and palmy state of Rome,
A little ere the mightiest Julius fell,
The graves stood tenantless, and the sheeted dead
Did squeak and gibber in the Roman streets."—*Hamlet*, Act I. sc. i. ll. 112–16.





"I have almost forgot the taste of fears:
The time has been, my senses would have cool'd
To hear a night-shriek; and my fell of hair
Would at a dismal treatise rouse and stir
As life were in't: I have supp'd full with horrors."—*Macbeth*, Act V. sc. v. ll. 9–13.

こは Macbeth が滅亡を目前にひかへ、城中にて從者と對談の際、女の叫聲を耳にしていへる科白なり。此第一句は恐怖の徵候を記載したるFにして、第二句はfを含む主觀的分子なり。序ながら、*Macbeth* 全篇は恐怖なる情緒を骨子として組み立てられしものと見て可なり。

(二)怒。

"Achilles' wrath, to Greece the direful spring
Of woes unnumber'd, heavenly goddess, sing!
That wrath which hurl'd to Pluto's gloomy reign
The souls of mighty chiefs untimely slain."—Pope, *The Iliad*.

これ人の知る如く Pope の英譯 *Iliad* 卷頭の一句なり。最初より詩神に呼びかけて Achilles の憤怒を歌はんと欲する者にして、卽ち此詩二十四卷を貫く大眼目は全く此英雄の怒にあることを

廣告したるに外ならず。萬古不易と稱せられたる *Iliad* は怒の筋を以て成立すと云うて不可なきなり。

更に怒の情緒、最もよく發揮せられたるは、所謂爭闘の名稱の下に來る人間の動作なり。爭闘は古來文學との關係頗る密にして、古くは *Iliad* 中の戰、下つては *Paradise Lost* の Satan 對 Jehovah の戰、或は Scott の『湖上の美人』五齣 Fitz-James と Roderick Dhu との一騎打或は *Marmion* 六齣の Flodden の役等皆有名のものなり。就きて見るべし。

"He spoke; and Rustum answer'd not, but hurl'd
His spear: down from the shoulder, down it came,
As on some partridge in the corn a hawk,
That long has tower'd in the airy clouds,
Drops like a plummet; Sohrab saw it come,
And sprang aside, quick as a flash: the spear
Hiss'd, and went quivering down into the sand,
Which it sent flying wide:—then Sohrab threw
In turn, and full struck Rustum's shield: sharp rang,
The iron plates rang sharp, but turn'd the spear."

—M. Arnold, *Sohrab and Rustum*, ll. 398–407.

"Then each at once his falchion drew, and threw,
Each on the ground his scabbard threw,
Each looked to sun, and stream, and plain,
As what they ne'er might see again;
Then foot, and point, and eye opposed,
In dubious strife they darkly closed."

—Scott, *The Lady of the Lake*, Can. V. st. xiv.

怒の表白は種々あるべけれど、其の最も代表的なるは戰なり、殺戮なり、破壞なり。然るにもかゝはらず怒を現はすことは一種の快感を伴なふものにして、之を見る者亦特殊の興奮を感ずるが如し。(怒の生ずる原因の不愉快なるは云ふ迄もなく、又其怒を蒙る當路者の不快なるも勿論なれども。) 故に古今の文學者は好んで此感情を利用し、開明の今日に於ても其效力依然として減ぜざるなり。古き民歌にては *Chevy Chase*. 劇文學に於ては、元より際限なけれど、先づ沙翁の

作 *Coriolanus*. *Henry VI* 中の Talbot. *Richard III* の末段 A horse! a horse! my kingdom for a horse! の如き盖し爭鬪文學の粹と稱して可なるべし。殊に最後の例、卽ち Richard III 馬を逸し、獅子奮迅の勢を以て馬を召す一句、よく此種の情熱の特色を發揮し得て遺憾なし。就いて見るべし。こゝに最後の一例として *Coriolanus* 中の爭鬪的部分を序ながら摘示すべし。

"*Mar.* Sir, it is;
And I am constant. Titus Lartius, thou
Shalt see me once more strike at Tullus' face.
What, art thou stiff?"—Act I. sc. i. ll. 242–5.

是れ *Coriolanus* 冒頭の氣概なるが、此間相手の意氣込如何にと云くば、

"If we and Caius Marcius chance to meet,
'Tis sworn between us we shall ever strike
Till one can do no more."—Act I. sc. ii. ll. 34–6.

愈〻戰爭となりたるとき Coriolanus はわが味方を罵りて曰く、

"You souls of geese,
That bear the shapes of men, how have you run
From slaves that apes would beat! Pluto and hell!
All hurt behind; backs red, and faces pale
With flight and agued fear! Mend and charge home,
Or, by the fires of heaven, I'll leave the foe
And make my wars on you: look to 't: come on;
If you'll stand fast, we'll beat them to their wives,
As they us to our trenches followed."—Act I. sc. iv. ll. 34–42.

愈〻兩人決戰に臨みての對談は、

"*Mar.* I'll fight with none but thee; for I do hate thee
Worse than a promise-breaker.
*Auf.* We hate alike:
Not Afric owns a serpent I abhor
More than thy fame and envy. Fix thy foot.
*Mar.* Let the first budger die the other's slave,
And the gods doom him after!

*Auf.* If I fly, Marcius,
Holloa me like a hare.
*Mar.* Within these three hours, Tullus,
Alone I fought on your Corioli walls,
And made what work I pleased: 'tis not my blood
Wherein thou seest me mask'd; for thy revenge
Wrench up thy power to the highest.
*Auf.* Wert thou the Hector
That was the whip of your bragg'd progeny,
Thou should'st not scape me here.

[*They fight, and certain Volsces come in the aid of Aufidius.*

*Marcius fights till they be driven in breathless.*

Officious, and not valiant, you have shamed me
In your condemned seconds.

—Act I. sc. viii. ll. 1–15.



Coriolanus の母は子供のうけし傷を自慢顔に

"*Vol.* He had, before this last expedition, twenty-five wounds upon him."

—Act II. sc. i. ll. 169–70.

と云ふを見ても格闘(怒の發現なる)の如何に文學的内容となりて存在し得るかを證明するに足らん。

(三)同感。Ribot は次に同感及び優しき情を擧げたり。尤もこゝに所謂 Sympathy の意は吾人が日常用ゐる意義にあらずして、寧ろ其字義をたどり上りて、sym = together, pathy = feeling 即ち他人と感情を共にするの義なり。人怒れば怒り、人泣けば泣く、即ち心理的結合にして、此意義に於て或時は摸擬、又は感染と同字義となる。如此意義の言語が文藝の理論を說くに當り必要なるは云ふ迄もなきことにして、由來吾人が文藝を面白しと感ずるは摸擬(内部的)又は感染(Tolstoi の說)の爲なりとも云ひ得べく、從つて此本能は文藝の賞翫に方り寸時も缺く能はざるものとす。此意味に於ける同感は第一期にして、更に進みて第二期に入る時は最早單に心理的結合にあらずして、心理的結合+優しき情緒となるなり。文學の内容として用ゐ得べき Sympathy は常に此第二期にあるを要す。卽ち人を氣の毒に思ひ可哀相なりと歎ずるはすべて、此情に基づくと知るべし。

茲に注意すべきは此本能が戀の根底なる兩性的本能と全く絶縁して存在することにして、また其の因つて來るところは同類相憐むの天性にあること心理學者の一般に是認する定說なるが如し。(Lloyd Morgan, *Animal Behaviour*, chap. v; Thomson, *The Study of Animal Life*, pp. 154-66; Ribot, *Psychology of Emotion*, p. 237.)

今此本能が文學の內容たりし例證として、英文學中より極めて簡單なるものを擧ぐべし。

この例は卽ち Godiva の話なり。もと一個の實事(少なくとも口碑に傳はりし古き話)なりしならんも、近世英文學にありて二大文豪の材料に採られたる緣故をもて、著しく其名を高めたるなり。一人は Walter Savage Landor にして其 *Imaginary Conversations* 中にこれを收めたり。Havelock Ellis の評に「數多き會話のうち、美しさに於て、これの右に出づるものなし」とあり。Landor の散文に對し、これを詩に歌ひしは Lord Tennyson にして、これ卽ち *Godiva* なり。

先づ Landor が如何に此材料を取扱ひしかをみるに、

(a) Landor の對話は新婚の夫婦が Coventry に遠乘するに始まる。Godiva 曰く "There is a dearth in the land, my sweet Leofric! Remember how many weeks of drought we have had, even in the deep pastures of Leicestershire." 且つ下民の慘狀を訴へて曰く "Although





we were accompanied by many brave spearmen and skilful archers, it was perilous to pass the creatures which the farm-yard dogs, driven from the hearth by the poverty of their masters, were tearing and devouring; ....." 夫云ふ、さらば余も町に入りSt. Michael's 寺に籠もり夜を徹して神に禱願すべしと。妻も答ふらく「妾も祈るべし」、さりながら "Would my own dear husband hear me, if I implored him for what is easier to accomplish, — what he can do like God?" とて飢饉、旱魃の際なれば彼等の爲租稅を免ぜよと乞ふ。

Leofric 怒りて云く、"They have omitted to send me my dues, established by my ancestors, well knowing of our nuptials, and of the charges and festivities they require, and that in a season of such scarcity my own lands are insufficient."

其時妻は訴へて云ふ "There are those among them who kissed me in my infancy, and who blessed me at the baptismal font. Leofric, Leofric! the first old man I meet I shall think is one of those; and I shall think on the blessing he gave, and (ah me!) on the blessing I bring back to him. My heart will bleed, will burst; and he will weep at it! he will weep, poor soul, for the wife of a cruel lord who denounces vengeance on him, who carries death into his family!"

それより色々問答の末、夫は妻の乞ひを容れ且つ條件を附して云ふ、"Yea, Godiva, by the holy rood, will I pardon the city, when thou ridest naked at noontide through the streets!"

妙齢の奥方ともあるべきものが白晝市街を、裸體にて、しかも馬上に乗り廻ることは常人として忍び難きもの、しかも忍ばざれば幾多細民の疾苦を救ふこと能はず、卽ち同感と體面との間に介立したる煩悶に陥らざる可らず。

最後に寧ろ體面を缺くも同感を滿足せしむべしと決心したる女は云ふ、"But perhaps my innocence may save me from reproach; and how many as innocent are in fear and famine! No eye will open on me but fresh from tears. What a young mother for so large a family! Shall my youth harm me? Under God's hand it gives me courage. Ah! when will the noon be over?" Landor の會話はこれにて結了す。

(b) Tennyson はこれより一歩を進めて Godiva が裸體にて市中を乗り廻すところ迄を敍述せり。先づ彼女は

"So left alone, the passions of her mind,





As winds from all the compass shift and blow,
Made war upon each other for an hour,
Till pity won."—*Godiva.*

と漸く煩悶を切り抜けたる故傳令使をして市中を廣告せしめて曰く、正午に至る迄、何人も外出する勿れ、又何人も家より外部を窺ふ勿れ、皆戸を閉ぢ窓を卸ろして蟄居せよと。かくて Godiva は衣を脫ぎすて、屠所の羊の如き氣分にて門を出で、首尾よく町を馳けめぐり終る。其折一人の愚物ありて物數奇に其樣子を垣間見んとせしが忽然明を失したり。是を Tennyson の描ける *Godiva* の梗概とす。

同感の例は固より枚擧に遑あらざる程なれば、別に引例の必要を認めざれども、こゝに面白き一作あれば紹介をかね一言すべし。前例は一般人民に對する所謂同情を中心としたるものなるが、これは全く父子の間柄に横たはる同情を美しき忍耐と克己の方面より描き出だせるものなり。

此話も亦 Landor の *Imaginary Conversations* に出づるものにして Æsop と Rhodopè との問答なり。Rhodopè なる少女が幼少の頃、奴隷に賣られし仔細を、同じ奴隷の Æsop に物語る節なり。

Rhodopè の父は米櫃に殘る最後の糧をうり拂ひ、眞紅色の緣とれる衣を購ひ憮然として米櫃を

窺ふ。何事とも氣附かぬ Rhodopè は米櫃の中に何か面白き者もあらんとて、急ぎ見れば空なり。
偖父此新しき衣を子に着するに、小供心にうれしければ花を採りては髪にさし又胸に插む。それ
より相伴なひて奴隷賣買の市場に赴く。買ふ人々 Rhodopè の華奢な姿を賞づれども體質弱しと
て購ふもの更になし。"Many would have bought the chlamys, but there was something
less saleable in the child and flowers." 來合はせて値ぶみする者はなきにあらねど父の手離
す程に高く買はんと云ふは一人もあらず。かくして一人去り一人來るを小供は無邪氣に興がりて、
これを一種の賭戯なりと其度毎に笑ふのみ。

父は顧客の一人に向ひ "I think I know thee by name, O guest! Surely thou art Xanthus
the Samian. Deliver this child from famine." と、Rhodopè はたゞ笑ふ、Xanthus は心配氣
に餓ゑたりやといたはり問へども、飯食べし許りの Rhodopè はたゞ戯言と心得笑ふのみ、(永の
貧苦の最中にも父は一度とて吾が子を餓やせしことなし。) Xanthus は袋中より小麥の菓子と蜜
をとり出して與ふ。Rhodopè はまづ蜜を父の口にあてがふに、父はそを地上に投げて、"seizing
the bread, he began to devour it ferociously." 子はこれをも尚戯れなりとす。

「價は?」と問ひつゝ父は其子を Xanthus に渡す。其最後の言葉に曰く "The gods are ever
with thee, O Xanthus; therefore to thee do I consign my child." と。





買はれし人に抱かれて振りむけば "saw her father struggling on the ground, livid and
speechless." 尚 Rhodopè 自らの言葉に曰く "The more violent my cries, the more rapidly
they hurried me away; and many were soon between us. Little was I suspicious that
he had suffered the pangs of famine long before: alas! and he had suffered them for
me." Æsop 長物語を聽き終り感じて曰く "It was sublime humanity: it was forbearance
and self-denial which even the immortal gods have never shown us. He could endure to
perish by those torments which alone are both acute and slow; he could number the
steps of death and miss not one; but he could never see thy tears, nor let thee see his.
O weakness above all fortitude! Glory to the man who rather bears a grief corroding his
breast, than permits it to prowl beyond, and to prey on the tender and compassionate!"
再び語をつげる Rhodopè は其事ありし前夜の記憶を呼び起して云ふやう、其夜父は妾が寢臺の
緣に坐し、床上に散りしパン屑を拾ひ集め、しきりと其の足らざるを憾む如くもてなして唄をうたへと父に乞ひぬ。唄をうたひ
時迄眠りをよそほひたるが、急に覺めたる如くもてなして唄をうたへと父に乞ひぬ。唄をうたひ
て眠らせよと逼りぬ。其歌の末の一節には、"Thou shalt behold that fairest and that fondest
one hereafter. But first thou must go unto the land of the lotos, where famine never

cometh, and where alone the works of man are immortal." とありたり。

余は此一篇を以て英文學中最も切なる情緒をあらはしたる美はしき小品の一なりと思ふ。而して前後に通じて此物語の興を支ふるは父子の愛卽ち廣義の所謂 Sympathy に外ならず。勿論同感の情をのぞきても小供心の頑是なき所、父の手一つに育てられて腕白なる節々等充分此一篇を古今に通ずる作品たらしむるに足る他の要素を具へたるは論なし。詳しくは就て見るべし。

(四)此次に來るべきは自己の情、卽ちegoに付きての感情なりとす。これに積極消極の二つあり。積極とは意氣、慢心、高振り、押し强等、消極とは謙讓、小心、控へ目等を含むものなり。

先づ積極的見本なる意氣をとり來る時、先づ第一に心に浮かぶべきは Milton の描きたる魔王なり。彼の意氣は孔雀が尾を廣げし樣の虛榮にあらず、失敗に陷り困難に遭遇して益〻其度を高むる底のものなり。卽ち謙讓、失望と兩立し得る意氣なり。かれ曾て天上界を再び吾がものにせんと幕下を地獄の奈落に聚めて軍略を凝らすや、

"High on a throne of royal state, which far
Outshone the wealth of Ormus and of Ind,
.....
Satan exalted sat, by merit raised





To that bad eminence; and, from despair
Thus high uplifted beyond hope, aspires
Beyond thus high, insatiate to pursue
Vain war with Heaven; and, by success untaught,

His proud imaginations thus display'd:"—Milton, *Paradise Lost*, Bk. II. ll. 1–10.

批評家の言によれば Milton の魔王は其人格あまりに雄大なるを以て讀者の同感を引き易く、却て危險の虞ありと。然り其雄壯なる性格に對し誰か幾分の歎賞の感を禁じ得るものぞ。而して其賞するところは彼の意氣死に至りて尙磨せざるにあり。

更に引例すれば、Coriolanus かつて羅馬市民全體を反對とし飽くまで其信ずるところを行はんとするや、彼等これを恨み、團結して危害を其の身に加へんとす。彼之を知つて、昂然として曰く、

"Let them pull all about mine ears, present me
Death on the wheel or at wild horses' heels,
Or pile ten hills on the Tarpeian rock,
That the precipitation might down stretch

Below the beam of sight, yet will I still
Be thus to them."—Shakespeare, *Coriolanus*, Act III. sc. ii. ll. 1–6.

漢語にて評すれば意氣凛然とも云ふべき所なり。

以上は自己感情の積極的方面の中、意氣を其標本にとり、其文學の内容たり得べき諸點を指示せるものなるが、是より消極的方面にうつり忍耐につき一言すべし。

忍耐が文學に容れらるゝや、其の最も普通にして、しかも最も可憐なるは人戀ふ心を包み忍ぶの情なるべし。これ一方には自覺の缺乏、小心、恥ぢらひ等皆、自己感情の消極的方面の諸性質と關係するものとす。英文學中の一佳節は此強き忍耐を封じ込めたる戀の雅歌なり。

(a) Viola は女の身に男裝して、Duke Orsino の小姓となり、屢〻公の戀人 Countess Olivia に文の使すれども、Olivia はいつも、すげなく、返し文することさへなかりき。或時、公は Viola に向ひ、其身と Olivia の戀を述べ、戀情にも男女各區別あることを語り、さて云ふやう、

"There is no woman's sides
Can bide the beating of so strong a passion
As love doth give my heart; no woman's heart
So big, to hold so much; they lack retention."





—Shakespeare, *Twelfth Night*, Act II. sc. iv. ll. 96–9.

Viola これをきゝ他し戀にことよせ、己が切なき心情を打ち明くる。公問うて云ふ

"And what's her history?

*Viola.* A blank, my lord. She never told her love,
But let concealment, like a worm i' the bud,
Feed on her damask-cheek: she pined in thought,
And with a green and yellow melancholy
She sat, like patience on a monument,
Smiling at grief. Was not this love indeed?
We men may say more, swear more: but indeed
Our shows are more than will; for still we prove
Much in our vows, but little in our love."—ll. 112–21.

この内容は固より忍耐に限らるゝにはあらざれども、忍耐と戀の混和を巧みに描き出せる好例なりとす。

(b) 前者は戀を包む爲の忍耐なれども、こゝにはこれと少しく趣を異にする堪忍の例を紹介すべ

し。そは妻が夫に對し柔順の德を守るところにあらはれたるものにて、余が特にこゝに此例を選みたるは此情がよく文學的内容たり得るを證すると同時に他に一二の主意なきにあらず。原夫人崇拜の西洋にありて、かゝる例は甚だ奇異の觀あるべく、現に近世英文學に於てはかくの如き者を求むるも到底得難かるべし。固より妻が夫に對し堪へ忍ぶは世の常態なれば、何れの世にも此種の文學的内容多きは云ふを待たざれども、こゝに述べんとする例の如きは誠に西洋文學中無類のものなるべく、近代の婦人が決して堪へ能はざる苦しさを堪へ果せるを描きしものなり。Patient Griselda (Maria Edgeworth の小説中 *Modern Griselda* なるものあれども、其内容に多大の類似あるにはあらず) の物語は古來三大文豪の手に觸れたるものにして、(1) Boccaccio の『十日物語』十日目の十に出でたり、(2) Petrarch はこれを羅典語小説に仕組み、*De Obedientia ac Fide Uxoria Mythologia* と名づけたり、(3)此物語は英國に於て Chaucer の彩筆に觸れ、其 *Canterbury Tales* 乃 *The Clerkes Tale*(『學生の物語』) の名の下に永く文學の寶什として存す。但し Chaucer が其材料を Petrarch より得たることは其前詞に云へるが如し。

"He is now deed and nayled in his cheste,
I prey to god so yeve his soule reste!
Fraunceys Petrark, the laureat poete,





Highte this clerk, whos rethorykе sweete
Enlumined al Itaille of poetrye."—ll. 29–33.

Griselda 物語。昔伊太利亞 Saluces (Saluzzo) の太守に侯爵 Walter (Gualtieri) と云ふ若人ありけり。野に山に日々を狩り暮らし、妻の爲め子の爲めさては吾身の爲め後の榮えを計ることなど、かつて念頭に浮びしことさへなかりき。されば臣下の者共頻りに心を惱め、如何にもして貞淑の室をすゝめんとすれども、心根知れぬ女と一生を偕にするは人生の不幸の極なりとて聞き入るゝ氣色なし。されども眞心こめし忠告を無下に却け通すこともならず、遂にたゞ〳〵思ふ仔細ありとて、或百姓娘と偕老の盃を交はしけり。

"Janicula [Giannicolo] men of that thropе him calle.
A doghter hadde he, fair y-nogh to sighte,
And Grisildis [Griselda] this yonge mayden highte."—ll. 208–10.

侯爵其花嫁を臣下に引き合はす言葉に曰く。

"'This is my wyf,' quod he, 'that standeth here.
Honoureth hir, and loveth hir, I preye,
Who-so me loveth; ther is na-more to seye.'"—ll. 369–71.

臣下の者共皆花嫁を賞し、命長かれ、幸あれと祈り、侯爵の人を見る明、勝れたるに感じ居たりしが、程經て侯爵何思ひけん、ふと其妻の忍耐の度合を試しみんと志し、其先づ手始めに、

(一)妻に向ひ、汝は生れ卑賤の身をもてかく侯爵の家に入りたれば、臣下のもの不滿にして小言の絶え間なし、と云ふ。

"They seyn, to hem it is greet shame and wo
For to be subgets and ben in servage
To thee, that born art of a smal village."—ll. 481-3.

されども妻はたゞ音無しく其身の低きをみとめ、今の身の分に過ぎたるを謝するのみ。

(二)第二の試驗は少しく其方法を異にしたり。Griselda は結婚後一女兒を設けしが、侯爵、使をやり云はしむるやう、「御氣の毒なれども、御子供渡し給へ、侯の命令もだし難ければ」と。Griselda 可愛き子の身の上を氣遣はぬにはあらねど、何事も夫の命なればとて泣きもせず、歎きもせず云ふがまゝに其子を渡しやりぬ。

(三)次に生れしは男兒なりき。侯爵云ふやう、人民は汝に對して不服なれば、汝の腹より出でし此兒、余が後を繼ぐことあらば

"when Walter is agoon,
Then shal the blood of Janicle succede
And been our lord, for other have we noon."—ll. 631-3.

卽ち吾が家の斷絶は目にみる如し。故に此兒も引き渡せと逼る。Griselda は恨む氣色もなく小兒を引渡す。而して其云ふところは、かくの如く柔順なりき。

"And ever in oon so pacient was she,
That she no chere made of hevinesse,
But kiste hir sone, and after gan it blesse;
Save this; she preyed him that, if he might,
Hir litel sone he wolde in erthe grave,
His tendre limes, delicat to sighte,
Fro foules and fro bestes for to save."—ll. 677-83.

(四)偖、かく最愛の吾子を二人迄取り去られたる Griselda にとり此上の試驗はと云へば、彼女自身の離別なり。元より人民が Griselda に寄する同情は一方ならざれども、柔順なる彼女は無情の夫を恨むことなく、再び元の貧民に立ちかへり、樂しく父の手助けせんと答ふ。

"'Naked out of my fadres hous,' quod she,

'I cam, and naked moot I turne agayn.'" —ll. 871–2.

かくて彼女は里に歸り行けり。

(五)殘酷なる試驗は尙これに終らず。此度侯爵方へ花嫁の輿入あるにつき、邸内の様子知つたる Griselda に當夜の係り仰せ付けらるとの仰せなり。されど彼女は怒れる色もなし。

"And she, the moste servisable of alle,
Hath every chambre arrayed and his halle." —ll. 979–80.

然のみならず、愈花嫁の來る時、侯爵は笑ひつゝ彼女に問うて曰く、

"How lyketh thee my wyf and hir beautee?" —l. 1031.

Griselda 答へて曰く、

"'Right wel,' quod she, 'my lord; for, in good fey,
A fairer say I never noon than she.'" —ll. 1032–3.

こゝに始めて永き試驗も侯爵の心のまゝに了り、其妻の變らぬ貞節、忍耐最早疑ふべくもあらざりしかば、侯爵漸くに事の實を打ち明け、

"'Now knowe I, dere wyf, thy stedfastnesse.'"

と云ひつゝ、





"And hir in armes took and gan [began] hir kesse [to kiss her]." —ll. 1056–7.

話をたどりもどれば、先に奪ひ去られし兩兒は其折 Bologna に送られて人となり、此度輿入れありしも實は今年十二歳の小女郎、卽ち Griselda の姉娘にして其弟も同道し來りしなり。かくて親子再會して、先の苦しみは今の樂しみとなり、目出度く此世を終りしと云ふ。

かゝる忍耐は到底實際あり得べきことにあらざるは話の當人 Oxford の大學生も後段に云へり。

"But o word, lordinges, herkneth er I go:—
It were ful hard to finde now a dayes
In al a toun Grisildes three or two;
For, if that they were put to swiche assayes,
The gold of hem hath now so badde alayes
With bras, that thogh the coyne be fair at yë;
I wolde rather breste a-two than plye." —ll. 1163–9.

(5)原次に來るべきは兩性的本能、更に上等の文字を用ゐれば戀なり。兩性的本能は如何にも下品の様なれど、これもと人間固有の本能の一なれば、事實にして、嫌ひなりと云ふも片附け方なし。而して所謂戀なるものは此兩性的本能を中心として複雜なる分子を總合して發達したる結果なれ

ば到底其性質より此基本的本能を除去すること能はざるなり。Delbœuf なる人かく云へることあり。「凡そ年若き男女が、慕ひ合ふは、彼等が自覺せずして、精子の意志に從ふものなり。」Bain も亦「觸は戀の始にして終なり」と云へり。隨分如何はしき言葉のやうなれど、赤裸々に云ひ放てば、眞相はかくあるべきなり。たゞ戀は神聖なりなど、說く論者には頗る妥當を缺くの感あるべし。所謂 Plato 式戀愛なるもの、若し世に存在すると假定せば、これには劣情の混入しあらざること勿論なれども、同時にまた劇烈の情緒として存在し能はざることも明らかなり。若しJames が說く如く情緒は肉體的狀態の變化に伴なふものにして、肉體的狀態變化の因にあらずと假定すれば、悲しきが故に泣くにあらず、泣くが故に悲しとの結論に達す。」James 曰く 是等の下等情緒を論ずる自然の徑路は、先づ或事實を知覺し、其結果として情緒と名づくべき心的感情を誘起し、此狀態更に進んで肉體的表白を發するに至るべきなれども、余の說は全然この反對に出づるものにして、卽ち興奮的事實の知覺に次ぐに直ちに肉體的變化を以てし、此變化はやがて情緒として現はるゝものなるべきを信ず。」(*Principles of Psychology* 『心理學大綱』第二卷、四四九頁。) 此議論をとつて直ちに普通の戀の上に應用せん事頗る不都合なるやも計りがたし。去れど普通一般の小說戲曲中にあらはるゝ善男善女の徒、必ず其戀を結婚に終り、若し終り得ざる時は讀者觀客は不滿足の感を生ずるより推すも、所謂戀情なるものより兩性的本能卽ち肉感を引





き去るの難きは明らかなりとす。

尤も前にも云へる如く、所謂戀なる者にも、色々其社會、時代により深淺單複の差あるは當然の事にして、教育あるもの又は所謂高襟者流の戀は、頗る入り込みたるものなること勿論なり。Spencer は其『心理學』に戀を下の如く解剖せり。「兩性を結合する情は普通一種の單純感情の如く論ぜらるれど、これを外にして他に、かく複雜にして、しかも勢力あるものはあらざるべし。如何となれば其純生理的材料以外に個人美による幾多複合印象をも算入せざるべからず。しかも其周圍には種々の快感つき纏はり、これらは其等自身に於て戀愛的ならざれども、結局、戀愛感に組織的關係を有し、尙愛情と名づくる複合感情も亦これに結合しつゝあることを認めざるべからず。凡そ愛情は同性の間にもよく存立し得るものなれば、一種獨立の感情とすべきも、此場合にありては著しく昇上の域にあることを忘るべからず。尙賞讚、尊敬等の感情混入し來り、さなきだに有力なるこれら諸勢力は此場合に於て、高度の活動を試みるものなり。次に加入すべきは是認の愛とも稱すべく、卽ち全世界より擧げられ、萬人にまさりて賞したるものの愛を受くるの自覺にして、其力は全て過去の諸經驗の上に出づ。而して其內には第三者の人々より公平なる眼を以て自己の成功を認識せらるゝことの間接的快感をも混入するものとす。こゝに於て自重の聯合情緒起る。卽ち一個の人格の愛を獨占し或は其上に全權を有することの自覺を生ず。此の自然

に湧き出づる自重心は一變して一個の自愛となるものなり。加之所有の快感あり。凡そ個人の間には犯し難き壁ありて、相互の行動は常に多少の制限を必要とすれども、戀人は所謂一心兩體にして全ての垣は取拂はれ、自由活動の愛、こゝに遂行し得るを認むべし。而して更に同情の要求ありて、あらゆる自己中心の快樂は、この同情により一倍し、自己の快樂に戀人の快樂加はるものなりとす。如此、生理的感情が骨子となり其周圍に人體美の諸感情蝟集して始めて戀を構成するものにして、前者は單に愛着の因となり、後者は尊敬、是認、自重、所有、自由、同情の愛に導くものとす。しかしてこれらのもの著しく興起し其活躍たる作用が相互に呼應する時、全てこの心的現象を總括して『戀』と名づく。然るにこれら諸感情は其自身に於て既に意識の雜多方面に含蓄するを以て、吾人若し上述の狀態に陷る時は吾人が具有する殆どあらゆる興奮的作用は混じて一團となるの理なるを以て、所謂戀の力が至大なるは毫も怪むに足らざるべし。」(*Principles of Psychology*『心理學大綱』第一卷、二一五節)

開明の世には如此込み入りたる現象もあるべきも、兎に角、戀は兩性的本能に其源を有することと明らかなれば、余は此所に此情緒を收めたるものなり。

而して此基本情緒が果して文學的內容たり得べきや否やに關しては、何人も其答を要せざるべけれど、これには社會維持の政策上許し難き部分あることを忘るべからず。如何に所謂「純文藝





派」の輩と云へども戀には文學に容れ難き方面の存在し居ることを是認すべきなり。然れども、かく云へばとて此情緒が文學的內容卽ち(F+f)の資格を具有することは到底之を否定すること能はず。こゝに吾人は當下の義務として普通の意義に於ける戀の作例を擧ぐべし。

偖此情緒が文學的內容として用ゐらるゝ分量は實に驚くべき程にして、古今の文學、ことに西洋文學の九分は何れも爭うて此種の內容を含むと云ふも不可なきが如し。就中小說、戲曲の類にありては此分子なしに存在すること殆ど不可能と云ひ得べし。英國の小說家 Anthony Trollope其自傳中に述べて曰く、「凡そ小說家の作品の大部分は必ず年若き男女の關係に何れかに於て觸るゝものにして、戀愛の分子を去りては小說に興味を附し其成功を期すること甚だ難きを認めざるべからず。勿論世に無戀愛の作、稀に行はるゝことなきにあらざれども、これらと云へども尙所々に其禁を弛め、全篇を統ぶる爲常に此柔らかき戀情の加味を必要とするが如し。*Pickwick* さへも尙四組の戀人を有し其戀々たる心情は、これに適度の軟味を添ふるにあらずや。余も亦嘗て *Miss Mackenzie* に無戀愛の趣向を試みたることあれども遂に不得已彼女を戀人となせり。青年の心を動かすに最も適したる此情緒に筆を執つて、かく絕えず接觸するは固より多少の危險なきにあらざれども、一面より見れば此戀愛を取扱ふの必要が却つて有利なるを認めずんばあらず。必要の理由とは他なし、凡そ此情は全ての人を動かし、或は少なくともかつて動かしたるものにし

て、何人と雖も此情を解せざるものなし。或はかつて、或は現在に、或は將來に必ず此方面に於て何等かの經過を有すること明らかにして、假に之を擯斥するものありとせば彼等は同樣の熱心を以て之を排するに相違なければなり。」

如此有樣なるを以て所謂戀なるものの文學的內容としての例證は、例を引くに及ばざる程陳々相倚るの有樣なれば、寧ろ戀なき作を取り來り之を例外として論ずるの當然なるを信ず。されども形式を全うする爲め兎に角二三を紹介すべし。

(a) Coleridge の *Love* と題する詩は諸君の知る如く古來有名の作品の一なり。其第一節に曰く、

"All thoughts, all passions, all delights,
Whatever stirs this mortal frame,
All are but ministers of Love,
And feed his sacred flame."

此詩は、或人 Genevieve なる女性に懸想して或月明の宵、古城の跡に、古き武士の石像によりかゝり、其武士のありし昔の戀に事寄せ遂に Genevieve を得たりと云ふ意なり。

"And so I won my Genevieve,
My bright and beauteous Bride."





先に引用したるは其冒頭の一節にして、此節によりて見れば戀に關して二樣の釋義を得べし。苟も吾人の心を動かし、情緒を喚起し、愉快の感を生ぜしむるは、卽ちこれ戀の力なりと、是一なり、愛は神聖なりと、是二なり。

(b) Browning の *Love among the Ruins* の結末にはたゞ三字よりなる句あり而して其句には Love is best とあるのみ。

場所は何處とも知らず、其昔隆盛を極めし繁華の都あり。かつては國富み兵強き大國の首都なりしが滄桑の變は此都を化して今は荒畑冷雨の中に寂寞たらしむ。其寂寞を藉りて前代の榮華を寫し、兩者の間を補綴するに一脈の戀を以てせるが此詩の生命なり。先づ古きを追懷して曰く、

"Where a multitude of men breathed joy and woe
Long ago;
Lust of glory pricked their hearts up, dread of shame
Struck them tame;
And that glory and that shame alike, the gold
Bought and sold."

されども今は

"Now, — the single little turret that remains
On the plains,
By the caper overrooted, by the gourd
Overscored,"

此間に云ふべからざる荒寥寂寞の感あり。宛然支那の懐古の詩に對するが如し。この廢墟のうちに暮色蒼然たる頃、一人の少女の古塔を攀ぢて戀人の來るを待つ。今來るか、今來るかと待つ間は「來る殿を唐黍高し見下さん」とも見るべし。昔しは王公の倚りて天下の眺を擅まゝにせし窓なるを、今は名も知れぬ農家の女兒が來ぬ人を待つ間のたよりとなる。やがて男來る。女は兩手を肩に置き、暫時は何の言葉もなし。詩人は歌ふ、「戀は無上」と。

"In one year they sent a million fighters forth
South and North,
And they built their gods a brazen pillar high
As the sky,
Yet reserved a thousand chariots in full force —
Gold, of course.



Oh heart! oh blood that freezes, blood that burns!
Earth's returns
For whole centuries of folly, noise and sin!
Shut them in,
With their triumphs and their glories and the rest!
Love is best."

其意に云ふ黄金よりも力よりも、また全ての勝利にもまさりて尊きは戀なりと。

以上兩詩人の外、Keats の如きも亦其作 *Endymion* に同樣の感を述べたり。由來 Keats は頗る浪漫的の變りものにして、時には甚だ可笑しと思はるゝ箇所あるが如きも、此戀愛に關する見方は別に Keats の專賣とは云ひ能はざるべく、恐らくは西洋諸家共通のものなるべし。余はこゝに是を攻撃するの意なし。たゞ戀愛の分子が如何に文學的內容に加はり、又其戀愛なるものを西洋の文學者流が如何に過當に見積もるかを紹介すれば足れりとす。

"What care, though owl did fly
About the great Athenian admiral's mast?
What care, though striding Alexander past

The Indus with his Macedonian numbers?
Though old Ulysses tortured from his slumbers
The glutted Cyclops, what care?— Juliet leaning
Amid her window-flowers, — sighing, — weaning
Tenderly her fancy from its maiden snow,
Doth more avail than these: the silver flow
Of Hero's tears, the swoon of Imogen,
Fair Pastorella in the bandit's den,
Are things to brood on with more ardency
Than the death day of empires."—Keats, *Endymion*, Bk. II. ll. 22–34.

或は Bk. IV に Phebe の戀を敍して曰く、

"Ye deaf and senseless minutes of the day,
And thou, old forest, hold ye this for true,
There is no lightning, no authentic dew
But in the eye of love: there's not a sound,
Melodious howsoever, can confound
The heavens and earth in one to such a death
As doth the voice of love: there's not a breath
Will mingle kindly with the meadow air,
Till it has panted, round, and stolen a share
Of passion from the heart!"—ll. 76–85.

固よりこれを以てKeats自身の感と云ふを得ず。されども彼の想像に於て、かくあるべしと觀たる結果なること明らかなり。

文學もこゝに至りて多少の危險を伴なふに至るなり。眞面目にかくの如き感情を世に吹き込むものあらば、そは世を毒する分子と云はざるべからず。文學亡國論の唱へらるゝは故なきにあらず。凡そ吾々東洋人の心底に蟠る根本思想を剔抉して之を暴露するとせよ。教育なき者はいざ知らず、前代の訓育の潮流に接せざる現下の少年はいざ知らず、尋常の世の人心には戀に遠慮なく恥ることの快なるを感ずると共に、此快感は一種の罪なりとの觀念附隨し來ることは免れ難き現象なるべし。吾人は戀愛を重大視すると同時に之を常に踏みつけんとす、踏みつけ得ざれば己の受けたる教育に對し面目なしと云ふ感あり。意馬心猿の欲するまゝに從へば、必ず罪惡の感隨伴

し來るべし。これ誠に東西兩洋思想の一大相違と云うて可なり。西洋人は戀を神聖と見立て、之に耽るを得意とする傾向を有すること前諸例によりても明らかなるべく、また如此く重きを置かれたる此情緒を圍繞せる文學の多きも勢ひ免るべからざるなり。佛國の學者 Guyau は希羅古代文學の佳所は其浪漫的ならざるにありと論じ、語を續けて曰く「近世文學は屢〻餘りに蠻的にして、或は時に上品に過ぎて調和を缺き、又殆ど常に情熱的に過ぐる嫌ひあり。卽ち Pascal が所謂戀情と稱するところのものの侵略を受くること甚し。婦人は近世文學の神泉にして、今の儘に放置せば年少者の心に永久に非男性的氣風を宿らしむるの危險あるべし。」（『教育と遺傳』二三七頁）

更に一例を重ぬれば、Weyburn と Aminta (Lord Ormont の有名無實の妻) が再會して昔の戀再發する樣を作家 Meredith は評して曰く "An honourable conscience before the world has not the same certificate in love's pure realm. They are different kingdoms. A girl may be of both; a married woman, peering outside the narrow circle of her wedding-ring, should let her eyelids fall and the unseen fires consume her."—Chap. xx.

恐らくは、これが眞理なるべく、また古往今來かゝる婦人は夥多あるべし。然れども此眞理は徒らに吾人を不快に陷入るゝの眞理なるのみならず、現在の社會制度を覆へす傾向ある眞理なり。





現在の社會制度を覆へす傾向ある眞理は必要を認めざる限りは手を觸れざるを可とす。西洋に於てすら然るべし。東洋に在つては無論ならん。されば作家が如此不法の戀愛を寫し、しかも、これに同情を寄するに至りては、到底吾人の封建的精神と衝突するを免れ能はざるなり。吾人は父子君臣の關係に於けるが如く、戀に於ても亦、全然自由を有するものにあらず。否其自由を得んとする心を我儘と感じ、手前勝手となすものなり。されば、如此き自由のうちに耽る者を社會の秩序を破る敵と心得、これを描くものあれば、たゞ忌まはしと憎むのみ。要は此忌まはしと思ふ心と、面白しと興がる心、又は美しゝと見る念との釣合にてかゝる文學の存在の價値は決するものなるべく、此釣合は常に社會の組織と共に推移するものなれば、此點に於ては現代の青年は既に封建時代の青年と著しく其見解を異にするやも知るべからず。世に徒らに美的生活を叫び美感の滿足を得れば道德は顧みるに足らずと云ふものあり。然れども道德も遂に一種の美感に過ぎず。裁決は此兩者衝突の結果をまたざるべからず。

以上は Groos 及び Ribot の著書中にある順序に據り、文學には如何なる感覺的分子ありや、又情緒が內容となつて混入することありや等を引例により示したるに過ぎず。勿論先にも述べし如く觸、味等耳目視聽を動かす感覺的材料が文學的材料として採用せらるゝ場合には必ずしも、純且單なる形式によるものにあらず、多くは種々の複雜なる聯想を隨伴するを以て、其作例の如

きも決して常に單純のものと云ふを得ず。次に述べたる情緒につきても同樣なりと知るべし。

以下少しく複雜なる材料につき論ずべし。凡そ複雜なる腦髓及び感情を有するものには其複雜の程度に應じて入り込みたる事物が優勢なること勿論なり。(但し或程度以上に複雜の度を進むる時は、興味は消えて混雜となるべし。例へば小兒對哲學小說樣のものなるべし。)こゝに若き男女、單に肉慾の上より相慕ふ樣を敍する人ありと假定せんに、その露骨にして趣味なき點に於て教育ある人士の間に齒せられざること勿論なれども、其單調にして變化なき點に於てすでに充分擯斥の價あるものとす。戀愛にも、かのSpencerが指摘せる如き幾多複雜の分子あつて始めて興味津々たり得べし。

由來吾人人類は比較的複雜の精神狀態にあるを以て、複雜なる事物は極めて簡單なるものよりも(甲十乙)として有力なるが如し。

此點につきては尙多少議論の餘地なきにあらざれども、こゝには只文學的內容の種類を列記するを目的とすれば、直ちに複雜情緒の引例に移るべし、

偖先に述べたる如き單純なる情緒が如何なる徑路をふんで複雜情緒に發展するものなりや等に關しては、多樣にして容易に概論すべからざるを以て多く云はず。例へばSpencerが說きし戀の如く種々の成分が一の齟齬するところなく相集まりて一情緒を構成することあり。或は嫉妬の





如く一方にては或者を愛し、同時に一方にては此愛する目的物を得ざるより、思慕と憤怒と併發し一情緒を生ずることあり。又崇高の如く、偉大なる物體に對して生ずる賞歎と恐怖を具有することあり。又宗教的感情の如く一方には神を恐るゝ感じと、これに對する尊敬の感じと、更に他方にはこれを愛する感じ等全て相融合して生ずることあり。如此千差萬別、列擧の煩に堪へず、かの普通、人事の善惡に關するもののみにても、仁惠、誠實、義務、正義、謝恩等無數なるを以て一々これらに伴なふ感情の成分を解剖し、其發展の跡を究むるは到底不可能のことに屬す。こゝには唯一二例を擧ぐるのみ。

今複雜情緒のうち、最も簡單なる、かの嫉妬をとりて檢するに、Ribotの說に由れば「嫉妬には先づ嘗て得たるか、或は拒絕をうけし善き對照物、卽ち奮起、動力の作用ある快樂的分子。更に失權、剝奪の觀念(例へば、情婦に對しては情人)、卽ち失意の結果に來るべき苦惱の分子。次に起るべきは、上記の失權、剝奪の事實的或は架空的原因を握り得たりと信ずる觀念、卽ち破壞的分子なり。」

讀者の知る如く古今の文學史中、*Othello*の一篇は全く此情緒を骨子として組み立てて、しかも非常の成功を得たるものなり。同作に於てOthelloが其妻Desdemonaに對し嫉妬の念を發し、遂には忌まはしき慘劇に終るに至るには、先づ、自分はDesdemonaを獨占し、これを失ふ恐れ

なしとの自覺より生ずる一種の快感を有したりしなるべく、次に其愛を疑ふの不得已に至るは第二期にして、其感は不快にして失意、煩悶なり。而して靜かに、如此成り行きし事の原因を求め、之を推定し、若し自己に於て之を發見し得たりと信ずる時は、憤怒の熱情は濤の如く湧き來り、其情は烈しき破壞的力となるものなり。以上三期のfを混じたる複成情緒を嫉妬と云ふなり。

誤解を避くる爲、こゝに一言すべきは、前に擧げたる單純情緒の例に於ても戀の如きは其成分甚だ複雜なること勿論なれども、これを以て單純の部に編入したるは、嫉妬の如く三種のfが合併して一情緒を構成するにあらずして、其普通の場合に於てはたゞ兩性的本能を中心として幾多の附着物を呼び出すにすぎざるを以てなり。又忍耐、同情等の例に於ても、これらは決して常に純且單なる忍耐、同情をあらはすにあらず、忍耐の如き、時には意志＋愛の形式にて纏め得る場合なきにあらざれども、要するに嫉妬の如く其複成物を一語にて云ひ表はすこと能はざるを以て、これ亦暫く單純情緒として論じたるなり。

更に複雜情緒の例として、忠義卽ち loyalty を取らんか。古來我國に於て獨特の强度を有したる此情緒は決して單純なるものにあらず。

(1)義務の念＋f。 (2)尊敬の念＋f。 (3)忠實の念＋f。 (4)犧牲の念＋f。





(5)面目の念＋f。

忠とは此等五種のfの合成物に與へたる名なるのみ。英文學中最もよく此情を發揮せるは *Richard II* のうち、Duke of York が其子 Duke of Aumerle の隱謀を觀破しこれを Bolingbroke (後に Henry IV) に告訴する一段にありとす。殊に此段にありて面白きは Duke of York が己が子を公然國王の前に投げ出さんと息捲くに引きかへて、其內室 Duchess of York は何處迄も老母氣質をあらはし、理を非に曲げても吾子を庇護するの極、果ては夫婦の爭ひとなる邊なりとす。

Richard II 勢を失ひ、己が追放せし Bolingbroke がまだ期限もきれぬに歸國して一般の歡迎を受け、王は遂に讓位の不得已に至りしとき、York 侯は夫人を相手に當時の有樣を物語る。折から其子 Aumerle も Oxford より來り合はせ、親子三人落ち合ひたる時、父は不圖其子の胸に懸けたる封印を見て、"What seal is that, that hangs without thy bosom?" と何心もなく問ふ。問はれたる子は不意を打たれて思はず顏色を失す。父は其仔細を手嚴しく問ひ詰むるに、母は傍より口を添へて、今度の御儀式につき仕立屋への借證文にても候べしと云ひつくらふ。父は憤怒に堪へかね、無理無性に奪ひ取りたる後、

"Treason! foul treason! Villain! traitor! slave!"—Act V. sc. ii. l. 72.

と叫びつゝ、従者に馬の用意を命ず。「長靴を」「鞍を」と驚ろき喚く夫人を顧みずしきりに出發の用意を急ぐ。時を移さず國王に直訴して吾が子の罪を罰せん爲なり。母は云ふ無情なり、わが子をわが子と思はぬは無情なり。侯爵は顧みずして去る。こゝに於て夫人は其子を伴なひ宮廷にいたり、侯爵の至らぬ間に謝罪の上赦免の恩にあづからんものをと急ぎ出づ。

舞臺は廻る。Windsor 宮殿の玉座近くへ Aumerle 第一に驅け來る。密談あればとて王を別室に請じ、錠を下ろす。父なる侯爵は一足後れて馳せ參じたるが此時、大音に「危し、危し、謀叛人御前間近にあり」と呼ぶ。王は戸を開き何事の仔細ぞと問ふ。侯爵は是に於てかの密書を呈す。國王は極めて寛大に

"And thy abundant goodness shall excuse
This deadly blot in thy digressing son."—Act V. sc. iii. ll. 65-6.

と云ふ。侯爵は難有しとも思はず、

"Mine honour lives when his dishonour dies,
Or my shamed life in his dishonour lies:
Thou kill'st me in his life; giving him breath,
The traitor lives, the true man's put to death."—ll. 70-3.





と氣燄あたるべからず。かゝる所に夫人後ればせに着し、室に入るや否や、口を極めて夫を罵る。

"O king, believe not this hard-hearted man!
Love loving not itself none other can."—ll. 87-8.

母の心には子供の身の安全と云ふことの外に何物の影も宿らず。叛逆が眞なりとも、夫が正直なりとも、吾が君の身が危しとも、たゞ子供の命だに助からば夫にて滿足なり。之に反して夫は子が殺さるゝとも、妻が狂するとも、たゞ忠義の道さへ立たば本懷の至りなるべし。さるからに侯爵は妻を罵りて曰く、

"Thou frantic woman, what dost thou make here?
Shall thy old dugs once more a traitor rear?"—ll. 89-90.

王は兩人を取りなす。母子は跪いて其恩赦を請ふ。父は許さず。

"Against them both my true joints bended be.
Ill mayst thou thrive, if thou grant any grace!"—ll. 98-9.

妻は、かゝる氣強き夫の言葉の奥にも必ず熱き涙のあるべきを思ひ、

"His eyes do drop no tears, his prayers are in jest;
His words come from his mouth, ours from our breast."—ll. 101-2.

と云ふ。慮るところは自己と吾が子の二つあるのみ。王は兩人に立てと命ずれども、赦免の恩に浴せざる間は、いつ迄もかくあるべしとて肯ぜず。王も不得已遂に

"I pardon him, as God shall pardon me."—l. 131.

と云ふ。此時、女の答へに、御辭儀の功能が始めてあらはれたとある。("O happy vantage of a kneeling knee!") されども、尙飽き足らずして、今一遍「許す」と繰り返し玉へと乞ふ。王も仕方なく "With all my heart I pardon him" と繰り返せば、女は "A god on earth thou art." と贊辭をたてまつる。古往今來女性とは如此く正義の念に乏しきものにして、通常識者が見て笑ふべき言語動作を敢てして、毫も恥とせざることあり。これ此女性が其夫とよく對照して裏面より忠義の眞面目を發揚する所以なり。

其他類似の複雜情緒につき一々例を擧ぐるは、徒らに煩雜に渉るのおそれあるを以て、こゝには少しく其Fの趣を異にせるものにつき一言すべし。趣を異にせるFとは他にあらず。上來述べし內容は悉く余が所謂(f+b)に改め得べきものにして、勿論其Fは表はれたる時、表はれざる時あれども、とにかく此Fなる者は全て具體的のものたることを忘るべからず。白沙青松に對し美なりと思ふ時のFの具體的なるは勿論の事、人に打擲せられて怒ると云へば此怒なるfの原因たるFは「人に打擲せらるゝ」と云ふ、一種の心に描き出し得る光景なりとす。其他の場合に於ても苟もfを引き起し得る爲には其Fが必ず具體的光景なるか、又は、これに改作し得るものならざるべからず。卽ち月と云へば月の觀念も元より必要なるべきも、先づ第一に缺くべからざるは月の光景なり。此畫姿さへあらばfを生ずること容易なり。但し抽象的觀念だけにてはfを生ずること頗る困難なるのみならず、時には全くfを缺損すること屢〻なりとす。

Maeterlinck の *Sister Beatrice* のうち Beatrice が戀に迷うて寺を逃れ、幾年の流浪に艱難困苦を嘗めつくし、再び寺に歸り、尼共の前に其身の漂泊を物語る節に左の句あり。

"Ah! Heaven's angels! Ah!
Where are they, tell me, and what do they do?
Have I not told you? Why, I have not now
My children, for the three most lovely died
When I no more was lovely, and the last,
Lest it should suffer, being one night mad,
I killed. And there were others never born,
Although they cried for birth. And still the sun
Shone, and the stars returned, and *Justice slept*,



257874

And only *the most evil* were happy and proud."

具體的光景に滿ちて讀者の情緒を動かすこと甚だ大なるにも拘はらず、Justice slept 及び the most evil（人間を指したるものなれども其漠然たるところ抽象的なりと云ふべし）の二句抽象的なるが爲に、印象著しく減少せざるやの疑あり。好例とは云ひ難きも抽象的觀念に伴なふfは比較的微弱なるを示し得べし。

然るに、こゝに抽象的觀念のうち相應のfを喚起するものあり。

(一)最初より具體ならざる無形、無聲のF、卽ち超自然的事物に對する情緒なり。然れども神、幽靈等は、やゝもすれば具體的外形を添ふるの恐れあるを以て、先づ其最もよき標本を擧ぐれば、現今耶蘇教徒の說く神の如く、何とも譯の分らぬ、絶對無限にして手のつけ樣なきものに對する情緒。

(二)數百若しくは數千の單獨なる場合を概括してこれに對する情緒を起す時。卽ち一般共通の眞理は、(1)單純ならざるべからず、(2)常に常人の意識域下に潛み居る眞理ならざるべからず、(3)科學者が科學的研究の結果算出したる、普通一般の知識と緣遠き眞理なるべからず、(4)主として人事に關するものならざる可らず、(5)我等が日常處世の際に切實に應用し得べきものならざるべからず、(此趣味あるが爲に吾人の心琴に觸れ情





緒を喚起するものと知るべし。）

超自然的事物。就中、耶蘇教徒の有する此種の情緒が、泰西文學に至大の勢力を有することは今更喋々するを須ゐざるべし。聖書は此情緒の結晶にして萬古の珍寶なり。其他 *The Confessions of Saint Augustine* の如き、自己の懺悔を直接に神なるFに告白したる一種の自傳體文學なり。或は日常、人の誦讀する *Imitation of Christ* も此宗教的感想を中心として成立するものなり。其他英文學中に在りては Jeremy Taylor の *Holy Living and Holy Dying* 抔有名のものなるべし。又古きは中世の Miracle plays（宗教的芝居）近くは Milton's *Paradise Lost* 又は Bunyan's *Pilgrim's Progress* 等を始め其他英文學中に散在する數百卷の作品はたとひ醇雜一樣ならざるも皆ある形式のもとに此種の觀念を含むものなり。多くの例を擧ぐる必要なけれども現に Tennyson の *In Memoriam* の序を見ても、

"Strong Son of God, immortal Love,
Whom we, that have not seen thy face,
By faith, and faith alone, embrace,
Believing where we cannot prove;"

と云ふ第一節より

"Forgive these wild and wandering cries,
Confusions of a wasted youth;
Forgive them where they fail in truth,
And in thy wisdom make me wise."

に至つて純然たる宗教的情緒に外ならずと云ふべし。

又 St. Augustine の『懺悔錄』に曰く

"Great art Thou, O Lord, and greatly to be praised; great is Thy power, and Thy wisdom infinite. And Thee would man praise; man, but a particle of Thy creation; man, that bears about him his mortality, the witness of his sin, the witness that Thou resistest the proud: yet would man praise Thee; he, but a particle of Thy creation. Thou awakest us to delight in Thy praise; for Thou madest us for Thyself, and our heart is restless, until it repose in Thee. Grant me, Lord, to know and understand which is first, to call on Thee or to praise Thee? and again, to know Thee or to call on Thee? for who can call on Thee, not knowing Thee? for he that knoweth Thee not, may call on Thee as other than Thou art."—Bk. I.

假令正確の意義に於ける宗教的感想ならずとも、兎に角、形而上哲學者が所謂 Mundane Spirit (世靈) と名づくるもの、或は宇宙則神論者が形而下の物體に渙然たる靈を想像し、又は其存在を信じ此無聲無臭の物に向つて、これをFとして、一種のfを生ずることあり。詩人にありては Wordsworth の如き其一例なり。有名なる *Lines composed a few miles above Tintern Abbey* は此種のfを發表し得たるものなり。少時始めて此勝地に遊びし頃を思ひ出でし彼は咏つて曰く

"when like a roe
I bounded o'er the mountains, by the sides
Of the deep rivers, and the lonely streams,
Wherever nature led: more like a man
Flying from something that he dreads, than one
Who sought the thing he loved."—ll. 67–72.

されど年老いて再び此處に杖を曳けば、樹も水も舊態を改めざるに、これに對する自己のみは昔の自己にあらず、天地の間、宇宙の裡に磅礴たる一種の浩氣の何時の間にか生じたるを自覺せり。

"A motion and a spirit, that impels

All thinking things, all objects of all thought,
And rolls through all things. Therefore am I still
A lover of the meadows and the woods,
And mountains; and of all that we behold
From this green earth; of all the mighty world
Of eye, and ear,—both what they half create,
And what perceive; well pleased to recognize
In nature and the language of the sense,
The anchor of my purest thoughts, the nurse,
The guide, the guardian of my heart, and soul
Of all my moral being."—ll. 100–11.

以上歌ふところはたゞ、自然を見て愉快なりと云ふに非ずして、此自然を通じて一種の靈を認め得て快なりとするものなり。卽ち形而上のFにfを附加し得たる一例とすべし。

概括的眞理。此種のFにしてfを喚起し得るもの多きは上述の如く、又其性質の如きも一言說明したればこゝに、繰り返すの要なかるべし。凡そ此等のFのうち最も吾人の注意に値するは各





國固有の俚諺にありとす。或は其賢哲の格言に於ても亦之を求め得べし。或は名流の小說、戲曲に著者自身の言として或は作中人物のそれとして現はれ來ることもあるべし。而して是等は皆直接に人生の利害に深き關係を有する經驗を僅か一句にまとめたるもの、或は賢人ありて其生涯の抱負を適切なる數語に結晶せしめ得たるものにして、試みに、かの epigram（詩銘）又は諺を集めしものを繙くに、吾人は其名句に富み、これを大にしては M. Arnold の所謂「人生の批評」なる目的に叶ひしものなるを是認すべし。

Milton は云くり。

"Nor love thy life, nor hate; but what thou liv'st
Live well; how long or short permit to Heaven."—*Paradise Lost*, Bk. XI. ll. 553–4.

彼又云はく。

"The mind is its own place, and in itself
Can make a Heaven of Hell, a Hell of Heaven."—*Ibid*, Bk. I. ll. 254–5.

沙翁は云ふ。

"We are such stuff
As dreams are made on, and our little life

Is rounded with a sleep."—*Tempest*, Act IV. sc. i. ll. 156–8.

これ一種の訓言に外ならず。かの *Imitation of Christ* の如きは通篇悉く此種のFを以て充たさるゝものなり。數例を擧ぐれば、

"We are all frail, but thou oughtest to esteem none more frail than thyself."

—Bk. I. chap. ii.

"This ought to be our endeavour, to conquer ourselves, and daily to wax stronger, and to make a further growth in holiness."—Bk. I. chap. iii.

"When a man humbleth himself for his faults, then he easily pacifieth others, and quickly satisfieth those that are offended with him."—Bk. II. chap. ii.

等無數なりとす。其他、法話、語錄、支那文學の一般及び說教等には是等のFを最も多かるべし。例として忘るべからざるは Emerson の『論文集』にして、此等の短論文は讀者の知る如く、格言を團子式に串もて貫きたると同樣の感あり。又軟文學中にありては沙翁の如き其好例なりとす。さきに擧げたる Prospero の言葉は幾多の適例の一なるのみ。

"Uneasy lies the head that wears a crown."—2 *Henry IV*, Act III. sc. i. l. 31.

"Princes have but their titles for their glories,



An outward honour for an inward toil."—*Richard III*, Act I. sc. iv. ll. 78–9.

"Things sweet to taste prove in digestion sour."—*Richard II*, Act I. sc. iii. l. 236.

Polonius が Laertes に與ふる忠告も亦世渡りになれし老人が其年來の經驗を概括したるものとして、よく吾人の情緒を喚起するに足る。

"Beware

Of entrance to a quarrel, but being in,

Bear 't that the opposed may beware of thee.

Give every man thine ear, but few thy voice;

Take each man's censure, but reserve thy judgment.

Costly thy habit as thy purse can buy,

But not express'd in fancy; rich, not gaudy;

For the apparel oft proclaims the man."—*Hamlet*, Act I. sc. iii. ll. 65–72.

Henry Bolingbroke が Richard II に追放せられて、其父 John of Gaunt と訣別する節を讀むとき、吾人は又人生一面の眞理が躍然として紙上に生動するを覺ゆ。

"*Gaunt.* All places that the eye of heaven visits

Are to a wise man ports and happy havens.
Teach thy necessity to reason thus;
There is no virtue like necessity.
Think not the king did banish thee,
But thou the king. Woe doth the heavier sit,
Where it perceives it is but faintly borne.
Go, say I sent thee forth to purchase honour
And not the king exiled thee; or suppose
Devouring pestilence hangs in our air
And thou art flying to a fresher clime:
Look, what thy soul holds dear, imagine it
To lie that way thou go'st, not whence thou comest:
Suppose the singing birds musicians,
The grass whereon thou tread'st the presence strew'd,
The flowers fair ladies, and thy steps no more

Than a delightful measure or a dance;
For gnarling sorrow hath less power to bite
The man that mocks at it and sets it light."—*Richard II*, Act I. sc. iii. ll. 275–93.

Bolingbroke 之れに對くて曰へ

"O, who can hold a fire in his hand
By thinking on the frosty Caucasus?
Or cloy the hungry edge of appetite
By bare imagination of a feast?
Or wallow naked in December snow
By thinking on fantastic summer's heat?
O, no! the apprehension of the good
Gives but the greater feeling to the worse:
Fell sorrow's tooth doth never rankle more
Than when he bites, but lanceth not the sore."—ll. 294–303.

父は老成の人なり、又其子の意氣を鼓舞するの義務を有す。子は追放の嚴命を受け、失意の境

にあり。其述ぶるところ相反するは無論のことなり。されども其相反するがうちにも各〻眞理の一面を道破し居るを何人も認め得べし。

こゝに注意すべきは此種のFは皆抽象的にして、これを具體的繪畫に改め難きことなり。前に擧げたる沙翁『嵐』中 Prospero の述懐 "We are such stuff as dreams are made on." 或は、今述べたる、John of Gaunt の "There is no virtue like necessity." の如き、すべて抽象的にして一種の概念に外ならず。されば此等Fに伴なふfは概念を基礎とするfなりと云ひ得べし。

されどもこれを以て數百數千の個々の場合を概括せるもの悉く抽象的なりと推論するは誤れり。例へば "Honesty is the best policy." (*Don Quixote*, 三三章) は抽象的なり。"Where ignorance is bliss, 'Tis folly to be wise." (Gray, *On a Distant Prospect of Eton College*) に於けるFも亦抽象的なり。次に "A kiss of the mouth often touches not the heart" と云へば其抽象的の意を減ず。"A man often kisses the hand that he would fain see cut off" の如きも等しく概括的概念なれども其抽象の度は微弱なりとす。最後にかの諺の如き形式を帶ばしむる時は多くは此等概念は具體化せらるゝものなりとす。「犬も歩けば棒に當たる」「藪から棒」は其一例なり。しかして此種の具體的一般眞理を最も多量に散見するは恐らく、世界文學中





*Don Quixote* の右に出づるものあらざるべく、其主人公 Sancho の言語は悉く此種の格言よりなると云うて不可なかるべし。(少なくとも余は通讀の際、しか感じたるなり。) 數例を擧ぐれば左の如し。

"True it is, if ever the heifer is offered, the tether is at hand."—Pt. II. Bk. IV. chap. x.

"Your worship describes it a very easy matter, but between Said and Done a long race may be run."—Pt. II. Bk. IV. chap. xii.

"The hare starts where she is least expected."—Pt. II. Bk. II. chap. xiii.

"The bed is filled, though it be with hay and straw."—Pt. II. Bk. I. chap. iii.

"Sleeves are good even after Easter."—Pt. I. Bk. IV. chap. iv.

"A bird in hand is worth two in the bush."—*Ibid.*

"The king's crumb is worth the baron's batch."—Pt. I. Bk. IV. chap. xii.

また現今の英國小說家にて好みて此種のF(具體的ならざれども)を作中に混ずるものは G. Meredith を以て最とす。

"Possession without obligation to the object possessd approaches felicity."
—*The Egoist*, chap. xv.

"There is pain in the surrendering of that we are fain to relinquish."—*Ibid.*

等を見て其一般を窺ふべし。また詩人に於ては Pope の如き此方面に尤も力を用ゐたるやの觀あり。

## 第三章　文學的內容の分類及び其價値的等級

以上は、概略ながら文學的內容たり得べきものの卽ち情緒を隨伴し得べきものの範圍を定め、これら內容は皆(F+f)の形式に當てはめ得ることを、作例により指示したるに過ぎず。而して此等引例は英文學中九牛の一毛たるは勿論、其例時に甚だ適切ならざりしやを恐るゝものなり。然れども兎も角、以上諸成分は皆、文學的內容として存在の價値を具へ、其聚合物も亦文學的內容として用ゐ得べきは讀者の了解し得たるところなるべきを信ず。勿論、其の個々として資格あるが故に其の合併したるものも亦當然、しかあるべしと推論するにあらず、魚も肉も野菜も米も麥も共にみな吾人食物の一部たり得べきも、此等の或兩者を合はせ用ゐれば時に腹痛下痢を誘起するが如く、以上に述べ來りし內容の一つ〳〵が文學的內容となり得たりとて或特別の組み合せを行へば存外の失敗を來すこと無とは云ひ難し。されども事實上概して云へば此種の聚合物は常に立派なる文學的內容として重んぜらるゝものにして、猶二品料理は一品料理に勝ると一般なるべし。而して其取り合せの出來不出來、卽ち調和法に關しては別に章を更めて論ずるところあるべし。





先にも述べし如く、情緒は文學の試金石にして、始にして終なりとす。故に社會百態のFに於て、苟も吾人がfを附着し得る限りは文學的內容として採用すべく、然らざる時は用捨なくこれを文學の境土の外に驅り出さざるべからず。而して今文學的內容たり得べき一切のもの、換言すれば(F+f)の形式に改め得べきものを分類すれば、

(一)感覺F、(二)人事F、(三)超自然F、(四)知識F、

の四種となるべく、自然界は(一)の標本にして、(二)の標本は人間の芝居、卽ち善惡喜怒哀樂を鏡に寫したるもの、(三)の標本は宗教的F、(四)は人生問題に關する觀念を標本とするものなり。

人或は云はん。此他に心理學者の所謂審美Fなるものあり。文學は一種の藝術なり、されば吾人がこれに對する感情は卽ち審美感想にあらずや、これを算入せざる理由如何と。されども余は答へて云はん。吾人が文學に對して生ずる情緒が概して審美的なることは明白なる事實なれども、こは、たゞ前に擧げたるFに附隨して起り來るものにして、單獨にかくの如き一種の情緒あるにあらず。故に强ひて審美的情緒なる語を用ゐんとせば、以上のうちに或ものを引き抜きて、しか名づくれば足る。これ余が特別に此項目を置かざりし所以なり。されば其審美情緒の起原に關す

る諸説、例へば Schiller の「遊戯説」(Spieltheorie) 或は Groos の本能説等につきて、余は何事も云はんとするものにあらず。たゞ一言すべきは、所謂審美情緒とは美に對する一種の主觀的感情に過ぎざれば、これ亦余が上來述べ來りしfのうちに含まるべきものなること勿論にして、審美情緒は常に快感なりと云ふ點よりして、此情緒は時にfと符合し時には全然符合する能はざることありと知るべし。

さて以上四種の文學的内容は何れも情緒を伴なふこと勿論なれども、其内何れが最も強大のfを起し得るか、換言すれば何れが最も文學的内容として適當なるかは余が未だ論ぜざりしところなり。

Milton は詩を以て單純にして感覺的、しかも情熱に富むべしと論じたるが、他は暫くこれを措き、此感覺的なる要素は實に注目すべきものにして、此要素、更に新式の語を以てすれば具體的要素は詩に於ては固より其他一般美文學に最も必要なる要件の一なること今更云ふをまたず。今第一種の感覺的材料をとり之を檢するに、それに具體的特長あるの故を以て、此種のものが吾人の情緒を呼び起すこと特に強大なるを認むべし。凡そ同一の物體を純客觀及び内顧的主觀の兩方面より描出する時、その何れが情緒の度合に於て勝れるかは明らかなる事實なるべく、かの Burns の詩歌を誦するものは其詩句の燒くが如き鋭さを感ずべきも、飜つて Wordsworth が此自





然界に一種の抽象的靈體を捕へんとするを見ては、如何に其言語の情的なるにもせよ其感興頗る鈍なるを免れざるべし。一は直接にして、その讀者の情緒を喚起するは恰も電光石火の如く、或は響の聲に應ずるに似たり。而して他を味はふには、先づ讀者が詩人と共に思索の狀態に入り、而して冥想の結果始めて趣味を感ずるものなりとす、故に手ぬるくして直下ならず。次に第二種の人事的材料を見るに、先づ人に伴なうて活動する實劇と、活人より切り離されたる人事上の議論と、何れが吾人の心に觸るゝこと強大なるかは論ずるを待たず、千百の戀愛論は遂に若き男女の交はす一瞥の一刹那を敍したる小説の一頁に及ばざること明らかなり。世に一美婦に惱殺せられ、苦悶の極、自殺を計るは珍らしからねど、「愛」なる抽象的性質を熟考して狂へるものは古往今來未だ聞かざるところなり。親の爲に川竹に身を沈め、君侯の馬前に命をすつるは左迄難きことにあらず、親は具體的動物にして、君侯は耳目を具有し活動する一個人なるを以てなり。されども身を以て國に殉ずと云ふに至りては其眞意甚だ疑はし。國は其具體の度に於て個人に劣ること遠し。これに一身を獻ずるは餘りに漠然たり。抽象の性質に一命を賭するは容易のことにあらず。若しありとせば獨相撲に打ち殺さるゝと一般なり。故に所謂かく稱する人々は其實此抽象的情緒に死するにあらず、其裏面に必ず躍如たる具體的目的物を樹立し、これに向つて進み居るものとす。されども此殺人的獨相撲の連中全く無しとは云ひ難し。所謂天命を樂しむ君子は此抽象

的變梃子物に情緒を有する人々なり。道の爲に倒るるとは、道の何物たるを意識することなくして、これに情緒を附加する大丈夫なり。かの禪門の豪傑知識、諸緣を放下し專一に己事を究明し、一向專念、勇猛精進、行住坐臥、何をか求むると云へば彼等未だかつて見聞せざる底の法を求め、しかも遂に捕へ能はざる的の道なり。覺らざるに先だち彼等に法のあるべき理なく又道の行はるべき理なし。然るに此不可思議の法と道とのため、其一生を抛つて顧ず、眞個、是れ龍領虎頭の怪物にして尋常一般の人間にあらず。既に一般人間に非ざる以上は彼等は、よろしく除外例として遇すべきなり。故にfはFの具體の度に正比例するなる事實は依然として事實なりとす。如此く論じ來れば、以上四種の內容のうち、比較的Fの明瞭を缺き、抽象の度多きは第三及び第四なるべし。勿論概念を標準とする第四種の內容とても、もと具體的のものより漸次抽象的に變化したるものなれば、如何なる場合にありても全然fを缺く如き事はあらざれども、興味と情緒は其具體の度に相伴なふこと疑ひあらざるところなりとす。

一例あり。Pope の *Supplio to Phaon* は Ovid より脫化し來りたるものなるが、Sappho が Phaon に海を超えて歸り來れと歌ふ末段に、

"O launch thy bark, secure of prosp'rous gales;
Cupid for thee shall spread the swelling sails."—ll. 252–3.





とあり。此第二句は、さのみ抽象的なりとも思はれざれども、Bowles は之を評して「かりに Pope に違算ありとせば、そは餘りに其概括的傾向強き點にあり。ことに原文に整然たる具體的印象をなはれる場合に在つては猶更に見逃し難き癖なり。

'Cupid for thee shall spread the swelling sails.'

の一行に相當する原文を檢するに Cupid が水先者として船をあやつり、其軟き手をもて帆をはる邊、一々明瞭なる印象を讀者に與ふるにあらずや。」と評家の說妥當なりと云ふの外なし。

又 Wordsworth の "Ode to Duty" の第一節に曰く、

"Stern Daughter of the Voice of God!
O Duty! if that name thou love
Who art a light to guide, a rod
To check the erring, and reprove;
Thou, who art victory and law
When empty terrors overawe;
From vain temptations dost set free,
And calm'st the weary strife of frail humanity!"—ll. 1–8.

如何にその乾燥無味なるかを見よ(西洋人は知らず余はたゞ如此感ずるなり)。更にまた其理由を思へ。之を檢するに(1)全體に於て抽象的文字非常に多し、(2)毫も繪畫の分子なく、色彩を缺く(彼は之を避けん爲め、又之に Ode の體裁を存せしめんが爲めか、一種の擬人法を適用したれど此擬人は何等の響をも發することなし)。"A light to guide, a rod to check" の一行僅かに具體的なりと云ひ得べきのみ。M. Arnold は此詩人つねに理窟に陷る弊あるを咎め、且曰く「"Excursion" は哲理に富むの故を以て、公平の評家が許容し能はざる名聲を所謂崇拜家(Wordsworthians)の間に博するものなり。此大作中、彼は "Duty exists;" と歌ひ、更に、

"—immutably survive,
For our support, the measures and the forms,
Which an abstract intelligence supplies;
Whose kingdom is, where time and space are not."—Bk. IV. ll. 73-6.

と云へり。崇拜するものはこれを激賞して、哲學と詩との融合こゝに實現せられたりと說けども、公平なる批評を以てすれば、此數句は其解かんとしたる命題以上に一歩たりとも踏み出し得ざる失敗の作と云ふの外なし。卽ち詩の本質より隔離したる高尙なる抽象文字の集合たるに過ぎず。」此說は至當にして何人も、これを無理とは思ふまじ。こゝに論ずる "To Duty" の如き亦同





様の譏を免れ難かるべし。此詩全體を通じて最も詩的なるは

"Flowers laugh before thee on their beds,
And fragrance in thy footing treads;
Thou dost preserve the stars from wrong;
And the most ancient heavens, through Thee, are fresh and strong."—ll. 45-8.

の數行なるが、其理由を思へば、たゞ比較的具體的なりと云ふが故のみ。

以上詩に就て述べしところのものは散文にも亦適用すべきものなり。具體的成分減少して極端に至れば Kant の論文の如く、Hegel の哲學講義の如く、或は Euclid の幾何學の如く、毫も吾人の感興を惹かざるに至るべし。勿論此等のものは Plato の云ひし如く「混沌のうちより規律を立て、荒漠のうちより物體を取り來り、境なきものに境を劃し、形なきものに形を與へ、事物に觀念を冠する」點に於て吾人の情緒を動かすことなきにあらざれど、此際其內容其物は情緒と全く沒交涉なるを忘るべからず。又假令哲學者、科學者の專門の論文ならずして、吾人が文學的內容として採用し得べき第四種のものと云へども、人世の重大事件に觸るゝことなき時は其興味著しく減退すること、恰も微風が水面を拂うて瞬間の漣漪を生ずるが如く、只僅かに讀者の微笑を買ふに過ぎざるべし。左に其好例一二を擧ぐべし。

"This was the shadowy sentiment that made the wall of division between them. There was no other. Lord Ormont had struck to fragments that barrier of the conventional oath and ceremonial union. He was unjust — he was Injustice. The weak may be wedded, they cannot be married, to Injustice. And if we have the world for the buttress of injustice, then is Nature the flaring rebel; there is no fixed order possible. Laws are necessary instruments of the majority; but when they grind the sane human being to dust for their maintenance, their enthronement is the rule of the savage's old deity, sniffing blood-sacrifice. There cannot be a based society upon such conditions. An immolation of the naturally-constituted individual arrests the general expansion to which we step, decivilizes more, and is more impious to the God in man, than temporary revelries of a licence that Nature soon checks."

—Meredith, *Lord Ormont and His Aminta,* chap. xxiv.

面白からざるにあらず。知育の高き人、若くは世故に經驗ある人が通讀して心の底にふわりと浮ぶ面白味に過ぎず。情熱の愉快にあらず、電光の愉快にあらず、直下の愉快にあらず。是等よりも落ち付きたる而(しか)つて情の籠らぬ冷淡なる愉快なり。

"'Oh! you may shake your head, but I would rather hear a *rough truth* than the most complimentary evasion.'

'How would you define a *rough truth,* Dr. Middleton?' said Mrs. Mountstuart.

Like the trained warrior who is ready at all hours for the trumpet to arms, Dr. Middleton wakened up for judicial allocution in a trice.

'A *rough truth,* madam, I should define to be that description of truth which is not imparted to mankind without a powerful impregnation of the roughness of the teller.'

'It is a *rough truth,* ma'am, that the world is composed of fools, and that the exceptions are knaves,' Professor Crooklyn furnished the example avoided by the Rev. Doctor.

'Not to precipitate myself into the jaws of the first definition, which strikes me as being as happy as Jonah's whale, that could carry probably the most learned man of his time inside without the necessity of digesting him,' said De Craye, 'a *rough truth* is a rather strong charge of universal nature for the firing off of a modicum of personal fact.'

'It is a *rough truth* that Plato is Moses atticizing,' said Vernon to Dr. Middleton, to keep the diversion alive.

'And that Aristotle had the globe under his cranium,' rejoined the Rev. Doctor.

'And that the Moderns live on the Ancients.'

'And that not one in ten thousand can refer to the particular treasury he filches.'

'The Art of our days is a revel of *rough truth*,' remarked Professor Crooklyn.

'And the literature has laboriously mastered the adjective, wherever it may be in relation to the noun,' Dr. Middleton added.

'Orson's first appearance at Court was in the figure of a *rough truth*, causing the Maids of Honour, accustomed to Tapestry Adams, astonishment and terror,' said De Craye.

That he might not be left out of the sprightly play, Sir Willoughby levelled a lance at the quintain, smiling on Lætitia: 'In fine, caricature is *rough truth*.'

She said: 'Is one end of it, and realistic directness is the other.'

He bowed: 'The palm is yours.'"—Meredith, *The Egoist*, chap. xxxvi.





吾人が此一節を讀みて感ずるところを云へば、其餘りに態とらしきことなり。此所に集まれる六七人の男女は何れも揃ひも揃うて怜悧にして如才なく、皆一種の知的修養と頓才を具ふ。凡そ吾人が日常交際する人物に於ても百人に一人、千人に二人、かくの如き人物なきに非ざれども、偶然一堂に會したるものが悉く此型にはまり、各、得意の才辯を弄するに至りては、如何に知育の盛なる西洋にありても少しく不自然の跡なき能はず。されば是等の男女が、よく是程凝つたる言語を操り得るものなりと云ふ感は自然に消えて、たゞ其著者其人が一個の〝Rough truth〟なる文字を捕へ、粋を振り撒ける手際を感心するものなり。然れども此感心はたゞ夫丈に止まるものにして一般の情緒としては何ものもあることなし。要するに、あゝでもない、かうでもないと云ふ「でもない」連の駄辯に過ぎず。遊戯三昧の閑文字にして、第三流の通人が藝妓若くは茶屋女を相手に舌戰を試みて得意がると一般にして、傍にあるものは唖然として手持無沙汰に苦しむのみ。かくの如く吾人の主要感情或は處世問題に關係するところ甚だ淺きを以て、此一節の中心Fに伴なふfは極めて薄弱なりとす。

元來知的Fが文學的内容として餘りに適切ならざることは以上諸例にて明らかなるべし。但し專門の科學者が斯道の書に對し激烈なる感情を生ずることは時に意外なることあるが如し。

「Descuret は其著『熱情の療法』に Mentelli とよぶ匈牙利人の略傳を插入したり。此人は言

語學者にして、又數學者を兼ね、別に定まれる目的もなく、只學問の樂を求め、其知的慾望を充たさんがため其一生を學業に獻じたりと云ふ。巴里市の下等宿に居を置きしが、これとても慈善的に貸し與へられしものなりと云ふ。彼は絶對的に必要なるものの外全ての支出を廢して其經費を節約したり。されば書籍を購ふ費用をのぞきては、彼の生活費は一日七スーに過ぎず、其内三スーは食費にして四スーは燈料なりき。彼は日に二十時間連續的に讀書し、一週に一日數學の教授をなし、これにて其少額の生活費を辨じ得たり。彼の要するところは水、馬鈴薯、(これはランプの上にて料理せる由)及び油と粗末なる褐色のパンの四品のみなりき。彼は大形の荷物箱を室内に置き、晝は此内に、毛布或は藁にて包みし足を入れ、夜はこれを寢臺に用ゐたり。古びたる脊掛椅子、食卓、銚、錫壺及び無雜作に凸形に曲げたる錫の片——彼の燈器となることあり——の外、彼は何等の道具を有せざりき。又洗濯代を節約せんがため彼は一切襯衣を着けず、兵營より購ひ來りし兵士の着古し、南京木綿製の股引、毛皮の帽、巨大の木靴は彼の衣類の全部なりき。一八一四年、聯合軍の砲彈其宿所のあたりに墜落したれど、遂に彼を動かすことあらざりき。巴里に虎列剌病初めて流行したる時、彼の不潔なる室に清潔法を行はんとて、暫時其讀書を中止せんことを申入れしが、到底命を用ゐる樣子あらざるを以て遂に武力をかりてこれを斷行したりと傳ふ。如此一意專心、恨むることもなく、幸福なる三十年を一日の病もなく生存したるが、一八





三六年十二月二十二日、例によりてSeineの河に水くみに出で行き、如何なる廻り合せにや、足場を失ひ、折惡しく水嵩增したる河中に落ち、遂に無殘の溺死をとげたりき。Mentelliは著書を公にすることあらざりしかば其多年の研鑽の結果は彼と共に全く消え果てたり。」(Letourneau, *Physiologie des Passions*『感情の生理』二三頁)

此の如き例は例にならざる例なり。卽ち例外なり。普通の學者はMiltonが「完全なる人格に於ても最も免れ難き弱點」と稱したる名譽を對象として、これに一種の情緒を添へて研究を進めゆくものなるが如きも、此例に出でたる好漢に至りては然らず、全く研究其物に趣味を有せしなり。兎にも角にも、此等の例外に關係なく、第四種の文學的内容は概して强大の情緒を伴隨し得ざるものなること明らかなり。

第三種の内容、卽ち超自然界の物體が文學の材料として用ゐらるゝ場合。此種のものは、時に第四種以上の抽象物體をとり、これをFとしてfを附着すること尙第四種の場合と同一なりと雖、其新fの强度は遠く第四種内容の上に出づるものなり。凡そ宗教的情緒の强烈なることは古今東西に通じて爭ふ可からざる事實にして、讀者若し其一般を窺はんとせば宜しく宗教史或は高僧傳を繙くべし。宗教に冷淡にして、神の何たるものたるやを解し得ざる日本人にありては到底其猛烈の度合を夢想だに入るゝこと能はざるべし。然らば何故同じく抽象的の性質を帶びるFが場合

によりて之に伴ふfにかくの如き強弱の差異を生ずるかは趣味ある宿題なるを以て後段に詳述するところあるべし。

（參考書としては Lombroso の *Men of Genius*; James の *Religious Experience*; *Lives of Saints* 等適當なるべし。）

而して此種の情緒が精神及び肉體に及ぼす影響は Vision と云ひ、Ecstasy と云ひ、Rapture と云ひ、Catalepsy と云ふ。其の著しく生理的なるを見ても如何に其力の猛烈なるかを知るに足らん。近世の名家 Ruskin が美の本源を神の屬性に置けるも必竟其fの強きが爲ならずんばあらず。氏の說の大要を擧ぐれば、

(1)彼は無限の美を以て神の不可解性より流れ出でたるものとす。

彼は天地の相接する廣大の地平線に對し浮かび來る感想を述べて曰く、「此情は海其物より受くる感に比し遙かに純なるものにして、其昔磯の小高き丘を降り、空にふるゝ一條の地線を眺め、美しき海洋に對するより以上の喜びを感じたるが、後年に至つても猶此樂しみを忘るゝこと能はず。されども、これにも勝る美感を以て萬人の共に仰ぎ瞻るものは、出る日、入る日の光、または綠の空の裾に狼火の如く燃ゆる深紅の片雲なりとす。此情、前者に比し更に銳しとは云はず、されど其深さに於て勝ること勿論にして、塵界と隔離したる非肉體的希望に富めることも疑ひなか





るべし。此情は單に端莊なる人を動かすのみならず、如何に無頓着のものも亦之に對して判然たる印象を受けざることなし。」(*Modern Painters*, Vol. II. pt. III. sec. I. chap. v.)

(2)彼は統一の美を以て神の可解性より流れ出でたるものとす。

曰く凡そ關係、合同の現象は、すべて正にして且快き感情を伴なふものにして、此合同、聯關により神の屬性たる統一を窺ふことを得べし。又曰く凡そ人類の力は協同、集結より生じ、其樂しみは好意の相互交換に存し、すべての關係は更に創世主なる中心に集まり、これと完全の合同を全くするものとす。(Chap. vi.)

(3)彼は靜止の美を以て神の不變性より流れ出づるものとす。

熱情、變化、充滿、努力等に反對して、休止は永遠の心及び力の特色なりとす。これ卽ち造られたるものの "I become" に對する、造るものの "I am" なりとす。(Chap. vii.)

(4)彼は均齊の美を以て神の正義不偏性より流れ出づるものとす。

(5)彼は純の美を以て神の精力性より流れ出づるものとす。

彼は聖書の句を引用して曰く、「神は光にして、暗きところなし。神は光なり、されども其光は美の普遍性を完全に具有する光なり。而して存するや、點に於てにあらず、流布的無限の狀態に於てす、又靜にして騷がず、又變ずることなし、又純にして混ずることなく壓せらるゝことなし。

されば此情は快感にして神性をよく發揮し得たるものとす。」(Chap. ix.)

(6)彼は適度の美を以て法によりて統ぶる神の性より流れ出でたるものとす。

彼は物體に自制的自由あるは愉快なる現象なりと論じ且曰く、神は如何に獨斷的且矛盾的方法に於ても事を成し得る能力を具へながら、なほ常に其全能の自由に一種の制御をおき、吾人が法と呼ぶところの調和的手段に由り動くものなり。

余はこゝに此說の可否を論ぜんとするものにあらず、又其の完全なりや否やを檢するものにあらず。たゞ彼等耶蘇教徒が所謂神に屬性を着せ、此屬性を具有する自然物も亦美なりと論ずる主旨を興味ありと思ふのみ。無論彼が列擧したる不可解性、可解性、不變性、不偏性等の性質は其抽象的なるにもかゝはらず、皆吾人に多少具はるところのものにして、從つてこれ等に幾分の情緒を附し能はざるにあらず。去れども、これ等に「神」(Divine)なる一語を冠して見よ、一語を冠すると同時に全く吾不關焉の性質となり了らん。神とは抽象の極なり、此極端の抽象體をとり來つて其屬性の有無を以て自然物體の美の量を定むる秤となさんとす、吾人の冷靜なる批判を以てすれば其何の意たるやを知るに苦しむ。然るにも關せず、此屬性を標準として自然界物象の美的價値を定めんとす。此一事會以て宗教情緒が一般民心を如何に强烈に支配するかを見るに足らん。





超自然Fが强きは斯の如く、知的Fが弱きは前に述べたるが如くにして、而も雙方のFが等しく抽象的傾向を有するは少しく奇異の感なきにあらず。若し此疑義に就き一言する事なくんば、余がさきに下せる概則(文學的內容は具體的なればなる程情緒を惹き易し)を打破するに似たり。多少の辯明を要す。

心理の作用は、(原)もと反射運動を以て始まること學者の定論なり。反射運動は盲動的にして意識せる目的を有する理なし。然れども其盲動なるものが自ら生存の目的に適應することは、其物の生存しつゝある事實にて充分に證明せらると云ふべし。さればかゝる反射運動は一種の無意識的目的に向つて作用するものにして、しかも其境遇其他の種々條件につきては毫も介意するところなし。此反射運動に次ぎて來るべきは本能にして、これ亦著しく器械的性質を帶ぶるものなり。而してある一定の程度に進みたる生存體にありては此本能の活動不要に歸するにかゝはらず、其運動は依然として器械的に持續するものとす。約言すれば上述の反射運動、本能行爲は共に一種の構造より生じ來るものにして、其器械的なる又融通の利かざる點が兩者に共通の性質なりと云ふを得べし。而して後者は前者を總合したる結果なるを以て、これをまた複反射運動と名づけ得べし。されども生存漸く複雜となるに從ひ、これ等の器械的作用は幾多の障害不都合に遭遇し、何者かこれを意識的に指導するにあらざれば生存の目的上自滅を招くに至ること明らかなり。而

して此必要に應じて現はれたるもの卽ち知力にして、これ幾多の經驗を重ねて得たる適應的手段に外ならず、世に云ふ習慣を意味するものなり。而して更に進みて行動と其結果を明晰に意識して處置するものを實用判斷力と名づけ、合理的なる點に於て其效力、習慣の上にあり。かくの如く論じ來りて其最後に置くべき能力は所謂普遍的判斷力にして、これ卽ち過去雜多の經驗を總合して案出したる未來の指南車とも目すべきものなり。

反射運動は意識に上らざるものなれば暫く措き、第二の本能作用は吾人の構造に固有なる刺激に對する反動なれば其力の强大なること勿論なり。而して習慣に至りては前者の如く遺傳的に物體の構造に編みこまれたるものにあらざるを以て、其猛烈の度合は到底本能に及ばざれども第四に來るべき實用判斷に比すれば尙强しと云ひ得べし。而して實用判斷は其力に於て普遍的判斷に勝るものなり。斯の如く吾人人類の心的發展を尋ぬれば、本能の自然的變遷を待つて進步したるものにあらず、全く知力が經驗を利用して本能其物の發達區域を脫却し、常に其先驅をなせしものなること明白なり。而して本能的Fは最强のfを有し、習慣的Fこれに次ぎ、これに次ぐに實用的判斷を以てし、普遍的Fのf最も弱きは事實なり。近く譬喩を設けて云はんに、同情、若しくは同類相憐むの理は、恐らく生物界に共通の本能にして、同族相食み鬪爭殺人一日として絕えず間なき此修羅の浮世にも、事實はよく人類の聚合性を證し、母は其子の爲に身命を拋つて悔いず。





本能に伴なふfは常にかくの如く强大なり。而して實用的判斷の一例と稱し得る親切なるものは如何。これ何人も是認して實用しつゝある尋常一樣の道義に外ならざれども、時には或結果を意識して其目的のため一個人に對する一種の手段たるの意を含むことなきにあらず、其力の純にして粹なること到底本能的fに及ぶべくもあらず。最後に來るべき普遍的判斷、例へば大義名分、或は正義なるものを見よ。滿天下は一見此兩義に支配せらるゝが如き觀なきにあらざれども、正義は常に情實に服すること、古往今來歷史の告ぐるところにして、其の徒らに高尙の主義として存するのみにて、伴なひ來るfは甚だ微弱なるを驚かざるを得ず。Kantの言なりしと覺ゆ、「世の中に親切の情は珍らしからず、されど正義に至りては誠に稀に見るところ」と。宜なるかな、由來判斷力に乏しき女性にありては生涯正義の何物たるやを解し得ずして世を去るものさへ夥しき數に上るべし。猶、進んでは所謂學者と稱するものの倫理說の如き其時代の最高判斷に基づけるものなること明らかなれども、到底之を實踐履行するの不可能なるは事實の證明する所なり。これ其理論的に合理なるを知りつゝ、吾人の心卽ち情的中心を飛び離るゝこと餘りに大にして、之に伴なひ進む能はざるに由るならん。(Hobhouse, *Mind in Evolution* 全部を參照すべし。)

今飜つて宗教的Fなるものを檢するに、現代の西洋人が所謂神と稱するものは一種の最高概念にして、これを名けて無限と云ひ、或は絕對と云ふ。されば此Fに伴なふfは決して强大なるべ

き理なきにもかゝはらず、宗教的fは最も強大を極むるものの一なること一見甚だ奇異の感なきにあらず。只其理由を宗教的Fの性質及び發達のうちに求めて始めて首肯し得べし。

今の所謂神と稱するところのものは一面に於て知的渇望より出立して凡百の現象の原因をこゝに集合せしめたるものの如し。(吾人は知識的に其合理なるや、否やを問ふものにあらず。)されど更に他の一面に於て神は人間に固有なる情緒のうちより湧き出でしものなることも亦疑ひの餘地なきに似たり。由來人類の行爲の終局目的は其根柢に於て常に人生其物に存したるは明らかなり。而して人生其物が根本目的たるが故に天然界の物體にあれ、或は同種の人類にあれ、兎に角此人生に何等の貢獻を敢てするものを好み、又之を賊害するものを憎むは人類の共有性の一つなり。しかして此憎むべき破壞勢力偉大にして吾人の格鬪を許さざる時は、此憎みは一變して恐怖と化し、恐怖は時にまた崇拜となつて己の力の及ばざるを告白して他の機嫌を損せざるをつとむ。かの Comte が說きし如く、智力未だ幼稚なる世にありては人間は己と同じき意志を己と同じからざる無生物に附加する性を有す。更に一步を進むれば之を己と同じき者に附す、これ卽ち英雄の崇拜せらるゝ所以なりとす。而して尙一步を進むれば之を自己以上の神なるものに附與す。從來の神にして發達しつゝある彼等の知力を滿足せしめ得ざるを自覺するや、遂に自己とは全然異れる全智全能の無形物を拉し來りて之に同樣の待遇を與ふ。彼等旣に猛烈なる生死の源頭より出





立して、此猛烈なる情緒を自然物に與へ、人間に與へ、偶像に與へ、無形の小神に與へ、最後に全智全能の神に與ふ。與へらるゝものの知力の發達と共に抽象化せるにも關せず、情緒其物は依然として生死源頭より出立せる猛烈なる世襲の情緒なり。かくの如きを以て此際に於ける人間の情緒は眞面目にして、重大なり、永久の生死こゝにかゝると信ず。而してこれと同樣に此等の大力量を假に自己に具へたりとせば、如何に得意なるべく如何に氣樂なるべきかを思ひ、やがて賞歎、渇望の情となり、相合して一種異樣の優勢なる情緒として現はるゝものなり。

見よ。吾人が爲さんと欲して爲す能はざる力を自然界に見出だせば、吾人は此力を賞するが爲に自然界を神なりと讃美す。又吾人が爲さんと欲して爲す能はざる力を同胞のうちに認むれば、吾人は同胞を賞する念よりして其同胞を神なりと呼ぶ。かくて吾人が有し能はざる力を所謂神に認むれば、吾人はそを賞するの念より、そを所謂神なりと信ずるに至る。此徑路により考ふれば、草木の神は吾人の性質を投出してしばらく之に附與せるに過ぎずして、其性質は全く吾人と同一なるにあらずや。英雄の神には吾人を投出するの必要なけれども、其性質は依然として吾人のそれなりとす。されば所謂神と稱するところのものの屬性も亦吾人の性質の投出に外ならず、たゞこれを誇大にして不可能を可能に改めたる迄のことなりとす。吾人の性質は有限なり、有限は境界あるを意味す、然るに物に限あるは吾人の欲せざる所にして、吾人は日夜無限の境に渇望の眼

を放つものなり。今吾人の腦中に宿る此無限性をつかみ出して空に向つて抛ち去れば、こゝに吾人は神の無限性を造り得たるなり。又吾人は常在を欲し、全能を欲すれども、此願を遂ぐるの術なし、故に此願望を蒼空に向つて放射する時神の常在と全能とを創造し終るものなり。吾人はまた、四角にして圓を兼ね、三角にして菱形を兼ねたしとの理想を有す。この理想を天上に吹き上ぐれば瞬刻の下に神の絶對性は成る。

神とは英雄を無限に廓大したるものにして、英雄は神の縮圖に過ぎず。又百姓の神は穀物を司りて農民の理想に叶ひ、軍神は弓矢八幡にして武士の理想を顯揚するものとす。かくの如く神の性格は當代英雄のそれに相應し、英雄の性格は更に當時社會の好める主義にかたどるものなりとす。(性格の變遷につきては Crozier, *Civilisation and Progress* 三二五頁以下を參照すべし。)

要するに如此神とは吾人がなさんと欲して、なす能はざる理想の集合體たるに過ぎず。されば神は人間の原形なりと云ふ聖書の言は却て人間は神の原形なりと改むべきなり。是と同じく、かの極樂なるものも吾人が現實の世に飽き足らず、此實在界に於て求めて得る能はざる慾望を充たさんが爲、是等渴望の念、理想の考を放射して建立したるものなり。卽ち自然界に對する慾望の極致を結晶せしめたるもののみ。されば此慾望の變遷に伴なうて極樂の模樣漸次趣を異にするものなり。情死するものの極樂觀は一蓮託生の世にして、酒呑の極樂は酒の井戸のあるところな





るべし。Plato の極樂は『理想共和國』にして、More の極樂は『無有國』(Utopia) なりとす。Dante の極樂は *Paradise*, Rossetti の極樂は、かの *Blessed Damozel* の住むところなるべし。又 Milton のそれは『失樂園』四の卷に描かれし Eden の花園なりしならん。

かくの如く神と云ひ極樂と云ふ、皆吾人の案出に外ならず。Carlyle も亦類似の意見を其著に述べて曰く「凡そ吾人が神に對する敬意は、英雄に對するそれと質に於て相同じ」と。更に偶像教に關して說くやう、「吾人は今日に於て此偶像教なるものを殆ど理解すること能はず。假にかゝるものの存在し得たりとせば、吾人はたゞ驚異の念に打たれ到底之を信ずること能はず。苟も兩眼を具ふるものにして、かくの如き愚昧の敎理に信仰を委ね、これによつて世を送るは狂人を外にして得がたきことなるべし。」然り神を實在すと考へ、此形なきものに信心する現今の耶蘇敎國人より異敎を見れば、そは無論不合理なるべく、了解し難きところなるべし。されども神を知らざる吾人にとりては兩者に大した差異あらざるが如し。尤も Carlyle とても此邊の消息の幾分を下の數句に洩らしたる跡あり。「然れども、人間には常に暗黑の一部ありて、これを照らすに途なし。このこと昔も今も隔てなし。」後年第二の Carlyle 世に出でて耶蘇敎を以てまた此暗黑にして照らし能はざるもののうちに算入することなくば幸なり。

兎も角も以上の理により吾人が神に對する情緒は直接に吾人の第一目的たる人生其物に密接の

關係を有するが故に、知力分子增加して神の屬性が遠く發展して遂に漠然と意義なきに至れる今日にありても、其强烈の幾分を保存し得たるなり。これを表にて示せば、

自然界物體 (F) ; 英　雄 (F') ; 偶像教の神 (F'') ; 耶蘇教の神 (F''')
f ; f ; f ; f

かくの如く神の觀念は知識の發達と共に推移したるものなれども、此間常にfは變化することなくして附着し來れるものなり。然るに反之第四種の知識Fに至りてはかくの如く密接に人世と關係することなきを以て、其fも從つて第三種のfの如く强大なる能はず。故に第四種Fは抽象の度に應じて其f著しく減少するものとす。强大なる宗教的Fを有せる耶蘇教に於てすら、純抽象的神のみにては效力の意外に弱きを見るや、人間なる聖母を擔ぎ來れる時代もあり、知識的に其無能なるを見て取るや、人間と神との媒介者にして合一體なる耶蘇を以て其眞髓となせり。耶蘇とは取も直さず有限の世より無限の界に進む掛け橋の用に供せらるゝなり。すべて皆これ物を具體化してこれに伴なふ情緒を大にせんと計るに出でしに過ぎず。

以上に於て余は第三種の材料即ち所謂超自然的事物を代表するものとして宗教的分子を選み、而してこれに强大なる情緒の附着する所以につき一應の解說を試みたり。偖宗教的材料は固より此種の重なる代表者たること勿論なれども、單に之を以て第三種の材料の全體を覆ふものなりとする能はず。余の所謂超自然的材料中には單に宗教的、信仰的材料を含むのみならず、凡ての超自然的元素即ち自然の法則に反するもの、若しくは自然の法則にて解釋し能はざるものを含めばなり。例へば、(1)古來小說詩歌の材料として使用せらるゝ幽靈、*Hamlet* の幽靈、*Macbeth* の幽靈、*Richard III* の幽靈、*The Bride of Lammermoor* 中 Alice の幽靈等、(2) *Macbeth* 中の妖婆、Rossetti の *King's Tragedy* 中の妖婆、(3)變化、妖怪、Horace Walpole の *The Castle of Otranto*, Mrs. Radcliffe の *The Mysteries of Udolpho* 等、(4)或は Coleridge の *Christabel* 及び *Three Graves* の如き、又は Keats の *Lamia* の如き、Tennyson の *Lady of Shalott* の如く、或は近時有名なる小說 *Aylwin* 中の不可思議分子、或は Yeats の詩中にある神祕的分子の如き、(5)或は Jane Eyre と Rochester との間に起る人間の感應とも稱すべきもの、或は Charles Reade の *The Cloister and the Hearth* 中にある Gerard と Margaret との間に生ずる同樣の關係の如き、或は比較的明瞭にして且凄味の少なき Shakespeare の *A Midsummer Night's Dream, The Tempest*, Fouqué の *Undine*, Meredith の *The Shaving of Shagpat* の如き皆余が所謂超自然的材料のうちに計入すべきものとす。故に前に述べし如く一つの宗教的成分のみを取るときは、勿論一種の代表物を捕へ得たりと云ふを得べきも、これを以て未だ其全般を盡くし得たりとは云ひ難し。

而して此種の超自然的現象が一般に強烈の情緒を引き起すに足ることは、開明の今日、是等が立派に文學的内容として存在するによりても明白なりとす。固より知力を以て判ずれば是等現象の或ものは全然不合理なること論をまたず。然れども知的方面よりの觀察は必ずしも常に情緒的方面より來れるものと平行に進み得ざること前に述べたる如し。凡そ冷靜なる判斷より得たる事項の外は何ものも吾人の腦中に容るゝ資格なしと云ふは、吾人を以てたゞ理窟一遍に感じ又行動すと誤解する愚人の見なり。靜かに思ひ潜めて成れる考の外は決して文學に入る可からずと云ふものは、これ根本的に文學の何物たるやを解し能はざる輩と云はざるべからず。文學は上述の如く感情を主腦として立つものなれば、如何に篤理の伏在することありとも、感興の之に伴なふことなくば文學上全く死文字にして三文の價値だになきこと明らかなり。道學者は文學者の作爲するところを見て煙花風月の閑文字なりと評すれど、吾人文學を修むるものより彼等がなすところを評すれば誠に合理的勃窣の閑文字たるのみ。閑文字とは目前に有用ならざるものを云ふにあらずして人を動かす力なき文字をさすものなり。而して詩歌文章の價値は其合理なると不合理なるとよりは寧ろ其情緒を起すに足るべき事物若しくは境遇を捕へ得るか、得ざるかに歸着す。合理なるが故に感興を引き、感興を生ずるが故に文學的材料たるの資格ありとするは可なり。されど不合理なり故に感興を引くことなしと云ふに至りては、これ誠に事實を誣ふるの甚しきものと云





ふべし。若しそれ、感興あれども不合理なるを以て開明の今日文學の一要素たる値なしと云ふは、これ科學と文學と兩者を混同したるものなり。吾人が文學に待つ要素は理性にあらずして感情にありと云ふ義を忘却せるものにして、例へば尺度を以て液體を量らんと試みるの類なるべし。今當下の問題たる此超自然的現象の如き其不合理なるは余輩といへどもこれを認めざるにあらず、されども是等は同時に感興を喚起すべき要素を具有することを是認せざるべからず。而して其の感興を引くの切なる、よく一面に於ける不合理を償ひ得るものなるを信ず。是即ち開明の今日と雖も尙是等不合理的現象が文學的内容の一角を占むることを敢てし得る所以なりとす。

吾人は由來種々の能力を有す。而して吾人が是等の能力を適宜に活用せしむるときは一種の快感これに伴なふものにして、かの知力の如きも人間の能力の重要なるものなるにより、これを適當に滿足せしむることは固より愉快なるべきこと明らかなり。かの科學者の研鑽に報ゆる愉快の一部分の如き正にこれに過ぎず。凡そ第四種の知的材料が文學的内容として價値ある所以も、其一部分はこゝに存するものなり。されば合理的材料を以て文學的ならずと云ふは誤りやすき言にして、要は喚起し得る情緒の多少によつて其文學的内容としての位置を確定すべきものとす。

かの浪漫派の特色の如きも亦實にこゝに存す。彼等は其全身全力を捧げて情緒の誘起につとめ、其極遂に他を顧みるの暇なきに至る。之に反してかの十八世紀の文人が平々坦々の途を濶歩して

毫も鬼窟裏の生計を營まざりしが如きは時勢の然らしむる所とは云へ、其佳所は決して埋沒すべきものにあらずと雖も、たゞ責むべきは彼等が情緒を誘ひ出さんが爲に合理の郭壁を越え能はざりし一事とす。Addison が Spenser を評する語のうちに、

"Old Spenser next, warm'd with poetic rage,
In ancient tales amus'd a barb'rous age;
.....
But now the mystic tale, that pleas'd of yore,
Can charm an understanding age no more."

と云へり。理解力は單に文學の一部分に對してのみ有效なること、及び所謂 "Mystic" として輕蔑せるものが理解力に比し遙か優勢なることを忘れたる評言と云ふべし。

さて超自然的材料に對する辯護も大概は言ひ盡くしたれば、これにて筆を擱くべし。要するに以上余は第三種内容の主要項目として擧げたる宗教的Fがfに富む如く他の神祕的現象も同樣に輕蔑せるものが理解力に比し遙か優勢なることを忘れたる評言と云ふべし。

さて超自然的材料に對する辯護も大概は言ひ盡くしたれば、これにて筆を擱くべし。要するに以上余は第三種内容の主要項目として擧げたる宗教的Fがfに富む如く他の神祕的現象も同樣に輕蔑せるものが理解力に比し遙か優勢なることを忘れたる評言と云ふべし。

さて超自然的材料に對する辯護も大概は言ひ盡くしたれば、これにて筆を擱くべし。要するに以上余は第三種内容の主要項目として擧げたる宗教的Fがfに富む如く他の神祕的現象も同樣に輕蔑せるものが理解力に比し遙か優勢なることを忘れたる評言と云ふべし。





不可思議の何たるを辨ずる今日に當りて文學者特に浪漫派の作家が好んで此種の材料を使用するは決して知力に訴へて架空の妄說を信ぜしめんとするにあらざること勿論にして、また話題の進行上缺くべからざるものと思惟するにもあらざるべし。而も之を用ゐるは强烈なる情緒を讀者の心中に喚起せしめて讀者を吾が術中に釣りこむの手段たるに外ならず。吾人は能く彼等の猾手段を觀破しながらも遂に此手段に罹らざるを得ず、否好んで馬鹿にせられ、馬鹿にせられて、感謝するものなり。恰も酒客が妄りに他人の饗應を受くるを危險なりと心得ながら盃の前に置かるゝとき、遂に之を辭するの意志消滅して危險に身を陷すとは知りつゝも太白を擧げて滿引するが如きものなるべし。Moulton なる人の近著 *Moral System of Shakespeare* 中に *Supernatural Agency in the Moral World of Shakespeare* と題する章あり。著者の說によれば沙翁の描ける超自然的動作は毫も篇中人物の發展にはげしき影響を及ぼさぬ由なり。換言すれば *Hamlet* の幽靈、*Macbeth* の妖婆等はわが力にて Macbeth, Hamlet 等の意志全體を支配するものにあらず、たゞ以前より用意ある處に現はれ來り是等の人々の心線に觸るゝ言動をなすに過ぎず。彼等は所謂超自然現象より幾分の影響を受くること勿論なりといへども、決して其素因或は其大原因をこゝに有するものにあらざるなり。「或は問ふ人あらん。超自然力に與へられたる權能かくの如く微弱なりとすれば、これを作中に採用したる效、果して那邊に存すべきやと。然れども沙翁劇に於て超自然力

の役割は決して作中人物の爲に設けたるものにあらずして、全く聽衆に對する一種の用意たるに過ぎず。凡そ劇の效果を大ならしむるに必要なること豫知にしくものなかるべし。かの飾なき地味の散文史に於てすら平々凡々たる事實の羅列に次ぐに其全篇に伏在する一原則を指示する時は、こゝに躍如たる興味湧出するものなれば、況して效果を至要とする劇文學に於て詩人が歷史以上の手段をとり充分に超自然力をかり來りて、事件の進行中に未來の閃光を與ふるは、誠に至當のことと云ふべきなり。而してかく豫知せられたる未來の光にすかし見る時自然にして整然たる事件も爲に一種奇異の色彩を帶ぶるに至る。之を幽玄の色彩と云ふ。」（三〇九頁）

然り此說は一應尤もなり。されども超自然力の效力は劇の原則を舞臺的表示法にて說明するに存すべく、たゞ單に劇一篇の豫知を與ふる爲なりと云ふに至りては多少首肯し難きところあり。Moulton の說によれば此豫知あるが故に讀者に幽玄の色を觀ぜしめ又は談諧の調子を喚起せしむと云ふが如し。談諧の調子は暫く措き、幽玄の色が豫知より生じ來ることは勿論なるべきも、此幽玄の色を系屬的のものとして却て豫知を其眼目となすに至りては少しく本末を誤てる感なき能はず。余の視るところによれば詩人は此幽玄の感情を引き起さんが爲に、豫め超自然力の口を通じ豫知を讀者に吹き込むものにして、卽ち豫知と名づけんよりは寧ろ超自然力のおもはくとも云ふべきものを知らしむるのみ。實際上劇の進行は如何にと注目する時、其仕組が自然的に、しか





も明晰に毫も超自然力と關係なきが如くに發展して、遂に結局超自然力のおもはくが一步ごとに實現せらるゝが故に吾人は此超自然力の魔力に撲たれ、其優勢を認むると同時に一種不可思議の感情を起し來り遂に全く催眠術の權能に身を委ぬるものなるべし。これ超自然力が文學に於て價値を認めらるゝ所以にして、かの豫知云々の如きものは別にとり立てて云ふに及ばざるべし。單に豫知と云へば、（勿論劇の場合に於て）知的作用にして決して情的方面に多大の影響を有するものにあらず。假に豫知は劇に於て重要の條件にして、之を與ふるには超自然力に俟たざるべからずとせば、凡ての劇は必ず讀者に此必須なる豫知を備へんがため此超自然力を採用せざるべからず。然るに事實はかくの如くならずして、豫知を具へて觀る劇も、これなくして觀る劇も別段感興の程度に於て差ありと考へ能はざるなり。卽ち知る、超自然力の效能は單に知的の豫知を與ふるためにあらずして、一種人間以上に勢力あるものを拈出して、これを吾人の心底に潛む弱點に植ゑ附け、この急所に突き入りて吾人を壓迫するに過ぎざることを。吾人は神の前に憐伏せざるべからざる如く凡ての超自然力の前にも叩頭せざるべからざるなり。彼等は吾人の未來を知り、又吾人の運命を司る。彼等は目に見えず、避くるに由なし。彼等は觸るゝを許さず、ひしぐに術なし。彼等は出沒自在にして到底吾人の如何ともする能はざる難物なり。恐れ入らざるべからず、閉口せざるべからず、ぞつとせざるべからず、一言にしてこれを掩へば、大なる情緒を以て甘じ

てこれが爲に催眠せられざるべからず。沙翁が用ゐし超自然力も全く此種の催眠術を吾人に施さんとの策略に外ならず。吾人をして此催眠術を受けしむるは、吾人をして純一無雜の念を以て劇に對せしむる猾手段に過ぎず。されば吾人は *Macbeth* を觀、*Hamlet* を觀て歸る時、かくの如く愚昧の幽靈、妖婆が勢力を有する此等の劇が何故にかく迄吾人の趣味を引き得たりしかを必ず自ら疑ふことあるべし。これ催眠術たり、猾手段たる所以なり。

たゞ玆に注意を要することあり。人生は文學にあらず少なくとも人生は浪漫派文學にあらず、實際は浪漫的詩歌にあらず。かの浪漫派文學の通弊は單に劇烈なる情緒を主とするの結果往々年少者を誤りて文學其儘を現世に實行せしめんとす。これ過れり。人世其物は必ず情緒を主とするものにあらず、又これを主として送り得べきものにあらず。こゝに氣がつかぬは憂ふべきことなり。超自然現象に關しても亦然り。詩は詩なり、人世は人世なり。詩の感興を强ひて人生に押し廣げんと試むるは誠に吾人天賦の知的能力を侮辱したる擧にして、此知能が吾人世存の目的に如何に缺くべからざるものなるかは、此世に於ける知能の發達の跡を尋ねて明らかなるべし。感情は文學の特に尊重するところのものなること云ふを待たず、されども此文學觀をとり來りて直ちに人世に適應せしめんと企つるは、社會を顚倒或は退歩の何れかに導くものとす。余は浪漫派の詩を愛す。されどこれを愛するは詩として愛するものにして、決してこれを人生に適應せしめん





と欲して愛するにあらず。世の文學の弊を說くもの、時に文學者の弊と讀者の弊とを混同することなきやを疑ふ。

# 第二編　文學的內容の數量的變化

以上は文學の四種材料を分類し其各特質を論じ又其相互の關係を說明したるものなり。これより少しく着目點を移して此四種の材料は數量的に如何なる原則の下に推移しつゝあるかを辯ぜんとす。卽ち此等の材料は全量に於て增進するものなりや、減退するものなりや、將たまた靜止の狀態にあるべきかを檢せんとす。

此問題に立ち入るに先だち、少しく溯りて文學的內容の何たるやを今一應注意して詮議するの必要を認む。余は講義の始めに當り凡ての文學的材料は(f+φ)なる形式に改め得べきものなることを述べたり。而して今文學の材料の增減如何を論ずるに當りては勢ひ(f+φ)の一分子たるFの增減如何を究めざるべからず。若し此Fにして增減性を具有するものなりとせば、次に論ずべきは此增減的Fに伴なうてfは如何に移り行くものなりやを考へざるべからず。かくの如く此二者の性質を明瞭に決定し得たる後、吾人は始めて文學的材料の數量的變化につき云々することを得





るものとす。

## 第一章　Fの變化

Fは如何に變化するか。今一個人の生涯を通じて觀察する時は、吾人の赤子たりし頃より幼年、少年、青年時代を通じて吾人の認識力の變化は二樣の特性につゞめ得べし。第一は識別力の發達にして、第二は識別すべき事物の增加なりとす。單に一個人の生涯に就いて然るのみならず、人類發達の長歷史も亦如此き影響を蒙るものなりと信ず。所謂識別力の發達とは個人の幼時又は人文未開の世にありては同一のFなりと考へられたるものが漸次時期を經過し經驗を積むに從ひて二個以上のFなることを發見し來る意にして、卽ち一個のFなるものを識別力の發達に伴なひてF′F″F‴F⁗樣の如くに分岐し得るに至ることなり。此點よりしてFは時と共に增加するものなることは疑なきが如し。また所謂識別すべき事物の增加と云ふ意は、人間は一日一時にても餘計に生きながらふれば、それ丈新しき事物に接觸するか又は少なくとも間接になりとも之を見聞する機多かるべきを云ふものなり。幼年時代の見聞と不惑の年に達しての見聞とは到底比較し難かるべく、又草昧時代の生民のFと開明の今日の人民のFとの間に其數量上著しき相違あることも疑ふ餘地

あらざるべし。今前に述べたる文學的材料の一々につきてFの如何に增加するかを檢せんに、

(一)感覺的材料。(a)初は夏草の綠も常磐木の綠も、綠に二樣あらずと思ふ人も少しく注意を銳くすれば其間に非常の差あるを知るべし。酒の如き、煙草の如き、或は香水の如き沉香の如き皆然り。これを個人の一生に適用すれば幼時は識別力を缺き漸く經驗を積むに從ひて此能力次第に發達し、かくして感覺的材料著しく增加するものなりとす。此理を推して、文化の進まざる古代の民よりも幾十世紀の經驗を重ね來りたる今日の人類が其感覺的材料の量に於て勝れたること無論なりとす。(b)見聞の事項が增加することにつきては多言を要せざるべし。亞弗利加の沙漠、亞米利加深林の有樣、Himalaya 連山の莊嚴、黃河の汎濫等、昔時に在りては極めて狹隘なる一地方の天地自然に接觸せるものが二十世紀の今日に至れば地球上あらゆる隅々に單純なる事實として手にとる如く受けとらるゝに至る。

(二)人事的材料。(a)昔時は凡ての怒憤も「怒」の一字にて遺憾なく辨じたるべし。されど今日は怒に幾通りの階級あり、これ等を表出するが爲種々の文字を用ゐるに至りしも全く識別力增進の結果と云ひ得べし。曰く怨恨、義憤、激怒等其數甚だ多し。(b)吾人は識別力の發達により解剖的手段をとり、かつては同じと信ぜられし人事人情に多樣の差違を認むるに至ること上述の如くなれど、一方に於ては上代が經驗し得ざりし事項(人事の)を今代に至つて知覺すること多し。或は





地球の或部分が感じ能はざるものを時を同じくして生存する他の一部が雜作なく知覺すること多し。例へば野蠻の國民は自然界に對して簡單なる恐怖の情を起すにとゞまるべきも開明の民は複雜なる崇高感想を以てこれに臨むべし。而して此崇高なるものは人間の能力の漸進につれ新しく附加せられたるものに外ならず。

(三)(四)も亦同じく上述の二樣に發展するものとす。

## 第二章　f の變化

さて吾人の知覺力は其識別の點に於て又其增加の範圍に於て如此絕えずFを增加しつゝある間に、これに伴なふべきfは如何にと云ふに、これ亦一種の意義に於て增加しつゝあること疑なし。今暫くfの增加につき論ずるところあるべし。余案ずるにfの增加は三つの法則に支配せらるゝものの如し。卽ち(1)感情轉置法、(2)感情の擴大、(3)感情の固執これなり。

(一)先づ第一の感情轉置法より說明すべし。心理學にありて最も趣味ある事實の一つは、かの「情緖の轉置」なる現象とす。こは一物AなるFにつきてあるfを起す時、ある原因より此fは他物BなるFにも附着し來る現象を指すものなり。卽ちFとfとの間に起る一種の聯想なり。卑

近の例を擧ぐれば雛鷄が毛蟲を見てつゝき驚き逃ぐることありとせよ。其後此雛は同樣の場合に遭ふ時決して同樣の徑路をふむことなくして、しかも同一の終點に達するものなり。卽ち、

視ること
聽せこと　——逃走
不快

なる徑路は變じて

視ること
不快　——逃走

となるべし。かくて雛は啄みと不快とを連絡せしむるのみならず、視ることと不快とをも完全に連絡せしむるに至る。これ卽ち不快なる感情を啄みより視覺に轉置せるものとす。又人間は慾望を充たし得て始めて滿足の念を生ず。然るに此滿足の念を充慾より轉置して金錢に及ぼし、金を得れば直ちに滿足の念を生ず、これ明らかに轉置法の一例なり。又"Cockney"とは倫敦市の下層人民の使用する言語を名づけたるものなるが、由來此の"Cockney"其物に上等、下等の感じが伴なふ理なし、たゞ吾人は下層人民に對して生ずる嫌惡の念を彼等の言語に轉置して遂に"Cockney"其物を耳にして不快の念を生ずるに外ならず。世に亡き母の遺物、結婚の指輪等は皆此原則に基づける情緒を有するものとす。其物自身の貴きにあらずして其主に對する情緒を轉置したるが爲のみ。文學の講義なれば文學の例二三を擧ぐべし。かの Boccaccio の『十日物語』第三日五の物語、Isabella の悲劇の如きは、よく此法則を說明したるものなり。Keats は後年これを詩にあらたため *The Pot of Basil* と題しぬ。Isabella と云ふ





美人と其薄命の戀人 Lorenzo との物語なり。Isabella はもと名ある家に生れ、二人の兄弟と樂しく月日を送りしが、此乙女に Lorenzo とよぶ戀人あり。相思の兩人は一日も早く居を共にせんと願ふ。男は其日を待ちて

"To-morrow will I bow to my delight,
To-morrow will I ask my lady's boon."—St. iv.

と心のうちに思ふ。女も亦

"Until sweet Isabella's untouched cheek
Fell sick within the rose's just domain."—St. v.

と迄焦がれ居たりしに、Isabella の兄弟腹黑き男にて、Lorenzo 風情に妹を嫁らすは不承知なりとて百方離間の策を案ずれども、到底尋常一樣にては二人の愛情を揉み消すこと難きを知り、遂に男を林中に誘ひ人知れず之を殺して、女には其男外國に渡りたりと僞る。然るに不思議にも殺されし Lorenzo が Isabella の枕邊に立ちて、夢に

"I am a shadow now, alas! alas!"—St. xxxix.

と告ぐ。こゝに於て Isabella は已が兄に欺かれたるをさとり、翌朝年たけし乳母と共に夢にうつりし林に分け入り戀人の埋められしところを探りあてゝ掘り返し、其死骸の首をきつて吾家に携

へ歸り、偖其髮を黃金の櫛にて梳り、そを香高き布に包みて植木鉢に埋めて、上に羅勒(メバウキ)の樹をうゑたりと。

"And she forgot the stars, the moon, and sun,
And she forgot the blue above the trees,
And she forgot the dells where waters run,
And she forgot the chilly autumn breeze;
She had no knowledge when the day was done,
And the new morn she saw not: but in peace
Hung over her sweet Basil evermore,
And moisten'd it with tears unto the core."—St. liii.

(序ながらかの英國 "Pre-Raphaelite" 派の畫家 Holman Hunt の畫に此可憐の Isabella が鉢によりかゝる様を描けるものあり。)

此場合に於ける情緒轉置の徑路を示せば、

(1) $\frac{\text{Lorenzo}}{f}$; (2) $\frac{\text{生首}}{f}$; (3) $\frac{\text{植木鉢}}{f}$.





となるべし。又更に一例を重ぬれば、かの Pope の *Eloisa to Abelard* 中にある左の一節の如し。Eloisa は Abelard に訴うて曰く、

"Soon as thy letters trembling I unclose,
That well-known name awakens all my woes.
Oh name for ever sad! for ever dear!
Still breath'd in sighs, still usher'd with a tear."—ll. 29–32.

既にFが前の次第にて增加し、又fが此轉置の法により甲より乙、乙より丙にと際限なく推移し得る以上は、(可十f)なる文學的材料は常に增加するものなること明らかなり。

(二)の法則は假に名づけて感情擴大の法と云ふ。即ちfの移推にあらずして、新しくFに新しきfを附着し其結果として文學の內容を富ましむるの意なり。先に知的材料の特性を述べたる時云へることあり、知的材料は其性質抽象的なるを以て、從つて吾人の日常生活に直接の關係少なく、從つて多量の情緒を起すこと難しと。即ち科學者の法則又は概念の如き、少なくとも人間一般に日常直接の利害關係少なき故を以て、結果としてfを誘ひ得ざること屢なるを說けり。然るにも關せず、六ケ敷き理論といへども漸々人の腦髓に染み込みて(假令これが吾人の生命を支配することなくとも)これを普通一般の智識の程度迄に通俗化するときは、此Fは新しきfを得て

文學のうちに席を有するの權利を得來るものなり。例くば

"So careful of the type she seems,
So careless of the single life."—Tennyson, *In Memoriam*, St. lv.

の如きは疑もなく進化論者の說くところを約言したるものにして、十七世紀の人には此Fなし、從つてこれを(F+f)に改むるに由なし。十八世紀に於ても亦然り。而して十九世紀の人々と雖も進化論の始めて世に出でて、單に學者の一部にのみ認識せられ未だ一般に普及せざりし當時に在りては、此說は一種のFありてfなきものなりしならん。然るに現今に至り此新Fは漸次普通人間の認識するところとなり、いつの間にやら一種のfを伴なふに至りしなり。

"Gossip must often have been likened to the winged insect bearing pollen to the flowers; it fertilizes many a vacuous reverie."
—Meredith, *Lord Ormont and His Aminta*, chap. vii.

の如きも植物學上の智識が一般に認識せられ普通化せらるゝに至りて、始めて文學の材料となり文界を賑はすものなり。又左の如きも同種類のものとす。

"Man is that noble endogenous plant which grows, like the palm, from within, outward."—Emerson, *Representative Men*.





以上は單に知的材料につきてのみ云ひ得ることにあらず。死は吾人の最も忌むところなり。吾人は生ながらへんが爲に苦勞し、生ながらへんが爲に離艱す。吾人の所爲は凡て皆生の爲なり。故に死と云ふFには常に不快、恐怖等のfの伴なふこと萬人共通の性なるが如きも、世の中が今日の如くに遷移し來る時は進んで死を希ふ者を生ずることあり。即ち死なるものに從前とは全く反對のfを時と場合により附着し得るに至りしなり。生を苦しと觀じて死を喜ぶ者、生を恥として死に就く者、生甲斐なしとて死を欲する者等其趣は多樣なり。詩人Swinburneは「死」なるものに此種のfを附して一詩を詠じ、佛のBalzacは同樣の題目の下に短篇小說を作りたることあり、題して *Doomed to Live* と稱す。武門の名折れなりと皆々先を爭うて死に赴く時、只一人留まつて先だつ人を介錯すべき運命、即ち生の非運に際會せる心情の苦惱を描き出だせるもの故に之をかく題したるなり。我國昔時の歌舞伎に繰り返されし月並の筋なり。

これ等は決して轉置にあらず、只新しき一種のFにfを附着し來るに過ぎず。故に之を擴大法と名づけたるなり。

(三)は轉置にも、擴大にもあらず、假にこれを情緒の固執法と名づく。即ち(a)F其物が消滅するか、或は(b)F其物にfを附着する必要なきにもかゝはらず因襲の結果習慣上より從來のfを附着

せしむるを云ふ。

(a)例へば、約束の如し。約束より生ずる感情は約束の相手が死すると同時に消滅して然るべきものとす。然るに吾人が依然として生前、死後同一の感じを以て約束に對す。傳へ云ふ、昔季子劍を贈ると約して還れば其人既にあらず。即ち劍を約せし人の墓にかけて去りぬと。劍を墓にかくるも何等の效あらざるべし、されども彼の情緒が友の死後に於ても生前に於けるが如く約束の履行を彼に促したるが故にかゝる擧動に出しのみ。更に一例を擧ぐれば、婦人の貞操の如し。貞女兩夫に見えずと云へど、凡そ夫死すれば妻の貞操の義務當然消滅すべきは明白ならん、然るを世は婦女をして兩夫に見えしめず、女も見えざるを以て得意とし名譽となす、これ全く其情緒の持續するを證するものなり。余が「情緒の固執」と名づくるはこの意味なり。

左に貞操につき好例あり。Thackeray の著 *Vanity Fair* の女主人公 Amelia は其夫なる George Osborne の死後よく其貞節をまもり、大に讀者の同情を買ふは人の知る所なり。此時 Wm. Dobbin なるものありて頻りに云ひ寄れども Amelia は中々に承知せず "It is you who are cruel now," Amelia said with some spirit. "George is my husband, here and in heaven. How could I love any other but him? I am his now as when you first saw me, dear William." (Chap. lix) など云ふところ頗る吾人を感動せしむるが如し。然るに其後遂に Dobbin の切なる情





にほだされ再婚の運びに至るとき、吾人は何となく興味の索然たるを覺えざるを得ず。正當に考ふれば夫死して十年の後、他家に嫁するは毫も責むべきことにあらず、世の常の女は夫を失ひて半歲一歲にして早速後添ひの選定に着手するにあらずや。吾人はこれ等の事實を日常目擊しながらも、尙此段に至りて何となく龍頭蛇尾の感を生ずるは、貞操の內容たるFが消え去りて後も尙執念深くfのみを固執するに外ならず。

(b)即ちF其物は消滅せず又從來の如き情緒を之に附着するに及ばざる場合に於ても、依然としてfの固執すること多し。今の世の舊臣と稱するもの舊藩侯の前に叩頭平身して從前の封建的舊態を改めざるが如き、或は前回に反覆論じたる超自然力の如く、知力より之を點檢すれば毫もこれに對して情緒を惹起すべき理なきに拘らず、これ等を一度文學的材料として使用する時は、舊來附着し來りし頑強なる情緒は遂にこれを切斷し能はざるが如き凡てこの現象に屬す。

但し此固執の法に反して、Fの古くなるにつれ、昔これに附着せるf次第に減少することも一つの法則として認むべきなり。永き時間を通觀すれば、かゝる例は一二にして止まらざるべし。文學書中にても古人の感興を引きし者にして今人の之を引き難きあり、(西洋人にはfを誘起すれども、吾人にはfの起り來らざるFあるが如く。)かの流行唄の如き一時は强大のfを有すれども、一定の時期を經過し盡くせば全くfを失ふものなるが故に何人も最早之を誦することなきに至る。

されど如此fを失ふものは固執のものに比し其數に於て著しく劣りたるを以て(F+b)は依然增大の方向にあるものと云うて可なり。

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | a | | | | | |
| 2 | a | a′b | | | | |
| 3 | a | a′b | ab′c | | | |
| 4 | a | a′b | ab′c | abc′d | | |
| 5 | a | a′b | ab′c | abc′d | …e | |
| 6 | a | a′b | ab′c | abc′d | …e | …f |

偖以上の所論にて情緒(Fに附着する)は數に於て增加し、又F其物も增加するを以て(F+b)なる文學的材料は性質に於て增加すべきものなること明らかなり。之を表により示せば上表の如し。

圖中竪なるは固執を示す。卽ちaなる情緒は第一期より六期迄固執すれば(F+a)なる材料は終始貫きて存在するものなり。さて此aが第二期には轉置法により(F+a′)となり同時に擴大法により(F′+b)なる分子を生ず。漸次かくの如くにして第六期に至れば其文學の材料たるべきもの上圖不定形の底の諸室を集めたる內容なりとす。(Waldstein の *Lecture on the Extension of Art* なる小冊子あり。序に一讀するを可とす。)





## 第三章　fに伴なふ幻惑

今迄はf其物をたゞ漠然と論じ來り、fが文學の缺くべからざる必須要素なること丈は大抵述べたりと雖も、f其物の性質の細目に亙りては未だ論及するところあらざりき。

第一に考ふべきは文學のfと一概に云へばとて、(1)讀者が著書に對して起すf、(2)作者が其材料に對して生ずるf、及び其材料を取り扱ふ際に生ずるf、(3)には作者の材料たるべき人間、禽鳥のf（無生物にはなきものと假定して）、以上三種のfを區別せざるべからず。

第二には人事界又は天然界にありて直接經驗をなす時のf及び間接經驗をなす時のf、卽ち記憶想像のFに伴なうて生ずるf若しくは記述敍景の詩文に對して起すfとを區別せざるべからず。

第一は今論ぜず。第二は數言を費やして諸君の參考に資せんとす。如何となれば直接經驗より生ずるfと間接經驗より生ずるそれとは其強弱及び性質に於て異なること勿論なればなり。但し此差違あるがために普通の人事若しくは天然界にありては留意せざる若しくは留意するに堪へざる、聞きづらき、居づらき境遇等も、是等を一廻轉して間接經驗に改むる時は却て快感を生ずる

に至るなり。卽ち普通美しと思はぬもの、若しくは肉體的、精神的に斥くべきものも一旦文學中のfとなりて現はるゝ時は、吾人はこれを毫も怪しまざるのみならず、時としては之を歡迎するの傾向あり。病的なる人、若しくは病的なる社會に限らず、何れの世、何れの國にも、かくの如きfを文學にありては病的と見做さざることあり。余は今暫く此趣味ある問題につき概說するところあるべし。

さて此相違を來す原因は果して那邊に存すべきかを考ふるに凡そ二つあり。而して、また此二つ以上何等の原因を求むべからざるなり。二つのうち一は著作家自身が與へられたる材料に對する態度、卽ち此場合にありては與へられたるFは實際に於ては愉快を與ふるものならず、寧ろ愉快よりは不快を與ふるFを如何に取り扱ひ、如何に觀じ、如何に表現するかによつて異ならざるべからず。余はこれを名づけて「表出の方法」と名づく。二には此敍述詩文を玩味する批評家若しくは一般讀者がこの作家の手を經て與へられたる材料に對する態度、卽ち直接經驗に於て毫も趣味を生ぜず、又趣味あるも實際上願はくは避けたしと考ふるか、又は之に遭遇する時、逃退卻走せんとする程の事物を作物の上に讀む時は非常の興味を以て前後を忘却して賞美するの態度を云ふ。換言すれば直接經驗が間接經驗に一變する瞬間に於て黑が忽ち白と見え、圓が急に四角と化し去るの謂なり。余は之を「讀者の幻惑」と名づく。





第一の表出の具合と云ふことは、大にしては作家が文學的內容に對する態度、更に一層これを大にすれば作家の世界觀、人生觀の如き、重要問題となるものなり。こゝには混雜を避くるため暫く此種の大袈裟なるものを措き、只作家が醜劣、不快なる材料を如何に取り扱ひ、一種の幻惑(Illusion)を吾人に與ふるかにつき一言せんとす。

(I)感覺的材料。(一)聯想の作用にて醜を化して美となすの表出法。

此場合にありては物體其ものは實際經驗に於て不愉快なるも、聯想により結びつけられたる觀念と共に表出する時、其觀念若し美なれば、吾人がこれに對して生ずるfも亦美となるものなり。例へば

"He read, how Arius to his friend complain'd,
A fatal Tree was growing in his land,
On which three wives successively had twin'd
A sliding noose, and wav'r'd in the wind."—Pope, *The Wife of Bath*, ll. 393-6.

の如し。此意味はもとより三人の妻女つゞきて樹上に縊死せりと云ふにありて、實に不愉快極まる事件なり。然れども此詩につゝまれたる此事實は其不快の念を償ふに足るのみならず、何となく美しき感じさへ生ずるを注意すべし。是直接に縊。ると云ふ字を點出せずして、sliding noose

を twine するといふ比較的間接にして且滑かな感じを聯想せしむる言語を用ゐたると、waver'd in the wind なる藤の花、かづら抔の風裏に揺曳する様を聯想せしむる字句を使ひたるが爲め、意味は音を縒りたるなりと合點せらるゝにも關せず、音縒りに關する醜惡なる光景は眼前に浮び來らぬなり。Pope の詩の原文なる *Canterbury Tales* に於て、Chaucer は

"Than tolde he me, how oon Latumius
Compleyned to his felawe Arrius,
That in his gardin growed swich a tree,
On which, he seyde, how that his wyves three
Hanged hem-self for herte despitous."—Chaucer, *The Wyf of Bathe*, ll. 757–61.

と云へり。その如何に露骨なるかを見よ。大膽にも hanged hem-self と云ひ放ちたるに過ぎず。余は決して hang なる文字を文學に容るべからずと主張するものにあらず。されども其表出の明瞭直接なるだけの不快を減少すること少なし。

(二)事物其物は醜なれども、其描き方如何にも巧妙にして思はず其躍如たる様子にうたるゝ場合。Spenser が其大作 *Faerie Queene* に於て Duessa (「虚僞」) の醜形を極力寫し出だせるが如し。

"Then, when they had despoil'd her tire and caul,



Such as she was, their eyes might her behold,
That her misshapëd parts did them appal;
A loathly, wrinkled hag, ill-favour'd, old,
Whose secret filth good manners biddeth not be told.

Her crafty head was altogether bald,
And, as in hate of honourable eld,
Was overgrown with scurf and filthy scald;
Her teeth out of her rotten gums were fell'd,
And her sour breath abominably smell'd;
Her driëd dugs, like bladders lacking wind,
Hung down, and filthy matter from them well'd;
Her wrizzled skin, as rough as maple rind,
So scabby was, that would have loath'd all woman kind.

Her nether parts, the shame of all her kind,
My chaster Muse for shame doth blush to write;
But at her rump she growing had behind
A fox's tail, with dung all foully dight:
And eke her feet most monstrous were in sight;
For one of them was like an eagle's claw,
With griping talons arm'd to greedy fight;
The other like a bear's uneven paw:
More ugly shape yet never living creature saw."

—Spenser, *The Faerie Queene*, Bk. I. can. viii. st. 46–8.

「生あるものにして其醜さ、これにまさるものなし」と詩人自らが述べし如く、如何さま穢らはしき描寫なり、若し目のあたりに此怪しき妖女を見たらんには吾人の不快は如何あるべき。詩人は「虚僞」なるものを忌み嫌ふの結果、これを Una と對照せしめて、かく極力其醜穢を描き出だせるものなるべし。而して讀者も亦其反映の妙を感ぜざるにはあらざるべきも、其反映少しく極端に過ぎ、悉く會心の敘述とは受け取り難かるべし。されば吾人が此際感ずるfは醜態の描





寫其物の技巧上に落ち來らざるべからず。いかにも、旨く言ひ悉せり、流石は名筆なりと三嘆する邊に感興を生ずるに外ならず。一言にて云へば此感興は詩人の技に伴なふものにして內容其物に關する事多からざるは明かなり。

同樣の例は此外 Keats の (*Endymion* 卷三 *Addine Edition* 一五七頁) の Circe 一族の敘述及び Shelley の *Lavn and Cythna* の疫病の慘狀を描きし節に於て見出だし得べし。

(三)または假令描かれたるF其物は醜なる故に實際これを見れば直ちに嫌惡の念を生ずるにもせよ、其Fの奇警にして非凡なるに感心して、間接にこれを經驗する時、吾人がこれを面白しと興がることあり。*Macbeth* の妖婆が鍋に煮る「蟾蜍の汗よりとりし毒、沼に住む蛇の肉、蛙の趾、蝙蝠の毛、犬の舌、毒蛇の舌、梟の翼、龍の鱗、狼の齒、妖婆の木乃伊、鱶の胃、暗夜に掘りし失鳩答の根、猶太人の肝、山羊の膽液、月蝕に引き割りし水松、土耳古人の鼻、韃靼人の唇、賣婦が溝に產み落として縊り殺せし赤兒の指、虎の腸、猩々の血、九匹の子豚を共食ひしたる牝豚の血、殺人犯の縊られし絞臺の膏」を想像せよ。美しきにあらず、快よきにあらず。只一種の興味に支配せられて、直接經驗の時のそれの如き嘔吐の念は起らざるべし。而して間接經驗の際に吾人を支配する興味を解剖すれば(I)同種類のFを、かく迄重ね得たる手際より起る面白味。(II)奇警、警拔のFなりとの感より來る面白味。(III)妖婆なるFと此等のFとの調和より來る面白味等に

歸着せざる可らず。

(四)醜怪なる物を寫すに方り其醜惡なる諸特質に介在せる或一部分(卽ち美なる部分)のみを拾ひ集めて描出し其他を知らぬ顏に除き去るとき一種の興味を讀者に與ふるは多言を費やして辯明するを要せず。一例を擧ぐれば Shelley の蛇の敍述は左の如し。

"The snake,

The pale snake, that with eager breath
Creeps here his noontide thirst to slake,
Is beaming with many a mingled hue,
Shed from yon dome's eternal blue,
When he floats on that dark and lucid flood
In the light of his own loveliness."—Shelley, *Rosalind and Helen*, ll. 113–19.

最初二句は美しと云はんよりは少々氣味惡き方なれば玆に言ふの必要なけれども、後四行は一讀綺麗の感を全節に襯着するを見るべし。しかも之を解剖すれば、畢竟蝮蛇が具有する特點のうちに就て其美なるもののみを列擧し、其美のために凡て其他の醜なるものを隱蔽し去りたるが爲めに外ならず。かくして人を螫し人を嚙み毒を吹き舌を鳴らすの恐ろしさも醜くさも、いつか背





景の暗き方に押しやらるゝが故、誦讀の際不快の聯想を作用せしむるに先だち、先づ其美しき敍記の爲めに一棒を喫し了せらるゝものとす。

(II)人事 F。(一)前述の規則はまたこの種の F にも應用し得べきものとす。單に應用し得るのみならず前よりは一層有力に善を惡とし、惡を善となすことを得べし。凡そ自然界の事物にありては上述の如き一種の手品によらざれば驚を烏と云ひまぐること甚だ困難にして、かの美醜の如き時代により、個人により遷移流轉すること勿論なりとするも、八十の老婆は十八の乙女に比して美しからざること明らかなれば、この區別を顚倒すること至難なり。然るに人事上の材料に至りては如此判然たるが如きうちにも其實甚だ曖昧の分子を含むものにして、込み入りし區別をなせば際限なく、又紛密なる議論を試むれば究極なしと雖も、普通に所謂道德なるものをとりて檢する時は正反對の性質が同時に同樣の資格を以て人の欲する所なるを發見すべし。凡そ普通の人の有せんと欲する精神的狀態は概して二列に配することを得るものにして、其配せられたる兩面は各反對の性質なることを發見すべし。今其發達の歷史を講ずるは固より余が領分にあらずと雖も、吾人の精神狀態の據つて來るところは進化の結果として社會の組織上餘儀なくせられたるものに相違なく、一面には自家の保存のため、他の一面には他人の保存を目的として發生したるものの如し。昔時耶蘇出でて人の子のために磔に上りしより以來、

世は謙讓、親切、仁惠等を除き他に道德と稱すべきものなきが如く心得るに至りしが、何ぞ知らん、こは皆他人のためにする道德にして己の爲にする道德は吾人日毎に實行しつゝあるにも關せず人は高閣に束ねて顧ざりしなり。十九世紀に至りNietzscheなるものあり、始めて君主たる道德と奴隷たる道德とを區別し、耶蘇教徒の道德は奴隷の道德なるを以て、宜しくこれを捨てて、別に君主の道德を樹立すべしと叫びぬ。彼の云ふところは其外面に奇妙なる皮を着て忽然世に出現したるを以て、大に一世を聳動したりと雖も其實は毫も珍らしきことにあらず。彼の所謂君主の道德と奴隷のそれとは、社會の存在以來雙々相竝んで進み來りたるものに過ぎず只君主の道德は左迄之を唱道するの必要無かりしを以てたゞ無意識に之を等閑視し來りしのみ。今余は之を事實により示さんが爲試みに吾人の精神作用の對偶の或物を列擧すべし。意氣は謙讓と對し、大膽は內氣と對し、獨立は服從と對し、勇氣は溫厚と對し、主張は恭順と對す。如斯きものは凡て皆流俗の等しく賞揚する性質にして而も其對偶の一は他と全く矛盾せるものなり。一は自己を主として建立せる道德にして、他は自己以外を目的として發達せる道德なり。Nietzscheの語を藉りて云へば一は君主の道德にして他は奴隷の道德なり。

從つて所謂道德は皆二樣の解釋を許す。吾人今かりに耶蘇を描くとせんに、人己の右頰を擊てば左頰を出し左頰を擊てば右頰を出す底の修養を具へ虛懷謙讓にして毫も抵抗する事なき無上有





德の人物と作り上ぐるも容易なり。又は氣魄なく、熱情なく、卑屈優柔にして死に至る迄愚癡を竝べて婦女子の如く神の救を求めたる軟骨漢とも書き上ぐる事を得べし。耶蘇は耶蘇なり。耶蘇は一にして二あるにあらず。去れども此耶蘇を見るの立場の異なるより、此耶蘇を解釋するの見識の一に限られざるより吾人は絕對的反對なる道德的批判を彼に與ふるを得べし。余は事實を曲げ虛妄を列ねて敍述を左右し得るが故にしかりと云ふにあらず。事實其物を列擧するのみにて然あるべしと云ふなり。

凡そ彼が具有したりし謙遜、溫厚等の性質は一方に於て吾人の賞讚に價するものなると同時に、他方面に於ては吾人の最も輕侮する性質なるべきを以てなり。耶蘇は暫く措く。吾人今Coriolanusの如く氣宇宏濶にして他人に身を屈することを知らざる英雄の傳記を綴るとせよ。吾人は又其實傳を曲ぐることなく事實其物を直寫して、然も容易に彼をして名譽ある英雄の地位を失はしむることを得べし。吾人は云ひ得べし、彼は剛慢なり、尊大なり、不遜なり、强情なり、沒〔理〕性の喧嘩好きなり、一旦怒を發すれば其怒を抑へて其身を全うすることを知らざる愚人なり、人に頭を下ぐることを解せざる頑固一筋の武骨者なり、變通も知らねば遣り繰りも心得ず、腹を立つれば妻と母とを棄てて敵國に味方する如き輕佻の輩なりと。然り事實はそれに相違なきなり。彼の性行の中心たる意氣及び勇氣の反對なる從順、溫厚等の性質にも亦意氣及び勇氣と同じく人

心を引き寄する魔力の存する限りは絶代の英雄も吾人が一枝の筆を以て彼等が何百年來占め來りたる記念臺の上より拂ひ落さるゝ事を忘るべからず。此故に凡そ著者は毫も不正の手段を用ゐることなく堂々たる春秋の筆法により、同一の人を或は尊敬せしめ、或は嘲笑せしめ、又時には輕侮せしむるの威力を有するものなり。故に篇中の人物に對しては全く生殺與奪の大權を掌ることの尚專制獨裁の帝王に似たり。これ余が人事Fの區別を以て左程整然ならずとなす所以なり。

文學中此種の好例決して少なしとせず。Tennyson の Arthur が其妻 Guinevere に對する所作を見よ。彼は始めより夫として毫も間然するところなき所謂紳士の手本なりき。犯せる罪を恥ぢて Guinevere の Almesbury の尼寺に逃れ入りしとき彼はこれを追踪して、浮世を隔つる僧扉を敲いて、罪ある妻を見たり。此時王の語調は毫も亂るゝことなきのみならず無量の親切と丁寧とを含めるが如し。彼は其不貞の妻の一髪だも傷くるに忍びざるが故に（"Lest but a hair of this low head be harm'd") 終生護衞の兵を與へんと約し、且曰く、

"I cannot touch thy lips, they are not mine,
But Lancelot's: nay, they never were the King's.
I cannot take thy hand; that too is flesh,
And in the flesh thou hast sinn'd; and my own flesh,





Here looking down on thine polluted, cries
'I loathe thee:'"—*Guinevere*, ll. 551–6.

君子は其罪を憎みて其人を憎まずと云へば Arthur は世界に於る最高級の君子なるべし。詩人は初め Guinevere と Lancelot との戀を理想化し、今又此處に此寺院に於て操を破れる王妃を愼み深き可憐の罪人となせり。それにて差支ありと云ふにあらず。只反對の方面より觀ふ時は、此皇后は不埒なる婦女なり、容赦すべからざる罪人なり、Arthur の優しき言葉に値せざる人物なり。Arthur とても同じ事なり。如斯き場合に立ち至りてかゝる不貞の女性をかく迄庇護するは馬鹿氣たる感なき能はず、一派の人の見識を以てすれば所謂野呂間の頂上なり。されば假に此詩人の態度を一變して其反對の點より同事件を寫して Arthur が寸毫の假借もなく其妻の不義を罰する樣を描くとするも彼は依然として一種の立派たる人格を具へたる Arthur と認められ得べき理なり。勿論かくすれば君子の資格を失ひ上品なる能はざるべきも、其代り彼は未練なき男、女に鼻毛を讀まれぬ人となりて出現すべし。元來紳士と云ひ、君子と云ふは總てこれ表面的通語にして其裏面には多少野呂間、馬鹿等の意味を含むに相違あるべからず。同時に利口なる人と云ふ義を自づから蓄へたるものなり。故に Arthur が Guinevere に對する態度を課題として、吾人は國

王を馬鹿氣たるものとなすも氣の利きたるものとするも要は作家の腕にあるのみ。主我の利害より打算すれば君子とは愚者の異名にして、主他の見地よりすれば犀利銳俊は詐欺泥棒の權化なるべし。要するに人事Fは Fの最も曖昧たるものに屬す。

(二)躍如たる描寫により讀者の興味を喚起するものは、尙感覺的材料の場合と異なるところなし。價値なき不快の人事も其描き方巧みなれば、之に對するもの其內容の如何を偕措き、先づ其作家の技倆に感じ入るべし。例へばかの Thackeray の Beatrice の如く、或は Dickens の Pecksniff, Mrs. Gamp の如し。更に長き纏まりたる作例を擧ぐれば、かの Shelley の *Cenci* の如し。此劇の內容は其根本に於て暴戾無道なる父と其可憐の娘との間に湧き出でたる德義の煩悶なれば、かくの如きものが果して文學的作物として成功し得るや否やは吾人が卽答し能はざる所なり。されども余かつて英國にありし頃、ある人と此劇につき會談したることありしが、其人は是を毫も苦痛と感ぜずと云へり。兎に角天下にかくの如き讀者あるより推せば、此不快の材料も詩人の表出法により幾分たりとも美化せられたるものと認めざるを得ず。

(三)こは作家が不快なる、嫌惡すべき又は自分に都合惡しき部分を除去して敍述に快感を與へしむる場合にして、(一)の場合と相似たるところなきに非ず。其差を云へば(一)はAを寫して讀者にBともCとも任意に思はしめ得る場合にして、此場合にてはAを寫すに其半面を寫して他を委却す





るに由り、Aは讀者によりA′ともA″ともなり得ると云ふ義なり。(一)を例にて示せば、人あり、旅館にて財布を座敷に拋り出して入浴したるため其金を盜まれたりとせよ。之を寫し出す時、此人を褒むるも、責むるも、馬鹿と云ふも、聖人と云ふも作家の勝手次第にして、如何樣にも理窟をつけ得べし。されども(三)にありては人情、人事の複合體より都合よきもののみをとり出して陳列するもの故然らず。今爰に一人あり、其人の生れし當時より死に至る迄の間凡て彼が病氣に罹りたる時の事項のみを拾ひ蒐めて列擧するとせよ、相應健康に暮らしたるにも拘らず此人は恰も病氣に罹る爲め浮世に生れ出でたるかの思あるべし。是作者の取計にて此男を病人化したればなり。又此人の失敗のみをあつめて陳列せば此人は忽ちに失敗家たる定評あるに至るべし。Hugo の *Les Misérables* の主人公 Valjean の半面は慈善家なり、博愛の君子なり、されども其暗黑なる他の一面を窺へば彼は人殺しの兇狀持なり、牢屋破りの大賊なり。Hugo は此相反せる兩面を巧みに結合して此兩性がさも一身に纏まり得る如くに書き立てたるが、假に世に Valjean の如き人ありとせんに、其善き方面のみを寫せば其人は人好きのよき道德的善人となるべく、若し又其暗黑方面のみをとり出す時は其人は最も嫌ふべき道德的に醜穢なる人物と成り終るべし。

一例を擧げん。玆に幼きより叔父の世話にて育てられ、尙其監督の下にある一少女あり。同じ家に傭へる家庭敎師と思ひ思はれしが、此女には襲ふべき巨額の富ありて一方は無一物の貧生な

れば、此緣組は如何にしても不釣合たるを免れず。叔父の耳に入れては事の成就する望なきを知り、兩人竊かに夫婦の約束を結び、かくして約束成りて後、彼等が其所存を叔父に打ち明けたりとせよ。

先づ常識を以て此場合を裁すると假定するに、叔父が彼等の所爲をもて己を踏みつけ己を侮辱したるものと怒るは無理なるべきか。吾人は信ず、天下何人も以上の筋書を見ては兩人の無法を責め叔父の心根を憐まざるものあらざるべし。然るに吾人が作品に對する場合には事實全くこれに反し、吾人は此不埒なる若者二人に眞心よりの同情を寄せざるべからざる樣、作者に餘儀なくせらるゝを如何せん。左に引用したる一節は Louis Moore が Shirley と結婚の約成るの後、叔父の室に赴き告白をなす樣を記せるものなり。

"'Good morning, uncle,' said she, addressing that personage; who paused on the threshold in a state of petrifaction.

'Have you been long downstairs, Miss Keeldar, and alone with Mr. Moore?'

'Yes, a very long time. We both came down early; it was scarcely light.'

'The proceeding is improper——'

'It was at first: I was rather cross, and not civil; but you will perceive that we





are now friends.'

'I perceive more than you would wish me to perceive.'

'Hardly, sir,' said I: 'we have no disguises. Will you permit me to intimate that any further observations you have to make may as well be addressed to me? Henceforward, I stand between Miss Keeldar and all annoyance.'

'*You!* What have *you* to do with Miss Keeldar?'

'To protect, watch over, serve her.'

'You, sir?—you, the tutor?'

'Not one word of insult, sir,' interposed she; 'not one syllable of disrespect to Mr. Moore, in this house.'

'Do you take his part?'

'*His* part? Oh yes!'

She turned to me with a sudden, fond movement, which I met by circling her with my arms. She and I both rose.

'Good Ged!' was the cry from the morning-gown standing quivering at the door.

*God*, I think, must be the cognomen of Mr. Sympson's Lares: when hard pressed, he always invokes this idol.

'Come forward, uncle: you shall hear all. Tell him all, Louis.'

'I dare him to speak! The beggar! the knave! the specious hypocrite! the vile, insinuating, infamous menial! Stand apart from my niece, sir! Let her go!'

She clung to me with energy. 'I am not near my future husband,' she said: 'who dares touch him or me?''

'Her husband!' He raised and spread his hands; he dropped into a seat.

'A while ago, you wanted much to know whom I meant to marry: my intention was then formed, but not mature for communication; now it is ripe, sun-mellowed, perfect: take the crimson-peach — take Louis Moore!'

'But' (savagely) 'you *shall not* have him — he *shall not* have you!'

'I would die before I would have another. I would die if I might not have him.'

He uttered words with which this page shall never be polluted."

—Ch. Brontë, *Shirley*, chap. xxxvi.





全篇を讀みたるものは無論此一節丈を讀んでさへ誰しも若夫婦に加勢して頑固にして戀の何物たるを解せざる無情漢の叔父には何等の同情をも寄する能はざるべし。否此叔父が不意打ちに遇ひ口惜し氣に地團太を踏むを心地よしと思ふなるべく、彼が若き男女の抵抗を受け、嘲笑をかひ、其の年甲斐もなき地位に陷るを見て面白しと感ずべし。されども退いて考ふれば叔父の處置及び其憤怒は果して此の如く吾人の嘲りを値すべきか。また思へ、此等若輩の爲せし仕打ちは左程吾人の同情を惹くに足るべきや。彼等が父として敬すべき叔父に對しての言動は果して禮に缺く事なかりしや。今暫く此會話より身を退けて局外に立ち靜かに此三人の少なくともこゝにあらはれざる半面を商量せよ。叔父は分別ある人にして前後を慮る人なり。決して馬車馬の如く戀一式を能事とする能はざる男なり。よく利害得失を判斷する底の男なり。然るに作者は態と此一面を除去せるなり。反之此一對の男女の動作は戀の熱に盲動するに外ならず、火にも水にも飛び込み兼ねまじき風情なり、彼等の眼中叔父なきは勿論、分別もなく前後の考もなし。如斯き短所は右の會話中にも明瞭に現はれたれども其大半は作者の胡魔化し手段により隱されたるなり。こゝに於てか吾人の同情は單に好色の男女の上に傾き、眞面目なる老人は法外の嘲笑のうちに葬られ去るものなり。

附記す、此例は特に(三)のみを說明するものにあらず、これを以て時には(一)にも用ゐ得ることあ

り。卽ちたとへ除去せられたる半面の性質を現はさずとも、たゞこゝに現はれし會話のみにても多少の潤色を經れば、其意味を變ずることなくして其結果より生ずる情緒を反對になすことを得、卽ち叔父を立派なる人間に、此男女を放逸の徒と感ぜしむるは一寸の匙加減にして、さしたる難事にあらず、讀者は徒らに(一)(二)(三)等の分類に拘泥して混亂に陷ることなきを要す。

(III)超自然的F。(一)宗教的F、其Fは時と國とにより異なること勿論なれど、之に伴なふfは概して同樣なりとす。但し希臘の昔時に於けるが如く八百萬神を朋友の首領と心得しfと、猶太人の如く森嚴なる神に對する恐怖の分子多きfとは、其間に多少fの差異あることは是認せざるべからず。

(二)宗教的ならざる超自然的F、例へば妖怪變化、妖精、妖婆、其他同樣類似のFにつきては其fも各〻特色を有するものなれども、こゝには詳述の餘白なし。由來此方面は所謂浪漫派文學と關係深きものなれば、一應の注目を値すべし。

要するに此第三種文學的內容も(I)(II)と同樣に表出法より來る手加減に觸れ得るものなれども、煩雜なれば一々の詳述を省略すべし。

(IV)知的F。これとても特別に論ずべき程のことにあらず。こゝには思ひつきし二三の點を摘示するに止むべし。





(一)抽象的眞理を示さんとする時、それを他の具體的なる場合と聯想せしめて、此具體の場合に於けるfを其儘、抽象の場合に轉置せしむることあり。此聯想は重に隱譬、直譬の形をとりて現はるゝものとす。

"'Tis with our judgments as our watches, none
Go just alike, yet each believes his own."—Pope, *Essay on Criticism*, ll. 9–10.

此場合に若し此「時計」の譬なかりせば此抽象的理論は單に漠然たる取り止めの付かぬ印象を與ふるに過ぎざりしなるべく、散漫にして毫も味なく、唯白湯を呑む感ありしならん。

(二)內容の抽象的なるにも關せず其纏り方、言ひ廻し方の巧みなるため浮かと釣り込まれて情緒を起すもの。Pope に此例殊に夥し。

"Man never Is, but always To be blest."—*Essay on Man*, Ep. i. l. 196.

"An honest man's the noblest work of God."—*Unid.*, Ep. iv. l. 248.

"True wit is nature to advantage dress'd,
What oft was thought, but ne'er so well express'd."—*Essay on Criticism*, ll. 297–8.

(三)此種のFも時々其半面を除去さるゝことあり。一人は勝手なる概括を試み、他の一人も亦勝手なる概括を試む。此時兩者全く相反對すれども、兩者共に同一の勢力を以て其眞理を主張し得

ること屢なりとす。

此「分子の除去」の説明としては諺言最も便利なるべし。凡そかの諺なるものには大抵反對の意味のもの併立兩存することあればなり。「大功は細瑾を顧ず」の傍には「千丈の堤も蟻の穴から」なる格言あり。而して此兩者は共に無理ならぬことにて、たゞ各自都合よき場合のみを概括したるより如斯矛盾を生じたるのみ。「果報は寢て待て」と云ふ一方には「棚の上から牡丹餅は落ちぬ」と云ふ。我何れにか適從せんと嘆息すべきなり。かくの如き反對の格言が共に廢せらることなくして、兩存して各勝手なる都合よき場合に應用さるゝは極めて妙なりと云ふべし。今少しく西洋の諺を檢すれば、

1. "Women are as fickle as April weather."
「男心と秋の空」
2. "An ugly woman dreads the mirror."
"There never was a looking-glass that told a woman she was ugly."
3. "Revenge is sweet."
"To forgive is divine."
4. "Worthless is the advice of fools."





5. "A wise man may learn of a fool."
"True friendship is imperishable."
"What is friendship but a name……?"
6. "Out of sight out of mind."
"Absence makes the heart grow fonder."
7. "Honesty is praised and starves."
"Honesty is the best policy."

以上は心任せに Christy の諺集より選出したるものに過ぎず、若しこれを秩序的に調査したらんには相反對するもの矛盾するものも頗る夥しかるべし。如斯、大抵のものは作者の意志次第にて黒とも白とも云ひくるめ得るものにして、極端の例を擧ぐれば「教師とは生徒より教へらるゝものなり」「醫師とは人を殺すものなり」などとも稱し得べし。

これより更に進みて、讀者の側には如何なる心理現象ありて如何なる幻惑 (Illusion) を受くるものなるかを論ずべし。

凡そ文學的作品を玩味するにあたりて讀者の態度につき注目すべき事二ケ條あり。換言すれば直接經驗が間接經驗に變化する際二個の重要現象を生ず。

(I)吾人が文學に對する時、一種の感動を受くるは無論のことにして、此際若し此感動なければ屢述べし如く文學の主要成分たる情緒を缺くが故に此文學は文學たる資格を失ふものと云はざるべからず。然らば如此文學の必須要素たる情緒は其強弱の度實地に當りて經驗する情緒と異なるや否や、換言すれば、「情緒の再發」なるものは當下の情緒と如何程の差異あるべきかは講究の値ある問題なりとす。例へば吾人が月其物をみて起す感興と月を詠じたる詩歌を見て起すそれと何れが分量に於て勝れたりやの議論の如し。こは固より其人々の個々の性狀と一方にては作者の表出法の巧拙に伴なうて變化するものなれば、一概に斷言すること容易ならざれど、假に吾人の性質、作者の表出法を一樣と見做す時、余は通常云ひ古したる「百聞一見に若かず」の言は單に知的に適用し得べきのみならず、これまた情緒的にも眞理なることを信ず。非常に驚きたる時、吾人は "My heart thumped upon my ribs" と呼ぶ、誠に適切の語法にして如何にも活動せる樣躍如たり、されども如何に活動すればとて其結果は依然として知的再起にして、到底實地の經驗に伴なふ感に近づき得ざること明らかなり。然るに若し此Fより實際經驗の際に於けるが如きf生ずるものとせば、文學は樂しましむるものにあらずして寧ろ苦しましむるものなるべく、到底讀み切り得るものにあらず。一二の例を擧げんにA. Lang の *Dreams and Ghosts* (九三頁)に氣味惡き一節あり。





"The streets and squares were deserted, the morning bright and calm, my health excellent, nor did I suffer from anxiety or fatigue. A man suddenly appeared, striding up Tavistock Place, coming towards me, and going in a direction opposite to mine. When first seen he was standing exactly in front of my own door. Young and ghastly pale, he was dressed in evening clothes, evidently made by a foreign tailor. Tall and slim, he walked with long measured strides noiselessly. A tall white hat, covered thickly with black crape, and an eyeglass, completed the costume of this strange form. The moonbeams falling on the corpse-like features revealed a face well known to me, that of a friend and relative. The sole and only person in the street beyond myself and this being was the woman already alluded to. She stopped abruptly, as if spell-bound, then rushing towards the man, she gazed intently and with horror unmistakable on his face, which was now upturned to the heavens and smiling ghastly. She indulged in her strange contemplation but during very few seconds, then with extraordinary and unexpected speed for her weight and age she ran away with a terrific shriek and yell."

こは一八七八年秋のさる初曉の出來事にて、これを敍述せる人は病友を見舞うて吾家へ歸る途中にして、記事中の婦人とは中年看護婦風のものなり。この事ありてより後一週間を經て其朋友死亡の報知到着したりと云ふ。しかも其埋められし時は此人に出遇ひしと同じ衣裳を纏ひ、又此人の不在中は此人が今住む部屋に住み居たりと云ふ。

吾人が實際に如斯氣味惡き事件に出逢うたりと假定せんに、其實感は此記事を一讀したる時の感と如何程の差異あるべきか。若し實際と讀書と其感情の强弱の度均しと主張する人あらば、そは文學を樂しみ得ざる人なり。實際と同等の感動を以て、かゝる文學に對するならば文學とは決して面白きものにあらず、却て恐ろしきものなるべし、厭なもの、近づけ難きものなるべし。

又左に引用したる寒中の敍景を見よ。此一節は霜月頃の寒景色を寫し出し、目のあたり見るが如き感あり。然れども見るが如き感じは、見るときの感じと異なるものにして、Fの復起は必ずしもfのそれを意味し能はざるなり。

"The ground was hard as iron, the frost still rigorous; as he brushed among the hollies, icicles jingled and glittered in their fall; and wherever he went, a volley of eager sparrows followed him."

—Stevenson, *The Misadventures of John Nicholson*, chap. vi.





語數は少なけれども其印象の頗る明瞭なるは誠に直接經驗に似たり、如何にも寒げなり。されども「寒げ」なる感は「寒」なる感と其間に判然たる區別を有することを忘るべからざるなり。若しこれを讀みて實際寒さを覺え胴震ひする人あらば讀書とは先づ防寒の用意して後に始めて着手すべきものならん。

元來情緒の復起とは人々により異なるものにして、多くの場合に於て情緒の記憶は殆ど不可能のことに屬す。極めて簡單なる例を採れば、去年の夏と今年のそれと何れが暑かりしか抔問はれし時、正直にそれに答ふるものありとせば、そは必ず先づ其知的部分を復起し、其に情緒の適量を想像的に加味して胡麻化し去るものなり。

或產婦は產に際し夫に向ひ何卒自分を殺して此苦痛より救ひくれよと願へり、しかも其願は眞面目にして淚を添へての懇願なりき。然るに首尾よく難產を濟ましたる後は、自分が命を捨てても免れたしと叫びし其苦痛は果して如何なるものなりしか毫も記憶に存することなかりしと云ふ。此滑稽談は某心理學者が其書中に好例として用ゐたるものなり。

此方面の專門家 Ribot は種々研究したる後、左の如き斷案を下せり。

(1)情緒の記憶は大部分の人々にありては虛無なり。(2)或人々は半ば知的、半ば情緒的記憶を有す。卽ち其情緒的分子は知的狀態の聯想力をかり、たゞ其一部分を想起し得るに止まる。(3)又、